



7632

263. 2-364



1200501352374

始



友納友次郎著

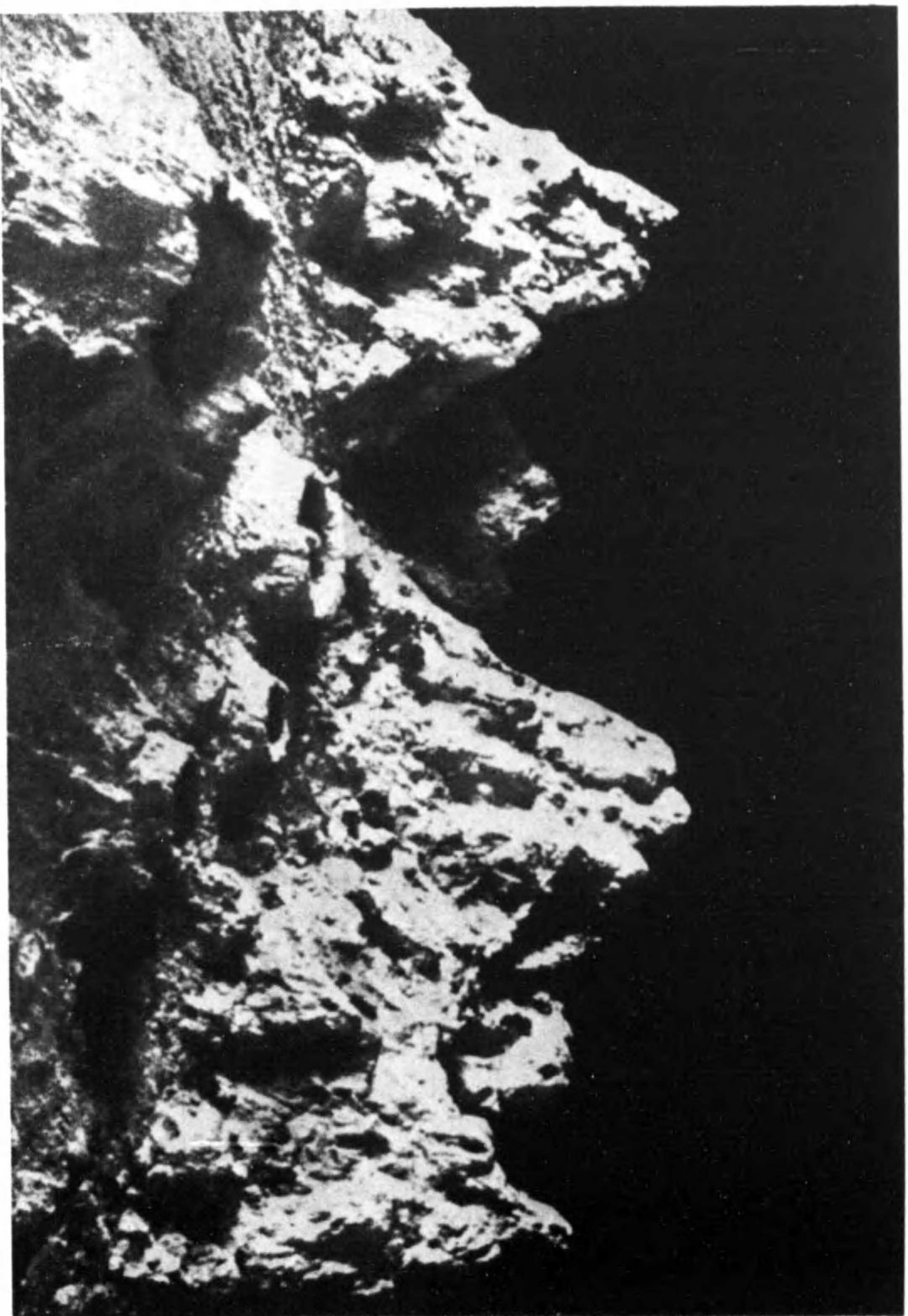
精教
說法

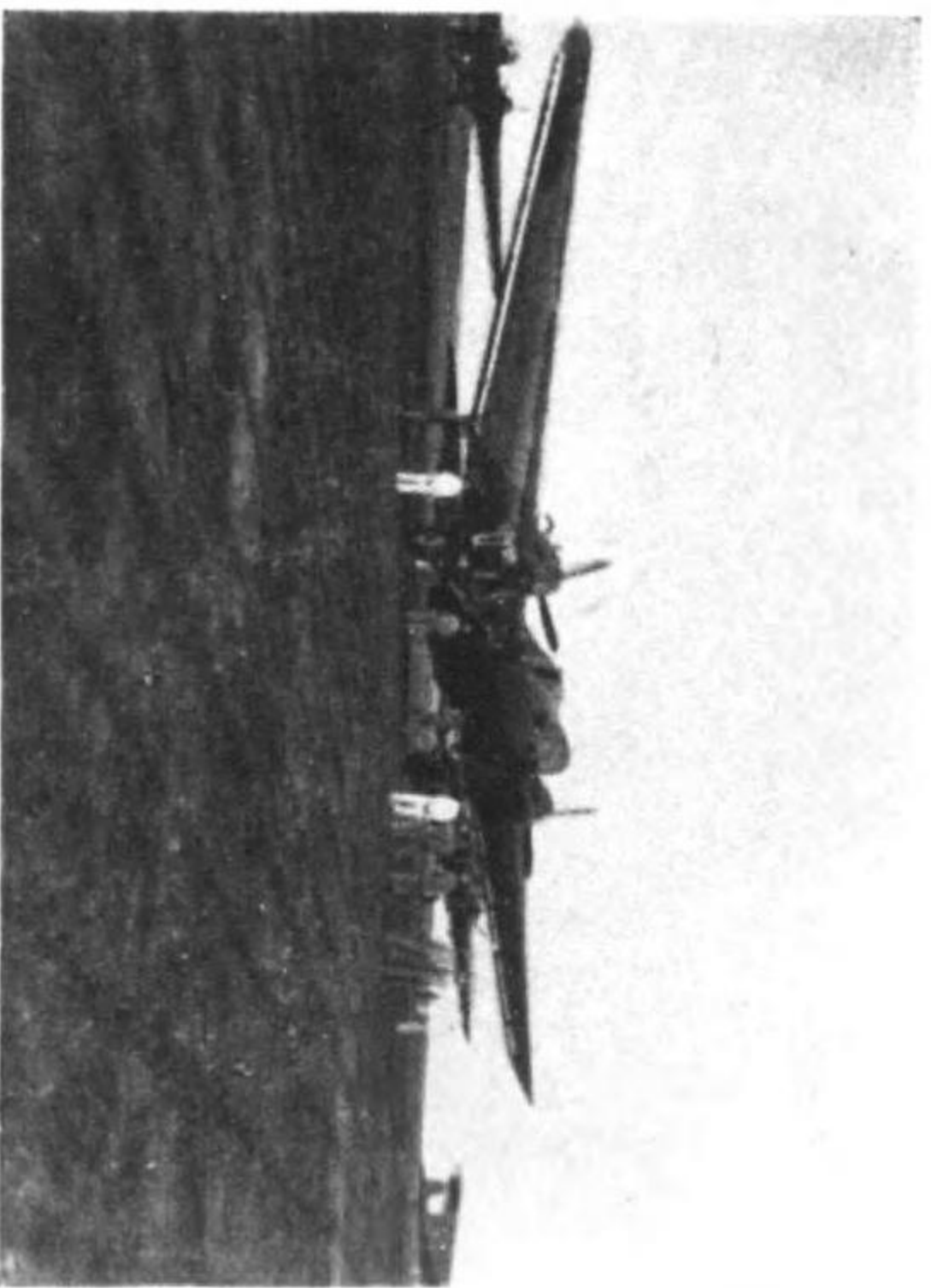
新讀本の指導精神 卷十一

東京 明治圖書株式會社

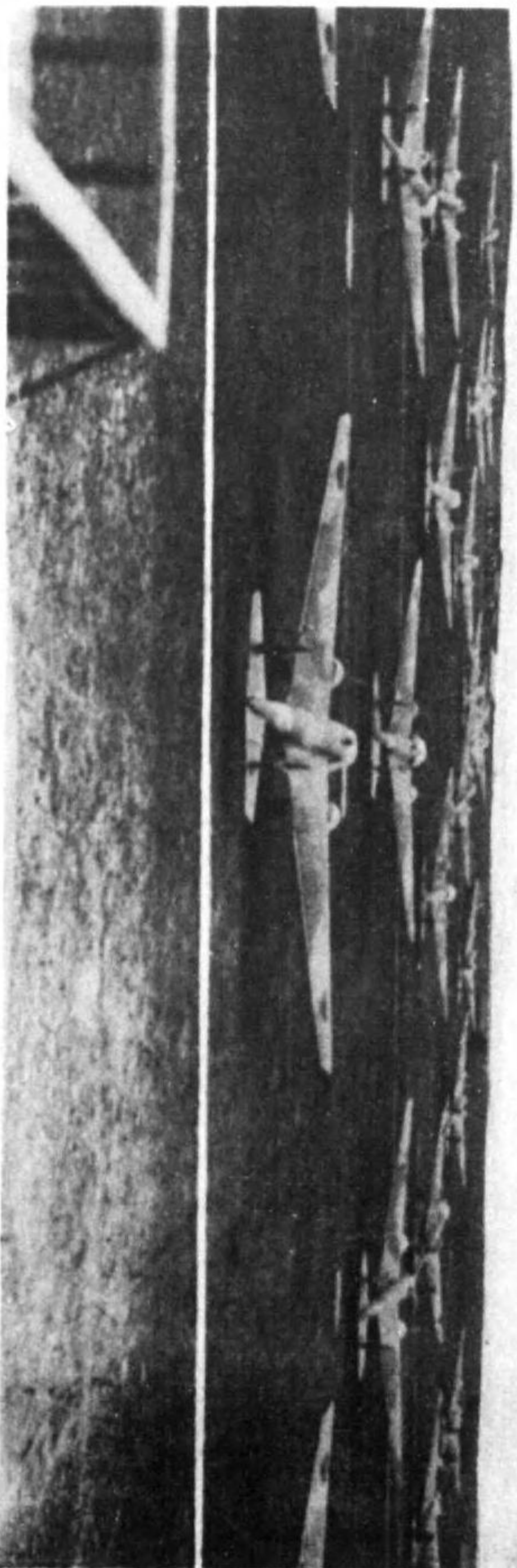


月の表面 (模型寫眞)





上は〇〇基地に於ける我が海の荒鷲隊
下は今次の事變に活躍せる我が荒鷲部隊
(海軍省貸下)



263-2
364

序

讀本も愈々高學年と成り内容・形式共に一段の進境を呈し、方法上の苦心よりも教材研究に専念せねばならぬ様に成つた。特に本巻は最終學年として凡ゆる方面に劃期的な飛躍を見せ、餘程周到な用意が無くては、教壇上に立ち兒童に直面する事が出来無く成つた。従つて本巻は主として此の點に留意し、内容の精査と文の形態的研究に力點を置き、指導形態の整備と之が實踐化とに全力を傾倒する事を念とした。其の爲紙數も豫想外に増加し、在來の九ポイントを以てしても尙且千頁に近き大冊と成り、到底一冊の書物には收め得ない困難に際會するの止む無きに至つた。然も紙價騰貴の今日出版店に對して既卷以上の犠牲を強要するのも無理であり、且又類書の如く定價を上げるのも不本意であるから、碎心熟慮の末非常手段に訴へ、前卷同様是迄新聞紙以外には殆ど類例無き八ポイントと六號のベタ組を用ひると共に行數を増加し、辛くも難關を突破して一巻の書冊に纏める事が出来た。指導書の要否・功罪は人々の見解に依つて今尙區々であるが、我々は茲に其の一部人士の要望を滿たし得た事を喜ばずには居られ無い。

本書を參考せられる諸君の爲に本書の中核たる指導案の骨子とも言ふべき、現象學を基礎とした解釋學的學習過程を採録して、之が學的根據を明確にして置く。

1 第一次直観

與へられた對象、即ち文を在るが儘に見る事、従つて其の態度は主客對立に始まり、漸次に主客融合の絶對境へと進展する。

此の最初の直観は未だ思惟を加へずして物の實相を如實に捉へる事で、夫は意味作用ではあるが、未だ其の真相を具體的に實現した物では無い。

- 1 題目に依る契機と志向
- 2 讀心の觸發・學習動機の喚起
- 3 暗示と示唆
- 4 全課の通讀
- 5 文意の直観
- 6 價値の感受
- 7 最初の印象
- 8 感入・悟得
- 9 即興・直後感
等々

第一次直観に依つて得たる文意は作者の想念に對する直観的な大體の豫想で有つ

て、之が聽て次の分析の段階に於て充實化され、更に發展して第二次直観に入り眞に血と成り肉と爲つて、所謂價値體驗の世界を顯現する。従つて茲で言ふ全體的なものは言はゞ渾沌状態に在つて、其の朦朧不完全なるは言ふ迄も無い。

斯く最始から最後の到達點に對する想定を掲げる事に依つて、個々の歩みに不惑不迷・確實不動の意味が生じて来る。

2 分析

檢證的研究の段階である。第一次直観に依つて得たる結果を確め、更に擴大し更に深化して行く。謂ふ所の充實化とは對象の本質を把握する事である。此の立場に於て我々は必然現象學的方法を用ひねばならぬ事に成る。

此の際若しも最初の豫想が齟齬し又矛盾した場合には、更に繰返して省察を加へる事に依つて、新に豫想を建直さねばならぬ。即ち普通に言ふ見直し問直す事である。斯くて漸次作者の生命層は鮮明にせられ、其の意圖する所も的確に把握される譯である。

1 自然的態度の排除

偶然的・個別的なる物を排除して、端的に意識の本質のみに着眼させる。所謂現象學の還元である。此の如き態度を取る事に依つて、我々は初めて明確なる現象學

的領域に直面する事が出来る。

自然的態度の排除は、凡ての存在を意識の中に還元する爲の準備である。

- (1) 文字語句の理解
- (2) 語意・句意・節意の吟味
- (3) 不明事項の究明
- (4) 機構・姿態の研究
- (5) 構想・作意・表現の研究
- (6) 文段・文脈・思想關係の吟味
- (7) 語法的・文法的考察

等々

エルチエ式分解の弊に陥つてはならぬ。個を通して全の相を観る事、即ち全を孕んだ個の分析的研究である。

従つて此處では一時意識の流れは停滯を來し、主として思惟作用の活動に委するは勿論である。

2 超越的態度の排除

自然的態度を排除して得たる物は超越的對象で有つて、未だ十分に内在化した物

とは言へない。従つて全き意味に於て充實化作用の目的を達する爲には、更に此の超越的態度を排除する事に依つて、二重の還元を經ねばならぬ。
斯くて文其の物の意味を自己の生命の坩堝の中に溶し込む事に依つて、漸次作者の生命層は鮮明に爲られ、魂の純動を的確に把握させる事が出来る。斯うして個々の歩みは全體に依つて意味付けられる事に成る。

(1) 内省

表された意味が我が意識の全系列中に占める位置に就いて、内省し認識する事に依つて明證性は獲得される。斯く超越的立場を離れ靜かに自己を凝視する事に依つて、自己の創造的發展が可能と成る。是迄の享受的なものが自己的なものと成り、客觀的なものが主觀的なものと成る。

所謂内省の世界で、直觀に依つて得た自己の心の状態に明確な體系統一を求めようと爲るのである。従つて其の態度は究明的で有り、考察的で有るのは言ふ迄もない。

- (イ) 内容の深究・事實の吟味
- (ロ) 觀察の精粗・創作意識の確否
- (ハ) 想の展開・表現の巧拙

(ニ) 表現意欲・手法の適否
等々

(2) 自 證

内省に次ぐものは自證である。自證とは主観的なるものが客観的なるものに保證し承認を求めようとするのである。蓋し内省に依つて主観化されたものを客観的な表現に證示する事に依つて、稍もすれば陥り易き獨斷の弊を防止し自他包全・主客融合の天地を開拓しようと言ふのである。自己の心境の中に作者を見出すのである。斯うして作者の心境の全部を展開し得て、其の眞生命に交流し、より高次の直観へと止揚して行く。所謂辯證法的發展である。

(イ) 表現内容の考察・玩味

(ロ) 心の動向・真情の味到

(ハ) 文の感觸・表現の妙味

(ニ) 措辭・辭様・旋律其の他修辭的考察

等々

3 第二次直観

生命的把握の段階である。意味の十全化、即ち體驗的認識の世界であり、價值體

験の世界である。別言すれば生活化された状態である。

1 文意の確認

2 味讀・陶酔

3 鑑賞・沒我

4 讀後の印象・感想の發表 (口頭又は記帳)

5 學習事項の整理 (發音・アクセント・讀調子等)

6 内容の布衍附説

7 演習作業 (改作・作圖・繪畫表出・工作・作詩・作曲・脚色・劇化等々)

8 應用的練習 (新出文字・重要語句・其の他一切の國語的陶冶)

尙指導案中の第一次・第二次・第三次の区分は教授の單元を示したもので、普通に謂ふ時限を示した物では無い。従つて實地指導に際しては教材の難易分量等を考慮して、第一次指導に一時間、第二次指導に三時間乃至四時間を配當する事も有るべく、時としては第一次・二次・三次を通じて一時限を以てする事も有り得る課である。教授時数は其の校・其の學級の立場に依り、區々一定し難き事情を顧慮して、普通類書に見るが如き器械的な時間配當を廻と回避する事にした。本書を利用せられる諸君は、適宜時間を安排して教壇上に活用せられん事を希望する。

昭和十三年早春

著 者 誌

概説	(一)
第一 吉野山	(五)
第二 見渡せば	(三)
第三 京都	(四〇)
第四 源氏物語	(七一)
第五 法隆寺	(九九)
第六 五月の太陽	(一三)
第七 姉	(二九)
第八 電話の發明	(一九)
第九 瀬戸内海	(一七)
第十 日本海海戦	(一七四)
第十一 皇國の姿	(二〇五)
第十二 古事記の話	(二二八)
第十三 松阪の一夜	(二三五)

目次

本書は大體既巻の編纂方針に則り、主として解釋學的立場を踏襲したが、更に本巻の特色としては學年の進歩と各方面の要望を斟酌して、指導形態の整備と之が實踐化に力を用ひ、文の形態的研究や指導の組織的研究等、本書の全幅を此の一點に集中した事である。其の一々は茲に縷説する迄も無いが、例へば語句の解説や挿畫の説明等に全力を獻げ心得置くべき事の殆ど全部を網羅した事、原據や參考資料を手落無く収録した事、指導精神の闡明と之が徹底に努めた事、指導上の認識點を明示し文の觀點・取扱の呼吸を吞込ませた事等、一切の目標を指導形態の一點に集め、實際家の運用を自在ならしめん事を念とした。特に内容の精査に専念し、教壇實踐に萬遺漏無からしめん事を期した點は、著者の竊に誇とする所である。

第十四	北海道	(二六三)
第十五	我は海の子	(二九五)
第十六	間宮林藏	(三〇六)
第十七	樺太の旅	(三二〇)
第十八	雲のさま	(三四七)
第十九	燕岳に登る	(三六六)
第二十	蟲の聲	(三九〇)
第二十一	十和田紀行	(四〇五)
第二十二	歐洲航路	(四三三)
第二十三	月光の曲	(四六一)
第二十四	月の世界	(四九一)
第二十五	秋	(五〇九)
第二十六	鐵眼の一切經	(五四)
第二十七	空中戰	(五四)
第二十八	日本刀	(五六)

目次終

精説 新讀本の指導精神 尋常科用 卷十一

友納友次郎 著



概説

1

待望の高學年用卷十一は今しも小櫻織の鎧に身を固め、銀鞍白馬武者振勇ましく我等の面前に堂々と其の雄姿を現した。そして

「日本の國語讀本茲に在り」と聲も高らかに名乗掛けたかの觀がある。

卷を追ふこと正に十有一、内容は愈々充實して新時代の意氣に燃え、編者の筆華は益々冴えて燦然たる光を放ち、兩々相俟つて眞に光彩陸離たるものがある。

見よ、其の清新潑刺たる内容を、聴け、隨所に強調された日本精神の雄叫びを。

何處を衝いても血の出る様な生々した題材がずらりと頭を揃へ、其の配列又多彩を極め、興味滾々盡きるを知らぬ趣の間に、示唆され暗示され知らず識らず培はれる魂こそは、終始一貫した國民精神の源流である、其の叫びである。

勿論精神作興の大精神は此の巻に限らず、既出の讀本各巻にも其の中心と成り中核と成つて各課を統率して居たのであるが、本巻に至つて其の旗幟が殊に鮮明であり顯著である。

とは言へ我が國柄の氣高さは、之を他國のそれと對照する時、彼は一箇の思想とし、時に應じて之をレツテルとし露骨に標榜して憚らぬが、我が日本精神は之と異なり、太古此の方綿々として傳承し來つた不文の鐵則であり精魂であつて、決して之を強ひもせねば又押賣もしない。此の點他國が無下に高壓を加へ宣傳の具に供するものと全く同日の談では無い。結局我に在つては思想に非ずして精神であり、レツテルでは無くして傳統である。従つて此の精神たるや個々の教材に内在し、極めて暗示的・示唆的な所に奥床しくも蘊を放つて居る。日本精神の精神たる所以は蓋し此の奥深く氣高い點に在らねばならぬ。恰も百鍊鍛造の名刀のその如く、鐵壁をも貫く鋭さも不斷は鞘に納められ容易に其の鋒銳を見せぬのが、二千六百年來の大精神である。

概 説

本巻が開卷第一に「吉野山」を配し、最後を「日本刀」でがつちり受止め、其の間或は古道を稱へ、或は文學・藝術の源泉に遡り、又は文化の由來する所を極める等、徹頭徹尾此の大精神の發揚に終始した點を見逃してはならぬ。

然も配材頗る宜しきを得、一絲亂れぬ脈絡の間に其處此處と二部作・三部作の渦を卷かせ、澁んでは淵・激して急湍と成り、大波・小波宛然交響樂的快調を讀者に咬つて居る。

例へば巻頭の

第一 吉野山

- 第二 見渡せば
- 第三 京都
- 第四 源氏物語
- 第五 法隆寺

暗黙ではあるが、此處にも大きな渦が卷く。史蹟の波・古文學の波・古代藝術の波、流は多いが主流と成つて一貫するものは、結局皇國精神のそれで有らねばならぬ。

概 説

- 第十一 皇國の姿
- 第十二 古事記の話
- 第十三 松阪の一夜

日本海海戦の華かな前奏曲に連れ、此處には神道・古道を中心とする完璧な三部作の渦が卷く。それは皇國精神の本源でもあり、本巻各課の核心でもある。

- 第十四 北海道
- 第十五 我は海の子
- 第十六 間宮林蔵
- 第十七 樺太の旅

海の子我等の行進曲を伴奏に、活躍北海道・樺太探検・躍進樺太と、北地を中心とする四部合唱の渦が卷く。

第二十三 月光の曲

第二十四 月の世界

月を情的に見・知的に眺め、藝術的に科學的に、將又文學的に多様の角度から望ませ、次課の秋とも軽い連繫を保たせて居る。

此の金波銀波の激瀾する間にも、就中第十一・十二・十三に於ける皇國の姿・古事記の話・松阪の一夜の三部作は、神國日本の由來する所・國柄の尊嚴なる所以・皇國精神の淵源する所を極め、之を大手から眞向に、將又搦手から側面的に、或は藝術を通して深刻に、又は文化史的に的確に、又逸話風に感興深く、多方面から検討し得て餘蘊無き周到さには全く頭が下る。蓋し此の三部作が本卷の中核であり核心たるは再言する迄もない。

個々の問題は各課に調り、更に之を形式方面から見れば、本卷に至つて文學的水準がずつと高められた事に氣附くであらう。本格的藝術の核心に觸れしめようとして、其の表現技巧も殆ど小兒的境地を脱し、大人が觀賞しても立派な作品のみが掲げられて居り、古典文學から新興文學へと擴充され、文章其の物の想と言ひ文(アヤ)と言ひ磨きに磨かれて珠玉の光を添へ、さながら傑作文集を繙くの觀がある。

和歌・俳句等我が獨特の文學形式も漸次本格的境地に進み、極めて象徴的・感覺的の作品が取入れられた一方、古今集や源氏物語の如き中古文學に迄歩を進め、更に古事記・萬葉集等の古典文學の領域に迫り、日本文學の源泉に觸れさせ古典研究の素地を築いた點等、國語の領域は愈々高級と成り、専門的に指導すべき領域に迄止揚された點に着目すべきであらう。

第一 吉野山

開卷第一に絢爛たる「吉野山」に接し、先づ念頭に浮ぶものは各學年に於ける讀本前卷の多くが、卷頭の數課に必ず櫻花に關係ある題材を取入れて居る點である。之は決して偶然とは言へない。單に四月の新學期が櫻のシーズンに相當する故のみで無く、「數島の和心を人間はば」の精神が謳歌高揚されて居るものと見るべきであらう。

此の邊にも他國には見られぬ我が國独自の氣高い編纂精神が窺はれる。和歌・俳句を以て經とし紀行文を以て緯とする純然たる詩文叙述の形式は本卷に至つて初めて接する處であるが、我が古典文學では殆ど此の形式を慣例とされた程、古から我が國民には親しい形式であつた。然も這般の形式が讀本に現れたのを見て、今更の如く其の意を得たりの感が切である。此處迄進めば單なる叙述では無い。舌頭千轉日本文學の粹をも合せて會得さすべきである。

簡にして素・雄にして大、五頁足らずの短篇ではあるが、中に盛られた想の豊富さ、目のあたりに見る櫻の花の一輪々々にも惻々たる回顧の心が躍つて、思はず「これはこれは」と計り感歎の聲を放たしめずに置かない。それこそ蓋し吉野の吉野たる所以で、櫻を契機とする國民精神の躍動と言ふべきであらう。

故芳賀矢一博士の「月雪花」に據ると、嵐山の櫻は吉野の花を移植したものである。頼山陽は京都に住んで居た關係から、此處にも屢々遊んだ。或時の詩に

嵐山峡口第三家。三度侍^レ興來看^レ花。花已依然母無^レ恙。慈顔紅映幾重霞。

とあるが、此の嵐山は吉野を言つたもの
 天女の舞の昔から吉野は思出の多い所で、歌書よりも軍書にかなし吉野山[〃]の句もある通り、櫻花の雲に包まれた吉野朝五十有七年間こそ人をして追懐の念に堪へざらしめる。歴史家たる山陽が此處に憶れたのも宜なりと言ふべしである。後醍醐天皇が暫しの御隠家と此處の假宮に入らせられた翌年、春立つと言つても形ばかりの御節會、やがて二月半頃から御庭の櫻の少しづつ咲き出たのを御覽じて、勾當内侍に仰せられた御歌が、即ち本課の

こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿と思ふに

であつた。吉野の假宮は暫しの間吉水院と言つて、今も残つて居る寺院であつた。其の吉水法印に賜はつた御製

み吉野の山の山守言とはむ今いく日ありて花は咲きなむ

法印かしまつて奉答の歌

花咲かむ頃はいつとも白雲の居るをしるべに三吉野の山

同じ時山の櫻を眺めさせ給うて、勾當内侍に

おしなべて木の芽も春と見えしより花になり行くみよしの山

と詠んだ時分こそ、まだ吉野山を見なかつたが、今此處に住み馴れては其の折節の戀しう思ひ出てられるよとおほせあれば、涙に聲をうるませて、

古をしのぶ涙はみよしの山吉野山の花の白露

同じ内侍に京都の妹の君からの手紙に、山の中の御住居思ひやられて悲しと書いた返事に、内侍は

春は花秋は紅葉をみよしの山のかひある住居とぞしれ

同じ吉野の行宮にての話、女院御所の御庭で散り積つた櫻を主殿奴召させて集めさせ給へば、高さ五尺程の山と成つた。吉野の花を移した山なればと嵐山と名を付けさせられ、さて歌ひ奉れと仰事あり、明日は行幸と事の極つた夜、風強く吹いて其の山は無く成つて仕舞つた。翌朝早く兵衛興侍から辨の内侍の方へ

みよしの山花を集めし山の名も今朝はあらしの跡にこそあれ

と言つたのを奏聞すれば、主上も御笑ひに成つて、

千早ふる神代も聞かず夜の程に山を嵐の吹き散らすとは

と仰があつた。さても此の嵐山の散つた様に北吹く風のみ騒しくて、唯假初の御宮と思召した行宮も三代五十年の帝都と成つたのは如何にも歎かほしい次第である。

後醍醐天皇がお崩れに成つた翌年、後村上天皇の御母新待賢門院は

時知らぬなげきの下にいかにして變らぬ色に花の咲くらん

と御詠みに成つたが、兵火に藏王堂も焼け行宮も變つて、唯御陵の花ばかりは昔の儘に咲いて居るのを御覽に成つて、花一房を御文の中に封じ入れ、宗良親王の許へ御遣しに成つた。其の時の御歌は

みよしの山見しにもあらず荒れにけりあだなる花はなほ残れども

宗良親王の御返歌は

今見てもおもほゆるかなおくれにし君が御かげや花に添ふらん
 尋ね見る人のためにや残りけん同じかざしのみよしのゝ花
 と有つたが、数年の後女院も亦御隠れに成つた。宗良親王懐舊の情に堪えず、昔の御文を取出して御覽ずれば、封じ込まれた櫻の花は萎んだ儘残つて居る。それを見て

尋ねても今はた誰か三吉野の花の昔を我に語らん

當時の感懐如何ばかりで有つたらう、

粟田久盛朝臣は後醍醐天皇の崩後、此の塔尾の陵の近傍に千本櫻を植ゑようと思ひ立ち、年々植ゑたが、其の花も何時しか咲く様に成たので、

植ゑおかば吾の下にもみよしのゝ御ゆきのあとを花や残さん

と詠んだ。短い三十一文字は長大な雄篇にも増して、人の心を動かすものがある。

吉野山の雲井の櫻を北高親厚卿が

吉野山雲井の櫻君が代にあふべき春やちぎりおきけん

と詠んだのは、吉野山の皇都に成つた悲歎を言外に示して居るが、後村上天皇の

よしの山花も時得て咲きにけり都のつとに今やかざさん

の御製も遂に其の儘と成つて仕舞つた。後祖山天皇の

をさまらぬ世の人ごとの繁ければ櫻かざして暮す日もなし

と仰せられたのも時勢の有様が想はれる。日本武士を代表する櫻の吉野山は、吉野朝御無念の歴史が添つて

から、櫻と言へば直に吉野を聯想し、又直に勳王を聯想し、且つ愛國を聯想する様成つたのも理由無き事ではない。

尙吉野の花を詠じた名歌は頗る多い。

- | | |
|----------------------------|----------|
| 吉野山花符つ頃の朝な〜心にかゝるみねの白雲 | 佐川 田 昌 俊 |
| もろこしの人に見せばやみ吉野の吉野の山の山ざくら花 | 賀 茂 眞 淵 |
| 昔たれかゝる櫻の種をうゑて吉野を春の山となしけむ | 藤 原 良 經 |
| みよし野の花の盛を今日みればこしの白根に春風ぞ吹く | 藤 原 俊 成 |
| 吉野山雲をはかりに尋ね入りて心にかけてし花を見るかな | 西 行 |
| いづこにて風をも世をも恨みまし吉野の奥も花は散るなり | 藤 原 定 家 |
| 何れをか花とはわけて眺めまして櫻のみよしの山 | 本 居 宣 長 |
| 櫻花にほふ吉野の山ながらわが御佛にたてまつらばや | 行 誠 |
| 等、まだ幾らもある。 | |

挿畫の印象と其の説明

第二頁の寫眞版は歴史に名高い吉野金峰山藏王堂である。藏王堂は奈良朝の昔から修験者の自由道場とされ、金剛藏王権現を安置した所から此の名が起つた。社前に今を盛りと咲誇つた櫻樹のある邊が、元弘三年閏二月、大舉して押寄せた朝敵に衆寡敵せずと覺悟を極めさせられた護良親王が、最早斬死の外は無いと最後の酒宴を開かせられた地點だと傳へられる。當時此の邊に本陣の幕が張り圍らされ、親王盃を擧げさせ給

へば、幕下の勇士木寺相換が四尺三寸の大太刀に、敵の首を刺貫いて舞を舞ひ興を添へたと太平記に見えて居る。之と同じ日、村上彦四郎義光は護良親王の御身代と成り、藏王堂の横手二の木戸の櫓に駆上り、群がる敵前に腹を掻切つて、天晴な最期を遂げたので有った。

第三頁の寫眞版は吉野山塔尾陵の正面で延元陵とも稱し奉る。延元四年八月十六日、後醍醐天皇には吉野の行宮に於いて、兩の御手に御劍と法華經とを持たせられ、北方の天を望んで崩御あらせられたので、如意輪寺の後山、塔尾に北面して斂め奉った。此の寫眞版では能く分らぬが、御陵の形は圓丘を成して居て、其の時代に圓丘の御陵を營まれた事は、陵制史上に特筆すべきものと爲れて居る。長い武家時代に御陵大方荒廢した際にも、此の山陵のみは御陵守護人が代々奉仕を怠らず、陵所嚴然として今日に至つた事も記憶すべきであらう。御陵に上る石境の袂に髣髴があり、其の直ぐ側に如意輪堂がある。

第四頁の挿畫は中の千本の光景を寫生したものの。針葉樹の濃緑を背景とし、くつきりと浮上つた彌漫たる櫻又櫻で、雲か霞かと紛ふばかり。中の千本は藏王堂・吉野行宮跡から塔尾陵附近一帯を言ひ、櫻樹の數千本と言はれたのは昔の事、今は數百千本と數へ切れぬ程である。殊に此の附近は前に述べた名所舊跡の外、如意輪寺があり吉野温泉があり山口神社等も有つて、花季は素より平常でも杖を曳く客で賑かである。

文字 語句

新出 文字

句 跡 禁 麓

讀 替 文字

吉 (新出は卷十、キチ)

御 (新出は卷五、ゴ)

櫻 (新出は卷六、サクラ)

詣 (新出は卷七、ケイ)

語句と其の解説

吉野山 奈良縣中部(大和吉野郡吉野町)に在つて、櫻の名所。吉野朝の皇居址・修驗道の根本道場の地として著名。指定史蹟名勝。國立公園指定區。山は吉野山地の北端に當り、大峰山から北方に延び吉野川に終る一支脈。南北の屋根上に道路が開け、金峰山寺を中心として高度三〇〇米から四〇〇米の所に市街地が出来、金峰神社及び附近の奥の千本が最南である。大軌電鐵は吉野川を渡り小溪に沿うて登り、終點吉野驛からケーブル線で尾根道の中央に達し、吉野川畔から尾根を傳つて吉野神宮・村上義光の墓を經て來る道路に合し、黒門・銅鳥居を南に抜けると金峰山寺に達する。金峰山は役の行者(小角)が開いて修驗道の根本道場としたのに始まり、平安朝皇室の御崇信篤く、藤原道長等の登山があり、堂塔・僧坊連り所謂吉野大衆の本據であつた。後、源義經の入山の事があり、元弘の亂に際しては護良親王は藏王堂を本據とせられ、延元元年後醍醐天皇の潜行があり、後村上天皇の正平三年迄吉野朝廷の所在地であつた。文祿三年の秀吉觀櫻も有名。本堂の藏王堂は康正元年の建築、吉野朝皇居址は金輪王寺の址で、後醍醐天皇が崩御され後村上天皇が踐祚し給うた所、寺は廢絶して其の址に碑が建つて居る。吉水神社は役行者庵室の址と傳へ、もと僧坊の一で明治八年神社(祭神は後醍醐天皇・楠正成・吉水院宗信)と成り、如意輪寺は日藏の開基と傳へ、楠正行が堂扉に「かへら



中 の 千 本

紀海岸美の代表として著名で、且つ豊富な温泉にも恵まれ、新宮附近から七里御濱を経て木本に至れば、怪奇

じと、の和歌を刻んだ所として有名。其の他後醍醐天皇陵・竹林院・水分神社等がある。櫻樹は悉く白山櫻で、嶺に溪に群生或は混生し、下・中・上・奥等の一目千本の群生が各高度を異にし、約一箇

月に互り下から上へ咲き移る。此の地は又熊野地方と共に、近畿に於ける唯一の国立公園として世界的に知られて居る。

吉野熊野国立公園は櫻と史蹟で名高い吉野山・修験者の道場として有名な大峰山・峽谷と岩壁の美で知られた大臺ヶ原山等を中心とした吉野群山連峰、更にこれらの起伏する連山を源として北西に流れる吉野川・東に分れた宮川・南に落ちる熊野川、そして熊野川の水の太平洋に注ぐ熊野灘に面した海岸線一帯を含んだ自然の巧緻を盡した山嶽・海岸・岩礁の大風景を以て構成されて居る。即ち大峰山・大臺ヶ原の間を南下する北山川は、十津川を始め幾多の支流を合せて熊野川と成り、新宮に至つて太平洋に注ぎ、其の間有名の瀧八丁・奥瀧・上瀧等の幽邃境を始め、北山々峽の動的水流の美観等がある。熊野灘に面した海岸風景は眞に雄渾豪壯で、特に潮岬の大観は外洋風景の典型であり、勝浦を中心とする海岸は南

な洞窟風景として聞えた鬼ヶ城の奇景がある。回遊コースとして吉野山へは山麓迄電車の便があり、大臺ヶ原へは大和上市町、大峰山へは上市・下市・吉野等が起點と成つて居る。尙熊野川探勝コースとしては北方吉野方面から入るものとあり、新宮へは現在の所海路大坂から汽船を利用するのが便利である。新宮より本宮・湯の峰・瀧方面へは此の川獨特のプロペラ船が通つて居る。吉野山かすみの奥は知らねども 八田知紀の歌。知紀は薩摩の藩士で幕末から明治に掛けての歌人、香川景樹に學び維新後歌道御用掛に任命、明治天皇に近侍し奉る。明治六年九月

歿。歌は其の歌集『しのぶ艸』に出づ。前書に『一とせ花見にもものしける時』とある。歌意は平明、吉野山は霞の奥はどうか知らぬが、見える限りは一面の櫻だと、全山櫻に包まれた花の吉野を讃歎した

もの。花の雲 櫻花の咲き続ける様を雲に譬へて言ふ。花は櫻の特稱。まのあたり めの

まへ。眼前。目前。吉野神宮驛 大軌吉野線の一驛。下千本迄三〇〇米、奥の千本迄約六軒。山

に登るには吉野驛が良いが、参拜するには此の驛が順路である。吉野驛から金峰山の手前迄ケーブルカーの便がある。吉野神宮 社格官幣大社。祭神は後醍醐天皇(楠正成配祀)明治八年建武中興

の英主に在します後醍醐天皇の御聖徳を敬慕し奉り、御事蹟を偲び奉る儘に御山緒深き吉野の吉水院に神殿を創立し奉り、村社吉水神社と崇めたが、後此の地に社殿を営み官に懇請し、同二十二年六月官幣中社に列して吉野宮と號し、同三十四年八月更に大社に昇格。其の後社殿を改築して神域整備し、社號を吉野神宮と改稱。本殿右方の攝社御影社に藤原資朝・同俊基を、左側船岡社に見島範長・同高德・櫻山鼓俊、之と並ぶ瀧櫻社に土居通増・得能通言を各々祀る。村上義光 既出、吉野朝

の忠臣。信濃の人、彦四郎と稱す。元弘二年、子義隆と共に護良親王に従つて吉野に赴く途、芋瀬莊司の錦旗を奪ふや義光之を知り奪取して吉野に據り、北條氏の軍と戦ふ。翌年城將に陥らんとせし時、自ら親王と稱して切腹し、難なく親王を逃し參らせた。明治四十一年贈從三位。これはこれとはばかり花の吉野山。安原貞室の句、『荒野古選』に出づ。これはこれは感動詞、物事の意外なのに驚き又感嘆して言ふ。句意はこれはまあと感嘆の外はない花盛の吉野山の眺めはの意で、満山は花の景色を激賞して吟じたもの。此の句は古今の絶唱と迄稱揚された名句で、俳諧古選にも『芳山題咏多々、皆不能入此妙境』とある。作者貞室は貞門七伴仙の一人、名は正章、特に貞徳に愛せられ其の俳統を相續した。延寶元年歿、年六十四。下の千本 一の坂からボツ／＼櫻が見え、吉野神宮から義光の墓を過ぎる頃から眺望が開け、峠道に掛ると下の一目千本、櫻花は宛然白雲の如く、萬人一齊にこれは／＼と激賞する。吉野の町 吉野山の中心を成す市街で、吉野川の南岸大峰山麓の一屋根上に發達した町。人家が道路の懸崖に竝ぶ。此の町の起源は役の行者が此地に藏王堂を作り、自ら民家が生じた爲、古來毎年四月十一・二日には藏王權現に櫻花を献ずる儀式が行はれる。市街の家屋は地形の關係上（道路の左右、崖に倚つて構へらる）前は平屋で、後は二階三階を爲す。旅館・料亭等が櫛比、大阪電氣軌道吉野線、吉野神宮・吉野兩驛・吉野山架空ケーブル線千本口・吉野山兩驛がある。人口三、八七〇。町の西南端に藏王堂附屬の黒門があり、町中に二王門がある。藏王堂 金峰山寺の本堂、十八間四面、桁行七間、梁間八間、重層屋根入母屋造り、高さ十一丈二尺、吉野の大衆は常に茲に據り、元弘年中には護良親王之に據りて奮戦せさせ給ひ、延元年中には後醍醐

天皇の行在所と成つた事もある。正平年中高師直・師泰等來り侵し、爲に行在所も祠堂も全く烏有に歸したが、現在の堂宇（上記）は康正元年の再建、天正十九年豊太閤が大修覆を加へたもので、宏壯雄大、奈良大佛殿に次ぐ大建築で、特別保護建造物に指定されて居る。役の行者感得の藏王權現を安置、本堂の前にある四本櫻は大塔宮が吉野落の際、別離の酒宴を催され舞樂を奏せしめられた舊址、南門址は村上義光が戦死せし場所と傳ふ。尙金峰山寺とは吉野大峰の山上山下の伽藍の總稱で、役（エン）の小角の開基と言はれて居る。金輪王寺跡 金輪王寺は又金峰山寺（キンブセンジ）とも言ふ。藏王堂は其の本堂である。行宮址は詳かでないが、舊金輪王寺の供僧房たる寶城院及吉水院がそれで有つたと傳へて居る。寶城寺址は藏王堂の西、門前を右に入れば幾許も無い。今、吉野朝宮址の碑が建て、ある。吉水神社 藏王堂の北三町の谷間に在る。舊稱吉水院、文武天皇大寶年中の創建と稱す。役の行者の庇居、又源義經吉野落の際の潜匿、豊太閤吉野花見等の史蹟を語る。元弘の昔後醍醐天皇南遊の御事に依つて、明治八年神社に改め、天皇の御靈と補正成とを祭神とする。吉水院の遺構たる書院の外、後醍醐天皇宸筆御願文一卷・傳義經着用の色々威腹巻一領は國寶に指定、附近に浄御前が法樂の舞を奏したといふ勝手神社がある。吉野時代 嚴密に言へば後醍醐天皇延元元年八月足利尊氏光明院を擁立し、其の十二月天皇は吉野に遷幸し給ひしより、元中九年閏十月後龜山天皇神器を後小松天皇に傳へ給ふ迄の五十七年間を言ふ。此の時代は我が國史上國民として最も痛ましく感ずる一面を有する時代と言はねばならぬ。それは此の時代が戦亂に終始したと言ふのみでは無い。又其の戦禍の甚大さから言ふのでも無く、此の時代の争亂の由つて來る勝敗が、常に正統なるもの、

上に勝利が齎され無いで、足利氏の如きものがとかく勝者の地位を占めると言ふ事を見るが爲である。然し其の反面には國亂れて忠臣現れ、世道人心に益する所が尠少では無かつた。

行宮 天皇

行幸の時、假に其の地に設けられる宮。かりみや。行在。アンは行の宋音、行脚・行燈・行火等皆同じ。こゝにても雲井の櫻咲きにけり 新葉和歌集に出づ。此の御歌には『吉野の行宮におはしましける時、雲井の櫻とて世尊寺のほとりにありける花の咲きたるを御覽じてよませ給うける。』といふ前書がある。尙『吉野拾遺』には『やどと思へど』とあるが、之は新葉集の御歌に據つて居る。世尊寺は一條攝政伊尹が其の桃園の第一條の北、大宮の西を寺として世尊寺と名附けた。伊尹の孫權大納言行成書道に長じ、其の書風を世尊寺流といふ。京都上京區笹屋町通榭屋町邊に在つたと言ふが、今廢寺となる。雲井は櫻の一種、又人丸櫻ともいふ。藏玉和歌集に『なべての櫻より七日先きに咲く也。吉野に有り。一夜に現る云々』とある。御歌は天皇が吉野の行宮に在つて今に盛と咲く雲井櫻を御覽に成つて、此處でも京の世尊寺の庭に咲いて居たあの雲井櫻が綺麗に咲いた。唯一時の假の住ひと思つて居る此の吉野にもまあ、と御詠歎に成つたもので、櫻の名の雲井といふのに深い感興を御催しに成り、思ひを都の空に御馳せに成つたもの。單なる御詠歎ではあるが、其の間に都を慕はせ給ふ御心境の程が拜察される。雲井は禁裡の在る所、雲の井。禁中。みやこ。此處は櫻の名稱。かりそめは一時のこと。永久ならざること。間に合せ。ちよつと。かり。此の御歌は二月の半頃から御庭の櫻が少しづつ、咲き出たのを御覽じて、勾當内侍に仰せられたもの。花に寝てよしや吉野のよし水の此の御製は當時の行宮吉水院で御詠じに成つたもので、具原益軒の『大和巡』に出て居る。其の詞書

に『吉水院の床を御枕とし詠じ給ひし御歌に』とある。遠く都を離れて此の草深い片田舎に起き臥しては居るが、妓は名高い花の吉野山で、櫻に埋もれ花を褥に一夜を明かすと、枕もとでは吉野川のせせらぎが如何にも快く眠を誘つて呉れる。不自由では有るが、花を臥所に清流の音を聞き乍ら暮して居れば、世智辛い此の世の憂さも忘れ身は塵外に在る思ひがするの御意。よしやはよし(縦)に感動詞のやを添へた語で、よしに同じい。よしは可しと假りにゆるすの義で、満足には思はぬが詮方なく打ち任せ置くの意。さもあらばあれ。たとひ。かりに。よしんば。ままよ。石走るは岩の上に瀧などの走り落ちるを言ひ、多く枕詞に用ふ。萬葉集に『いはばしるたぎもどろに鳴く蟬の聲をし聞けば都しおもほゆ』等とある。

如意輪寺

勝手神社の谷に在つて、藏王堂の東北に當る字塔の尾に在る。自動車は勝手神社の前迄通ずる。こゝから左に折れ溪を渡る事七町、後醍醐天皇の御陵は此の堂

背の丘上に在る。延喜中日藏上人開基、吉野朝の勅願寺。本尊は安阿彌作如意輪觀音の座像で、別に傳役行者作國寶藏王權現像を安置する。正平の昔、楠正行が誓を截つて佛殿に納め、一族の姓氏を録し、鐵尖を筆に代へて『無き數に入る名をぞ止むる』と書いた如意輪堂の址は、庫裏の北方に在り、正行辭世屏と稱する一片を傳へる。現存の堂は後醍醐天皇の御影殿で、御影像の厨子を奉安して居る。正行の鬘塚は此の堂側に在る。

後醍醐天皇のみさき

如意輪寺の後方丘上に在る。(奈良縣吉野町大字吉野山字塔ノ尾)塔尾陵又は延元陵とも言ひ、參拜の人々をして轉た懷舊の思ひに堪えざら

しめるものがある。天皇は後宇多天皇の第二皇子(第九十六代)緯に尊治、御母は藤原忠子、正應元年御降誕、文保二年御踐祚、北條氏の人心を失ふに乗じ、幕府を滅ぼさんとし給ひ、正中の變・元弘

の亂あり、二度共御失敗に歸し北條氏の爲に隱岐に遷され給うたが、遂に討幕の御素志を達せられ、政權を恢復し建武の中興と成つた。然るに中興の業は幾何も無くして破れ、足利尊氏京都を占領し、天皇は吉野に遷幸し給うたが（延元元年十二月二十八日吉野の奥なる賀名生の行宮から吉野山に移らせ給ふ）南風競はず遂に延元四年八月十六日、北方の天を望み御劍を按じて崩御し給うた。御壽五十有二。同年十月二十三日、如意輪寺觀音堂の後山に葬り奉つて塔尾陵と稱へ奉る。太平記に『葬禮の御事、兼て遺勅有りしかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚くし、御座を正うして、吉野山の麓、藏王堂の良（ウシトラ）なる林の奥に、圓丘を高く築いて、北向に葬り奉る。寂寞たる空山の裏、鳥啼き日已に暮れぬ。土墳數尺の草、一徑涙盡て愁未だ盡きず。舊臣后妃泣々鼎湖の雲を瞻望して、恨を天邊の月に添へ、霸陵の風に夙夜して別を夢裏の花に慕ふ。哀なりし御事也。』とある。御陵は周圍百四十四間、北面して有るのは京都回復の御雄志を偲び奉る爲である。御陵の側に後龜山天皇第一皇子世泰親王の御墓がある。北方の天を望み 太平記に出づ。同卷第二十一先帝崩御の事の條に『吉野の主上御不豫の御事有りけるが、次第に重らせ給ふ。醫王善逝の誓約も、祈るに其の驗し無く、善婆局鵲が靈藥も施すに其の驗おはしませず。玉體日々に消えて晏駕の朝暄からじと見え給ひければ、大塔忠雲僧正、御枕に近附き奉りて、涙を抑へ申されけるに、神路山の花再び開くる春を待ち、石清水の流逢に澄むべき時あらば、さりとて佛神三寶も捨てまゐらせらるゝ事はよも候はじとこそ存候ひつるに、御脈已に替らせ給ひて候由、典藥頭驚き申候へば、今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺悟に赴かせ給ふべき御事をのみ思召し定めさせられ候ふべし。さても最後の一念に依つて、三界に

生を引くと經文に説かれて候へば、萬歳の後の御事、萬づ叡慮に懸り候はん事をば悉く仰せ置かれ候うて、後生善所の望をのみ叡心に懸けられ候ふべしと申されたりければ、主上苦しげな御息を吐かせ給ひて、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者、是如來の金言にして、平生朕が心に有りし事なれば、秦の穆公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へし事、一も朕が心に取らず、唯生々世々の妄念共なるべきは、朝敵を悉く亡ぼして四海を泰平ならしめんと思ふ計り也。朕即ち早世の後は、第七の宮を天子の位に即け奉りて、賢士忠臣事を圖り、義貞義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくば、股肱の臣として天下を鎮むべし。之を思ふ故に玉骨は縦ひ南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北關の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んぜば、君も繼體の君に非らず、臣も忠烈の臣に非らじと、委細に綸言を遺されて、左の御手に法華經の五卷を持たせ給ひ、右の御手に御劍を按じて、八月十六日の丑刻に遂に崩御成りにけり。云々』とある。之は其の『魂魄は常に北關の天を望まんと思ふ。』の一句に據り、此の悲壯極まる御最期を思はせたもの。そゝろに 何故と無く心の進むさま。たゞわけもなく。我知らず。思はずも。不覺。よし野山みさゝぎ近くなりぬらん 明治二十三年御行啓の際、勝手神社から左に折れ、溪を渡つて御陵近く御差掛りに成つた時詠ませ給うた御歌。詞書に『のり物のうちに櫻のちりくるに』とある。落花が頗りと袖に散りかゝるが、もう御陵も間近であらう、散り来る花も何となく打ちしめつて居る様に思はれる、といふ實感の頗る御豊かな御詠。吉野懐古も數多いが、是程勝れた御歌は他に類が無い。中の千本 中の千本は勝手神社から東へ折れ、如意輪寺へ至る谷間から峯へ掛けての一帶の櫻をいふ。塔尾山の翠綠を後に負うての眺望は實に芳山隨一で、櫻花紛々として

虚空に繖り、望中悉く美態素容、山中第一の偉觀である。布引櫻・雲井櫻・滝櫻等の名木も亦此の附近に在る。
チノワケシ 忠僧宗信 勤王僧、大日本史に宗信は吉野の修業者、法印に叙せられ吉水院に住す。後醍醐帝の花山院より出で穴太に幸するや、從臣刑部大輔大江景繁を遣し、宗信を諭告して蹕を吉野に駐めしむ。宗信乃ち僧兵三百を發して奉迎し、行營を造りて之に御せしむ。既にして帝崩す。衆情沮敗して皆守心なし。宗信入りて告げて曰く、先帝崩する臨み 勅して幼主を翼け逆賊を討たしむ。遺命耳に在り、豈に遽かに離散を懷ふ可けんや。況や宗信焉に在るに於てをや。諸公決して慮を動かす勿れと、適々楠正行・和田正武兵を率ゐ來りて警衛す。衆心頼て以て大に安んず、とある。大正六年十一月正五位を贈らる。墓は奥千本に向ふ路傍に在る。

チノミヅノカミ 吉野水分神社 水分神社は水の疏通分配を掌る神、天之水分神・國之水分神の二柱で、諸國に多く祀る。文武天皇二年四月、吉野水分峯神に馬を獻じて祈雨の事があり、後又年々祈年祭・月次祭に豊稔を此の神に祈禱し給ふ。タマリは配りで、灌漑の事に當る意、後世之をミコモリと訛り、子育ての神、子寶の神として信仰されるに至つた。萬葉集にも、神さぶる岩根こごしきみ吉野の水分山をみればかなしも、等とある。
キンブセン 金峯神社 金峯山（キンブセン）は吉野山の最高峰、南方大峯に連り、遙に熊野・那智に及ぶ古來の名山。延喜式所載の金峯神社（キンブジンジャ又はカネノミタケジンジャ）鎮座。吉野山鎮守神で祭神は金山毘古命・金山姫命。中古以來、藏王權現又は金精大明神とも言ひ、役の行者の遺蹟を存し、修驗道者の靈場として著聞。水分神社と共に吉野八大神祠の一、明治に至り郷社に列す。
オノチノ 奥の千本 世尊寺址・水分神社・金峯神社を過ぎ、西行法師三年庵住の舊地と稱する昔清水に至れば、庵址の後方に又一簇の櫻



奥の千本

花を見る。之が奥の千本である。奥の千本は人煙遙に隔り、細徑に依つて至る幽邃閑寂の地、高燥であるから吉野一帯が葉と成つた頃獨り萬朶の芳雲に包まれる。年に依つて開花期に多少の差異が有るとは言へ、大體下の一目千本は四月十二三日頃、中の千本は十三四日頃、上の千本は十四五日頃と相次ぐのであるが、奥の千本は四月二十日頃になる。西行は此の静寂の地を愛して三星霜を茲に庵住したので有つた。遺蹟は今尙名所の一つとして残り、彼が詠じた昔清水は涙々として流れて居る。櫻樹の分布區は斷續三里餘で盡き、之から大峯山奥深く所謂大和アルプスの山彙に入る。
チノソノ 吉野山こぞのしをりの道かへて 西行法師の歌で、新古今和歌集、春上に出づ。花の下に寝て花に死なうと願つた西行の風格を偲ばせる名歌として古來人口に膾炙して居る。「こぞ」は過ぎた年。昨年。舊年。去年。「しをり」は葉又は枝折の字を宛て、山路等で木の枝を折つて路しるべにすること。又道しるべに折つてある木の枝。しるべ。あんない。轉じて讀みかけた書物の間に挿んで後の目じるしにする物。此處は前の意。「こぞのしをりの道かへて」は去年通つた道をかへて。全く別な道を通つて。新

しい別路を選んで。『まだ見ぬ』はまだ見ない。一度も見た事のない。未見。未知。吉野山は麓から頂迄満山悉く櫻で、其處此處に咲いた花を見盡すのは容易でなく、又花期も異つて居るから少々な日子では難しい。此の歌は其の吉野の花を尋ねる風雅な苦心を歌つたもの。吉野山は山も深く花も多いから、到頭去年は總ての櫻を見盡すことが出来なかつた。今年も去年花を探つた道とは違つた道を辿つて、全く別な方角に咲いて居る誰も知らない未見の花を尋ねようと言ふのだ。作者西行は佐藤義清の法名、藤原秀郷九代の孫として、家柄に相應しい武勇の士であつた。兵法にも通じ、殊に射術は達人であつた。鳥羽上皇に仕へて北面の武士と成り、從五位下に叙し左衛門尉に任ぜられた。在俗の時から既に和歌の方にも秀で、居た事は、上皇の命を受けて、障子の畫に題する歌十首を即日詠進したと言ふ一事でも知られる。此の文武兩道の才に依つて上皇から深く愛せられたが、常に遁世の心を抱いて榮達を喜ばず、遂に保延元年、二十三歳の時、嵯峨に行つて僧と成つた。最初の法名は圓位、西行は後の法名である。四歳になる娘が戯れかゝるのを、出家の志を達し得ないのは之あるが爲だとし、其の娘を床から蹴落して、其の儘妻子を棄て、嵯峨に走つたと言ふのは有名な話である。頼朝から貰つた銀の猫を兒童に興へて去つたと言ふ話、高雄の神護寺で荒法師文覺を心服せしめた話など、何れも人口に膾炙して居て、人としての西行を知る上に好い参考となる。西行は終生を行脚に暮し和歌を詠じて風月を樂んだ。其の足跡は殆ど全國に及び、連歌に於ける宗祇、俳諧に於ける芭蕉と共に三大自然詩人と稱へられて居る。歌人としての彼の卓絶した位置は全く自然と融合し、自然より生れた彼の詩境に在る。晩年洛東雙林寺の草庵に住み、建久元年二月十六日、『同じくは花の本にて春死なむ』

そのきさらぎの望月の頃』の歌を残して河内の弘川寺で歿した。或は雙林寺とも言ふ。年七十三。

指導精神

本巻も亦國民精神の高揚に力を用ひて居る。巻頭の『吉野山』に配する巻末の『日本刀』兩々兩相呼應して此の巻の編纂精神を物語つて居る。前巻に比して國民文化方面の教材を中核として居る點に着目すべきである。題材の吉野山は黒瀬川の北に於いて紀伊脈狀地一般方向、即ち東北東に銀峯山から白貝嶽を経て五社峠へ走る壯年期の一脈がある。其の北斜面は吉野川に向つて緩斜して居るが、特に吉野山附近では數個の必從谷に深く侵蝕され、狭長な尾根に分れて居る。其の尾根の一つが吉野朝哀史を留めた本課の吉野山である。聚落は尾根上三〇〇米と四〇〇米の間に一軒半の長さの街村を成して居る。家屋は地形に支配され、表から見れば平屋であるが、裏からは二階又は三階を成して居る。吉野山は吉野町の大字で人口は現在三千八百餘、之を三十年前の千八百餘に比べて大した増加で無く、且つ出寄留者が多い様である。谷一つ向ふの高地から眺めると、尾根の先に藏王堂の屋根が見える。尾根は藏王堂から先方に尙三軒以上續いて高さ一六〇米の吉野河畔に終つて居る。尾根の斜面は桑・麥・果樹・蔬菜等の畑に利用され、遠くに金剛山脈を望む。山は遠望した所櫻よりも松・杉の翠綠が多く満山を飾つて居る。然し何と言つても吉野朝五十七年の哀史を寫す幽寂の地境、無量の感慨を催す上、點綴せる櫻の満開期には流石に翠綠は目に映せず、櫻花は宛然白雲の如く、萬人一齊に、『これはく』と激賞する。哀史あつての櫻、櫻あつての哀史、結局吉野は天下一品である。

本課は此の吉野山の景觀を叙したものであるが、我々が吉野に對して抱く實在意識は果して單なる櫻の名所、所謂花の吉野と言つた景觀のみで有らうか。我々は單に吉野と言ふ名を聞いた丈でも既に無限の感懐に打たれる。吉野の吉野たる所以は決して櫻の景觀丈では無い。櫻の景觀丈で有つたら他に幾らもある。吉野の吉野で無ければならぬ點、それは何であらう。言ふ迄もなく吉野朝五十有七年、彼の悲壯な史蹟を包容し、其の一塊の土も一掬の水も皆歴史の色に染つて居る點に在る。我々が吉野と言ふ名を聞いた丈で既に一種言へない感懐を餘儀無くされるのは、這般の歴史美を伴つて居るからである。此の吉野に對する感懐は現代の我々ばかりでは無く、古來何人も抱懷して居た所謂國民精神なのである。

古陵松柏吼天鷗 山寺尋春春寂寥
眉雪老僧時輟帚 落花深處說南朝

之は入口に膾炙した藤井竹外の詩であるが、此の詩の意味も全く本課と同一で、結句の「落花深處說南朝」に無限の感懐を込めて居る。吉野に對する感懐は古來殆ど此の點に合致して居る。

萬人買醉覺芳叢 感懷誰能與我同 恨殺殘江飛向北
延元陵上落花風 無限春風恨未消 露臥延元陵下月 頼 杏 坪
山禽聲斷夜寥々 滿身花影夢南朝 河野鐵兜
今來古往跡茫茫 石馬無聲杯土荒 春入櫻花滿山白
南朝天子御魂香 梁川星巖

疊々春山別有天 花開花落鎮依然 可憐萬樹香雲暖 頼 山 陽
曾護南朝五十年

言葉は違ふが感懐は皆同じである。此の言ふに言はれぬ感懐が吉野の吉野たる所以であつて、昔の悲壯な物語と、「一目千珠花盡開、滿前唯見白皚々」たる滿花の吉野とが相俟つて其處に無限の感懐を湧かせずには置かないのである。本課の觀點も亦茲に在つて、冒頭先づ『見ゆる限りは櫻なりけり』の叙景から入り、和歌や俳句や太平記等を巧に引用し、最後を『吉野山こぞのしをりの道かへて』の和歌で結んで居る。此の叙景から入つて叙景に出で、中に歴史を疊込んだ邊に着想上の趣がある。取扱も亦之に即して、地理を説き歴史を語り、地理と歴史に相撲を取らせる積りで取扱へば良い。斯うして所謂「落花深處說南朝」の感懐に到達し得たら、取扱は完全に目的を果したものと云へる。吉野は結局花より團子である。

國語教育の觀點は日本的に物を視、考ふる事を教へ、國民精神を陶冶し更に純化するに在る。吉野の花に對する情趣感興は我が民族特有のもので有つて、古人も斯く感じ後世の者も斯く感ずべき所謂國民的思想たり感情たるべきものである。古來我が國民性即ち我が國民の實在意識と成つて居るものは、次代の國民にも亦同様に包懷せしめなければならぬ。我々が前代の國民から承繼いだ所謂國民精神なるものを、其の儘の姿で完全に次代の國民に傳達する所に、國民教育の重大な意義が存して居る事を忘れてはならぬ。本課指導の核心も亦此の點に在るべきは言ふ迄もない。

指導形態

指導上の認識點

- 1 史蹟吉野の悲壯な歴史美を味はせ、低回趣味を養ふと共に愛國の熱情を鼓舞するのが本課の第一の主眼である。
- 2 第二は櫻の名所吉野山の全貌を心に描かせ、國花に對する愛著の念を養ひ、美的情操を啓培する。
- 3 既習の紀行文と比較させ、和歌・俳句等を挿入せる文の餘情を味はせ、日本文學特有の長所を會得させる。
- 4 指導は文本位を目標とし、文内容意外の事項に互り饒舌に終る事は絶対に慎しまねばならぬ。
- 5 本文は大體五時間見當で指導を完了する様立案すべきである。

第一次指導

- 1 題目の指導。
▽既習の地理及歴史の學習事項を想起させ、之と輕い連絡を保たせる。

自由學習

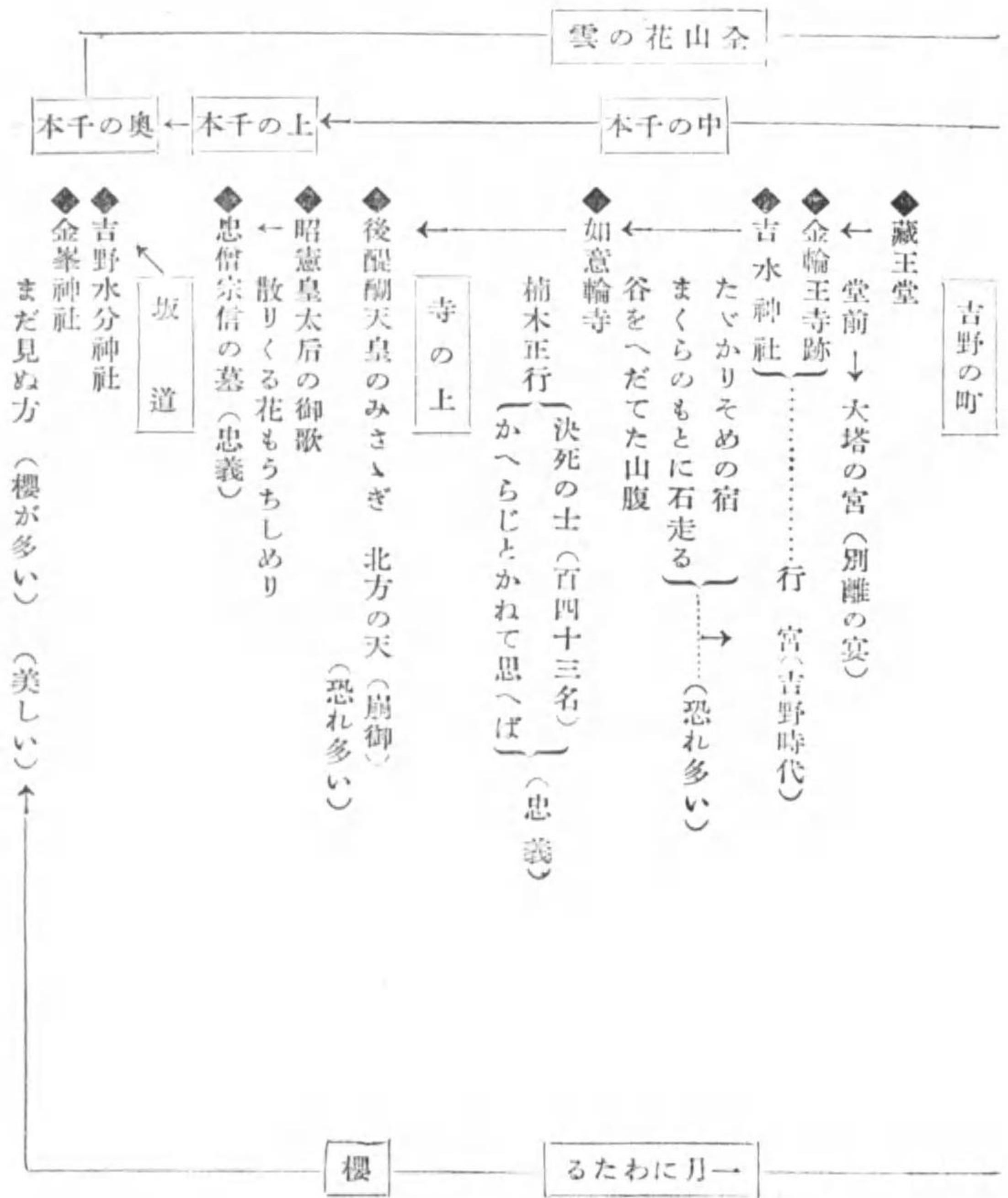
- 2 自由學習。
▽投渡して全課を自由に通讀させる。
- 3 第一印象を記帳させる。
話合。
- 4 最初の讀みで得た印象や感想を中心に。
不明の箇所を質問させる。
▽新出文字は字書を輔導して索引させる。
吉|櫻|詣|句|跡|御|禁|麓
▽難語句は質問を待つて隨所に指導する。
花の雲 光景 まのあたり とぶらふ
これはこれとはばかり あざむかず
落ちさせ給ふ 別離の宴 行宮 御製
雲井の櫻 かりそめ 決死の士 みさゝ
ぎ 北方の天 崩御 御心事 そごろに
禁じ難し こぞのしをり
▽地理的・歴史的固有名詞は引離して入念に取扱ふ。
吉野山 吉野神宮驛 後醍醐天皇 吉野
神宮 村上義光 下の千本 吉野の町
藏王堂 大塔宮 金輪王寺跡 吉水神社
- 5

第二次指導

- 1 輪讀。
指名讀。
- 2 中・劣生を主として。
範讀。
- 3 文の要所に力を込めて。
話合。
- 4 文の觀點を中心に。
文と挿畫を照合させる。
- 5 何處を撮影したものか、文に何う表現されて居るか等。
逐次研究。
- 6 頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

- 6 黙讀。
▽場面・情景の大體を考へさせる。
既習の歴史的事項を想起させる。
▽錦の御旗・足助次郎重範等。
通讀させて道順を繪圖を作らせて見る。
低音讀。
▽感興深く反覆通讀させる。
指名讀。
▽一場面づつ、人を代へて。
ノートを整理して提出させる。
- 7 吉野時代 如意輪寺 正平の昔 楠正行
昭憲皇太后 中の千本 上の千本 忠僧
宗信 吉野水分神社 金峰神社 奥の千本
- 8 見ゆる限りは櫻 吉野神宮下車
坂道
◆吉野神宮(後醍醐天皇)
◆村上義光の墓(忠臣)
これはくとはばかり(美しい)
- 9
- 10
- 11

- 1 櫻
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6



- 7 グループ学習。
▽グループに分れ配付した文圖とノートを對照して研究させる。
 - 8 一面毎に層意を確める。
▽ゆつくり時間を與へて。
 - 9 通讀。
▽全文を一氣に讀破させる。
 - 10 範讀。
▽一句切づ、追讀させる。
 - 11 話合。
▽文意を中心に。
 - 12 低音讀。
▽櫻の美觀を想像に描かせて、ノートを纏めて提出させる。
 - 13
- 第三次指導**
- 1 全課の通讀。
▽形式美に注意させて。
 - 2 會讀。
▽グループに分れ自由に會讀させる。
-
- 3 演習。
▽繪圖を描かせて個有名詞を記入させ、墓・宮・寺・木立等の略圖を添へさせる。
▽歴史的事項を書抜させる。
▽國史學習と連繫させて考へさせる。
 - 4 話方練習。
▽旅行氣分に浸らせ、實感的に。
 - 5 和歌や俳句を板書して指導する。
▽讀ませたり書取らせたりして一句づ、適譯させる。
 - 6 朗讀練習。
▽範讀を交へて。
 - 7 暗誦・暗寫練習。
視寫・聽寫練習。
 - 8 新出文字の書取。
 - 9 語句の應用練習。
 - 10 テスト。
 - 11

テスト問題

一、次の和歌や俳句を散文に直しなさい。

- 1 こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿と思ふに
- 2 よし野山みさゝぎ近くなりぬらん散りくる花もうちしめりたる
- 3 吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん
- 4 これはこれとはばかり花の吉野山

二、次の上下の句を番號をつけて結びなさい。

- | | | |
|---------------|------------|------------|
| () 見渡す限り | () 坂道を登る | () 別離の宴を |
| () 其の間ほとんど | () 櫻樹多し | () 張らせ給ひぬ |
| () 櫻樹多し | () すべて花なり | () 此の附近にも |
| () 一月にわたるといふ | | |

三、次の語句のわけを書きなさい。

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1 墓をとぶらふ | 2 吉野時代の行宮 | 3 みさゝぎ |
| 4 眺望いよく開けて | 5 別離の宴 | 6 崩御ありし御心事 |
| 7 北方の天を望みて | 8 そとろに禁じ難し | 9 こぞのしをり |
| 10 決死の士 | | |

第二 見渡せば

萬葉^とと並稱される我が國最古の勅撰集古今和歌集の中から、兒童に理會し易い歌柄を選んで季節順に排列されてある。何れも平安朝時代の歌人が詠んだ古歌のみであるが、其の各の詩境は現代の我々にもびつたりする。其の用語も歌ひざまも極めて平明で無理がなく、恰も現代の國語に翻譯されたかと思ふ程、現代風な表現である。それだけ兒童にも味得出来る歌柄であり、然も容易に追従し難い傑作たる事も頷ける。

古への歌人の趣味生活の美はしさ尊さが、千數百年後の今日まで、宛然蓄音機のレコードに吹込まれた音楽の様に、其の妙なる旋律が脈々と動いて我々の胸を打つのである。

悠久にして永遠なる大自然の姿には、昔も今も變りはない。茲に掲げられた五人の歌人は何れも偉大なる大自然の中に溶込んで、汲めども盡さぬ無限の美に打たれ乍ら、心の琴線を三十一文字に奏でたものである。だからこそ一千餘年の久しき時代を超越して、我々の胸に親しく叫ぐ讚美歌と成るのである。

藝術の世界は今後も益々勢を添へ、我が國民の趣味生活を層一層豊かに培つて呉れる事であらう。二首は春の歌、一首は夏、二首の秋の歌、どれもが全く珠玉のやうに輝いて讀者の目を眩惑させる。

文字語句

新出文字

錦

語句と其の解説

見渡せば柳さくらをこきまぜて 古今和歌集春歌の上、前書に『花ざかりに京を見やりてよめる』とある。こきまぜはかきまぜに同じく、まぜ合はせること。本居宣長の古今和歌集遠鏡に、此の山の上からかう見渡せば、柳の青い色と櫻の花の白い色とでこきまぜて、トント錦に見える。此の見渡したところの京の景色がさ、春の錦と云ふものぢやわい、とある。此の歌のよさは普通名詞を使はずに固有名詞を用ひた點にある。若しも之を、見渡せば色々の木をこきまぜて都ぞ春の織物なりける。としたら何うであらう。其の邊の指導には恰當の教材である。作者素性法師は平安朝の歌人、三十六歌仙の一人、俗名良崇玄利(ヨシミネノハルトシ)僧正遍昭の子。清和天皇に仕へて左近將監と成つたが、出家して雲林院・良因院等に住み、寛平年間權律師と成つた。和歌を能くし古今集に三十餘首を収めて居る。歿年不詳。小倉百人一首の『いまこんと』の作者として知らる。 やどりして春のやまべに寝たる夜は 同春歌の下に出づ。前書に『山寺に詣でたりけるによめる』とある。遠鏡に、春花の散る時分、山にとまつて寝た夜は其の花を惜い惜いと思ふ故か、夢のうちにもさ、花の散る事ばかりみるわい、とある。前書に山寺と書き、歌には寺を言はず唯やどりして春の山邊にと歌つた邊りに花多き山寺に宿つた景色が見える。作者紀貫之は藏人望行の子、其の先は武内宿禰に出づ。幼名阿古久曾(アコクソ)延喜五年勅に依つて躬恒・忠岑等と共に古今和歌集を撰し、又醍醐天皇の勅を奉じて新撰和歌集を撰した。後歴任して土佐守に任ぜられ、承平年間歸洛の時の紀行を土佐日記といふ。從

四位下・木工權頭に任じ、天慶九年歿。年六十五。歌・文及び書道の名家として當時に重んぜられたのみならず、後世歌道の祖として、假名書の名手として崇拜され、其の古今集假名序・大堰川行幸和歌序・土佐日記等は、假名文學勃興の先驅として國文學上に一轉機を來たした。和歌は古今・後撰・拾遺・新古今等に多數選ばれ、家集を貫之集といふ。三十六歌仙の一人、小倉百人一首の『人はいざいで知られて居る。 わが宿の池のふぢ波咲きにけり 同夏歌、題しらず。』や、卯月の來て時鳥のいつか鳴かんとおもへる歌のすがた高く心ひろきなり』と古人も評して居るが、古今集の中でも傑出した歌の一つである。思ふに萬葉から古今に移る過渡期の作品であらう。本居宣長も遠鏡に、『或人の曰く柿本人麿が歌なり』と言つて居る。歌意は遠鏡に、こちの庭の池の邊な藤の花が咲いたわい。時鳥はいつ來て鳴くであらう、とある。よみ人しらずで作者は不明であるが、平明で然も品が高い。秋來ぬと目にはさやかに見えねども 同秋歌の上、前書に『秋たつ日よめる』とある。さやかはハツキリとして居るさま。さだか。たしか。明瞭。分明。古人の註釋に、さやかは日本紀に亮の字をよみて見るものにも聞くものにも清くあざやかなるをいへりとある。歌意は遠鏡に、秋が來たといふて、それとハツキリと目に見えぬけれど、けふは風の音が、にはかにかはつたでさ、これは秋が來たわいとビックリした、とあるを見て明瞭である。此の歌も古來知られた名吟の一つで、古人も『歌の意詞よくとゝのひてあきらかなり。かくことひろく打ちしづまりてよむことのかたきなり』と稱へて居る。作者藤原敏行は三十六歌仙の一人、大日本史に據ると、敏行は富士麻呂の子、從四位上左近衛中將と爲る。書を能くし和歌に巧みなり。村上帝嘗て小野道風に古今妙書の最なるものを問ふ。道風、空海。

敏行を以て對ふ。延喜七年（或は曰く昌泰四年）卒す、と。小倉百人一首の「住の江の」の歌で知られて居る。白雲にはね打ちかはし飛ぶかりの 同秋歌の上、題しらず。顯昭本に影さへみゆるとあり、新撰萬葉にも影さへと有つて古詩に秋天飛翔雁影見とある。然し此の方が一般である。歌意は遠鏡に、さてもさやかな月かな。雲へとくほど高い空をつれだつて、とんでゆく雁の數までがよう見える、とあり尙、千秋云、はねうちかはしは、いくつもつらなりて、雁と雁と羽をならべかはして飛びわたるをいへり。しら雲とうちははすにはあらず、と註してある。此の歌も「よみ人しらず」で作者は不明であるが、秋月を詠じた數多き類歌の中でも群を抜いた名吟として古來愛誦される。

指導精神

國民文化を紹介する目的の下に古今和歌集の中から最も傑出した、然も兒童の理會し易いもののみが選ばれ、大體季節順に排列されて居るのは前既に言ふ如くである。古今和歌集の採集は平安朝文學の一大盛事である。元來平安朝初期は漢詩文が流行し、弘仁・貞觀の頃には勅撰詩集を見るに至つたが、漸次純粹な國民的感情が醸成され、それを自由な假名で表現しようとする自覺的な機運が擡頭して來た。之は一面詩文の衰微を意味し、晩唐亂離の狀が隣邦の大國必ずしも崇敬するに足らずの觀念を我が國民に抱かしめたのに基因する。此の自覺の醗酵に大きな力を爲したものに宮廷に於ける女子の勢力を見逃す譯には行かない。當代では假名文が發達して假名が女流の常用文字と成つて居た事を思はねばならぬ。男子の生活、殊に愛慾と情趣に生きんとした當時の男性は、假名を使用して和歌を吟詠せざるを得ない環境に置かれて居る。蓋し詩文の

衰頹は漢字使用の難易問題では無くて、此の國民的自覺と實際上の生活問題に拘つて居る事を忘れてはならぬ。詩文が此の間に命脈を保つて居たのは、年來の慣習と一種の虚飾とに外ならない。斯かる時代の産物として古今和歌集は成つたのである。

此の古今集の成つたのは延喜五年四月十八日の事で、撰者は紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑、初め其の家集を獻せしめ、更に古今の歌で萬葉集に洩れたものを集め、承香殿の東の舎で選ばせられた。之を續萬葉集と名づけたが、重ねて詔が有つて之を修正し二十卷とした。收むる所は淳仁から醍醐迄約百四五十一年間の作で、歌數は千百首（内長歌五首、旋頭歌四首）堂々たる一大歌集であつて、後世勅選集の基範を垂れるもので有つた。剛健な素朴な萬葉集の後を承けた本集は、優美と成り纖麗と成り平安貴族趣味に和げられ磨かれて來た。素より古今集は長い間の歌を含んで居るが、大體之を讀人不知時代の歌と六歌仙時代の歌と撰者時代の歌との三期に分つ事が出来る。讀人不知時代は萬葉的から古今的への推移の長い時代であつて、未だ萬葉的な素朴性が多い。（本課の『わが宿の』と『白雲に』の二首がそれである）六歌仙時代の歌は業平・遍昭小町等六歌仙と言はれる歌人の時代で有つて、次第に技巧的には成つて來たが、情熱の籠つた自然の表現としての技巧であつて、技巧的・形式的に囚はれて居ない。（本課の『見渡せば』と『秋來ぬと』は此の時代の代表作である）撰者時代の歌は理智的に成り、技巧に囚はれて來た觀がある。（本課の『やどりして』がそれである）然も之が古今的の歌風の中心と成つて居る様にさへ見える。さうして是等の古今集全體を通じた著しい現象として情緒の反省化と言ふことが考へられ、それが情趣的傾向を生み出して居る。此の傾向が表現としては種々の技巧と成り、言葉の修飾が尊ばれ、懸詞・縁語等と言ふ言葉の上の洒落が起



つて、永く其の風を後代に残すに至つた。斯くて古今集の歌は實生活から離れて遊戯的と成つた。そして又理智的と成つた。春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲けり咲かざる花の見ゆらむの如き、其の一例として擧げる事が出来る。自然の美を直に美として歌はずに、靜かに理性を以て現はさうとしたのである。然して本集中最も數が多く且つ勝れた作の多いのは戀歌の部で、前後五卷に亘つて居る。當時兩性間の關係が如何に重大視されたか分る。然も其の多くは「歎く戀」「破れたる戀」を歌つて、其の惱みや悲しみを抒べて居る。「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明けぬるものを」「忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけに物ぞかなしき」の如く悲觀的・消極的の作が多く、本集の特色を示したものである。尙洗練された言葉や言ひ廻しから來る流れるやうな調への快さは、古今集の歌の重要な特質であらう。「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」「心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせる白菊の花」等に最も能く現れて居る。唯其の調が雄大な點や靜寂な深みに乏しくて、優美・纖弱にのみ止まつて居る點は短所とすべきであらう。本課に掲げられた歌は何れも高雅・流麗の名吟で、所謂古今的臭味の稀薄なもの計りが撰ばれて居る。徐に讀誦させ和かな平安朝文學の醍醐味に浸らせ度いものである。

指導 形態

指導上の認識點

1 五つの和歌を通して日本的な美的情趣を觀

取させ、藝術的的心境を、治する

2 既習の和歌と併せて日本文學の粹たる和歌

精神に就いて知らせ、愛誦から更に創作の心境に迄誘致する。

- 3 指導に當つては先づぶつ附けに讀ませ、第一次直觀を基礎として次第に深い含蓄味を鑑賞させる様にし、果は作者の心境に迄味到せしめる心構が肝要である。
- 4 指導は大體三時間位で纏まる様立案すべきである。

第一次指導

- 1 題目の指導。
▽列擧した和歌の或一句を題目とした新しい様式に興味を持たせる。
- 2 全課の自學。
▽ゆつくり時間を與へ第一印象を記載させる。
- 3 讀後感を一首毎に記帳させて置く。
▽目に見えて來た情景・感じ・印象等。
- 4 新出文字・難語句等の板書指導。
▽新出文字。

錦

▽難語句。

こきませて 春の錦 やどりして 花ぞ
散りける ふち波 山ほととぎす さや
か おどろかれぬる はね打ちかはし

低音讀。

▽聲調美の感得を旨として。

指名讀。

▽歌と呼吸を合せて、朗々と。

一首毎に歌意の記帳をさせる。

▽第一次直觀への自己吟味を目的に。

輪讀。

▽一首毎に人を代へて。

ノートを整理して提出させる。

第二・三次指導

- 1 靜かに一度全課を通讀させる。
- 2 指名讀。
▽一首づゝ中・劣生に。
- 3 話合。

4 ▽各自に直観した歌意を中心に、一首づゝ逐次に研究させる。

▽頃合を見て板書で纏める。

和歌
五七五(上の句)
七七(下の句)

(1) 見渡せば	柳	都の春	……(きれい)
(2) やどりして	夢のうち	山邊	……(うるはしい)
(3) わが宿	池のふぢ波	わが宿	……(いゝなア)
(4) 秋來ぬと	さやか	風の音	……(もう秋だ)
(5) 白雲に	飛ぶかり	秋の月	……(あかるい)

きむもおいしかゆ

5 書取。

▽全課を視寫又は聽寫させる。

9 ▽一首づゝ、何人かに。

6 一首づゝ散文化させる。

歌意の味到。

▽散文化したものを原歌と比較させ、和歌の餘韻ある文學形式を味はせる。

10 追範讀。

▽和歌精神を中心に、作者の創作的心境を付度させて。

8 指名讀。

▽百人一首的に(五)(七五)(七七)の三聲に分けて、發想的に。

11 愛誦練習。

▽聲を立てゝ、自由に。

14 ▽歌意から畫題を見出させ、繪心を咬つて繪畫させる。

12 全課の暗誦・暗寫。

13 一首づゝ繪畫化させる。

15 14 語句の書取及應用練習。テスト。

テスト問題

一、次の語句を續けて完全な歌にしてごらん。

- 1 やどりして 見えねども おどろかれぬる
- 花ぞ散りける 春のやまべに 秋來ぬと
- 夢のうちにも 風の音にぞ
- 寝たる夜は 目にはさやかに

二、次の□の中に程よい字を入れなさい。

- 1 見□せば□□□□をこきませて□ぞ春の□なり□□
- 2 白雲に□□□□かはし飛ぶ□□の數□□見ゆる□の夜の□

三、次の語句を使って短文を作りなさい。

- 1 さやかに () 2 ……さへ ()
- 3 打ちかはし () 4 やどりして ()
- 5 こきませて ()

牛車の轍綫かに花と匂ふ平安の都が奠つて以來、尊王討幕の志士が暗躍し遽しく緞帳を下した幕末迄、實に一千八十餘年の帝都であつた京を物語るには、餘りにも數多くの名所舊跡があり、回顧の史實は枚擧に遑が無く、さても京都と題して何を語り何を叙すべきかと當惑するのは凡人の常、其の舊都を語つて流麗斯の如き名文章に直而し、今更の如く其の非凡さに驚嘆さずには居られない。

京都の驛からの双六の振出しも面白く、目まぐるしい程の名所舊跡を片ツ端から名文の綾に彩り、殆ど一つ餘さず其の急所を擱んでは次から次へと急テンポで移り乍ら、表現の巧さに思はず誘はれて樓門・廻廊の類ひから、石の段の數まで數へ、或は御佛を拜し、さては股々たる寺々の鐘の音まで聞く餘裕あるかと思へば、何時の間にもやら双六は上りと成り、京都の心臓を貫く近代産業を語つて此の稿を終つた邊り、驚き入つた名文の魔力では有るまいか。

史實の要點も擱めば建築美にも眼を注ぎ、風俗の特徴も捉へ自然美にも觸れ、四季の讚美又忘れず、四方八面表裏から之を語り之を描寫して、京都の京都たる面目を羅如たらしめて餘す所が無い。愈々進んで愈々冴え、筆華は絢爛として讀者の目を奪ふ。蓋し本巻中の珠玉篇たる貫祿を具へた佳品であらう。

挿畫の印象と其の説明

第七頁の寫眞版は京都御所の正門建禮門を距て、紫宸殿の御屋根を遠望した景觀である。建禮門は舊大内裏外郭門の一つで、内裏の南正面に位する。ずつと昔白馬の節會せまゑは此の門前で行はれたので、一に白馬の陣とも呼ばれ、外郭にあるが故に外門とも稱せられる。今の京都御所南面の正門は即ち之である。

第八頁の寫眞版は京都市左京區下鴨に鎮座の官幣大社加茂御祖神社の樓門である。此の社は玉依姫命・賀茂健角身命の二座を奉祀したもので、天武天皇六年二月創建と傳へられる由緒ある社である。俗に下加茂の社とも呼ぶ。寫眞に見える樓門は本殿の前方數十間の地點に在つて、入母屋造・檜皮葺・總圓柱・重層で、内外總て丹塗の爲老杉の濃緑に相映じ美觀を極める。寛永五年の建築であるが、大體藤原時代の様式に模して建てられ社寺建築中の一異彩とされる。樓門の左右に續くのは廻廊で、桁行十六間之も總丹塗、屋根は切妻造の檜皮葺で、樓門・廻廊、其の他同社の建造物は悉く國寶に指定されて居る。

第九頁の寫眞版は清水の觀音堂で俗に清水の舞臺とも言ふ。京都市東山區松原通清水坂に在つて、西國三十三ヶ所第十六番の札所に當る。田村將軍が造營したと言ふ元の清水寺の跡は既に延暦寺の僧徒の爲焼かれて今は無く、現今の建物は徳川三代將軍家光の再興に係り、寛永十一年竣工、近年に至つて大修繕が加へられて居る。

寫眞は清水寺建築の一大特色たる懸崖に臨んで南面し、長大な柱を列植して支へた舞臺造を見せて居る。建築意匠の秀拔と技術の優秀な點や手腕の非凡な事等、全く驚嘆に値する。然も環境と能く調和し華麗・優雅言語に絶する。舞臺の高い事は昔から、清水の舞臺から飛下りたと思つて、等と何か思切れる時の譬に引用される程有名である。昔豊臣秀吉が此の高い崖上に立つて西望し、明國征伐の大望を起したと言ふ逸話もある。本堂に續く大屋根は總て檜皮葺、挿畫に見えるのは其の翼廊の一部、左下に長く續くのは渡廊下、遠くに聳える三重塔が名高い清水の塔である。

第十一頁は嵐山の勝景で、前面に有名な渡月橋が見える。此の橋は木橋で長さ約一五七米・幅四米、洪水の時流れ落ちて屢々架換へられる爲頗る素朴な板橋ではあるが、それが却つて嵐峽の景觀に一段の趣を添へる。丹波から筏に組んで流した木材は此の橋の袂で陸揚される。即ち寫眞の前景が其の筏である。畫面は下流寄から眺めたもので、水は山に沿うて此方に流れて居る。時恰も新緑の候と見え、樹々の緑が大堰川の清流に相映じ全く幽邃其の物である。花季の嵐山には後嵯峨天皇が龜山仙洞に在せし時、吉野山の名種を移植し給うた御事蹟を偲び奉り、筏を見れば角倉了以が慶長十年大堰川を疏鑿して舟筏の通路を開いた美談を思ひ、又は芭蕉の「花の山二町登れば大悲閣」の句や、瀧口入道を慕つた横笛の戀も適はず身を投げた傳説の淵、さては夢窓國師の座禪石等、自然の祕境として京都第一であるのみで無く、史蹟に豊かな幽邃境でもある。

第十二頁の挿畫は賀茂川三大橋の一、三條大橋の古圖である。天正十八年豊臣秀吉が増田長盛を橋奉行として架設したのが圖の如き六十二間の長橋で、欄干には唐金造の擬寶珠が飾られ京の風景に一段の光彩を放つたものである。向ふに見えるのが「ふとん着て寝たる姿」の東山で、三十六峰眠るが如き趣を見せて居る。橋上を通る人々の風俗を見ると、泰平の夢圓かなりし元祿の頃とも察しられ、京名所圖會を種本として描いたものに違ひない。現在の三條大橋は往古の擬寶珠造を模して鐵骨コンクリートに改造され、橋幅もずつと廣く成つて居る。橋の東詰には高山彦九郎が跪座して遙に皇居を伏拜む銅像が建てられ、此の橋に更に床しい思出を添へて居る。

文字 語句

新出 文字

鎮 護 展 飾 華 恭 層 繁

讀替 文字

社シヤ (新出は卷五、シヤ) 興キョウ (新出は卷七、コウ) 鎮チン (新出、本課) 澤タク (新出は卷八、タク) 峯ホウ (新出は卷五、ミネ) 華クワ (新出、本課) 飾シヨク (新出、本課)

語句と其の説明

京都 近畿地方の名山比叡・鞍馬・愛宕の山々に圍まれ、賀茂川の清流に洗はれて山紫水明の美を恣にする京都市は、近畿地方の一大低地帯の一部を占めて居るが、大阪灣心から近江盆地の中心に引いた直線よりは多少奥まつた處に位置して居る。都として建設された一千餘年前には、生活の凡ての様式を支那風にしよとの模倣氣分が上下を風靡して居たので、廣潤な平野の然も南に餘地の存する様な地域が物色され、大體に於いて山城平野の北部が選定されたわけである。けれども交通上乃至經濟取引上の理由も併せて考察する事が許さるべきである。即ち近江盆地との間の主要通路としての老の坂乃至は嵐山沿ひの線が、今の京都市附近に相會する計りでなく、南方へは多少の角度を成して大阪並びに奈良への大道が設けられて居た。此のうちで京都に取つて最も意味深いものは逢坂山方面の通路である。京都盆地と近江盆地とは大體に於て相接觸する二圓の如きもので、圓の接點が兩圓に對して特殊の意義を有して居る様に、京都盆地内に於て、他の何れの部分よりも近江盆地に最も近接した地形上の接點としての今の位置に經濟都市の生れて來るのは當然の事である。京都が其の初め大陸風な都制に依つて營まれた一方里に餘る廣い地域を、悉く人家擁比の市街地としたか何うかは疑問であるが、其の後頻發した兵亂後の復興に際して、東へ東へと繁華地を移動し、遂に賀茂川と琵琶湖から

引かれた疎水とが切り會ふ附近を中心として賑はしい商工業地區を出現せしめて居る。かうした變遷の甚だしかつたにも拘らず、市街其の物は舊を守つて恭整狀に井然として街區の整つて居るのは他に比を見ないし、周圍の自然美と神社・佛團等に現れて居る人工美と相俟つて、四時風光の麗しい優雅の都として知られ、今後の御即位の大禮・大嘗會等も永く此の地で行はれる事に定められて居る。人口百八萬、我が國第四位。

京都驛

大津から逢坂山のトンネルを出ると京都は早近く、山科を過ぎ東山のトンネルを潜ると、蒲團著て寝たる姿や東山の姿眼前に横はり、三十三間堂・豊公の廟所・清水寺・八坂の塔・知恩院等も指點されて、懐しき京都驛に著く。驛は大正四年大正天皇御即位の際の建築で、近代式に京都趣味を加味してある。七條に在つて市の南部に於ける商業區と工業區との限界を成して居る。驛の彼方は煙突林立して工業地域の活況を呈す。七〇米の日本最高建築物にして且つ特別保護建造物たる東寺の塔が煤煙に圍まれて遙に屹立せる姿は雄々しくも亦哀れである。

東本願寺

眞宗大谷派の本山。京都市下京區烏丸通七條上るに在る。(市電東本願寺前下

車)慶長年間本願寺第十一世顯如の長子教如の創立する所で、寺地は慶長七年徳川家康の寄進。寛政元年諸堂類焼に會ひ、其の後三度回祿し都度再建を見たが、現存の堂宇は明治二十八年落成。未寺數八七一三。

大伽藍

伽藍は梵語の僧伽藍摩に出で、佛道を修する處。寺に同じ。

西本願寺

眞宗本願寺派の本山。京都市下京區堀川通七條上るに在り(市電七條堀川下車)龍谷山と號す。親鸞の季女覺信尼が諸門侶と謀つて造營した東山大谷の影堂祖廟を以て起源とし、正保・文保の頃に至つて既に本願寺の名を稱した。其の後寛正六年迄大谷に在つたが、種々の事情の爲に近江近松寺・本福寺・

越前古崎・山城山科・攝津大阪・紀伊鷲森・和泉貝塚等の各地に轉々として移り、天正十九年現地に寺基を定めた。寺地は秀吉の寄進に係る。現今の堂宇は寛永十三年再建、末寺九六七四。

烏丸の大通

京都驛から御所へ向つて走る近代的鋪裝道路。烏丸と平行した街衢や直行する道路に依つて、平安京の古の跡が偲ばれる。

京都御所

現在の京都御所は古の平安京の左京、一條の南・鷹司の北・東洞院の東・萬里小路の西に當る。地域は東西兩面二百四十六間、南面百三十七間半、北面百三十三。四面に築地を築き溝を繞らす。建禮(南)建春(東)宣秋(西)朔平(北)の四門があり、南部を皇居、北部を後宮とする。建禮門内に承明(中央)日華(南東)月華(南西)の三門があり、内に紫宸殿が南面し、其の前庭に左近の櫻・右近の橘がある。紫宸殿は内裏の正殿で、御即位の大禮は此處で行はれる定めである。紫宸殿の西北に清涼殿東面し、正殿の母屋に御帳臺を立て、晝の御座(ヒノオマシ)とし、傍の塗籠は夜の御殿(ヨルノオトド)即ち御寢室である。清涼殿は、昔は主上の御居間であつたが、近世はたゞ上古の形を存するのみである。階下に河竹・吳竹を植ゑ、御溝の水が其の側を流れて居る。清涼殿の西南に諸大夫の間、北に御車寄があり、西面して宣秋門に向ふ。紫宸殿の東に宣陽殿、更に東に内侍所がある。紫宸殿の東北の方に小御所・御學問所(其の東北に常御殿がある。聖上の御居間である。其の北に迎春・御涼所、更に北、林泉の間に聽雪がある。御花御殿は東宮の御殿で常御殿の北にあり、長廊を以て後宮に通じて居る。常御殿の西北に參内殿があり、此の間は雜舎・倉庫が軒を並べて居る。御所の外郭は昔の九門の内、今芝生の御苑と成つて居る。北は今出川、南は丸太町、東は寺町、西は烏丸に至り、南側三百八十五間、東西側七百餘間の長方形を成して居る。

南に堺町御門、東に石薬師門・清和院門・寺町門、西に乾門・中立賣門・蛤門・下立賣門、北に今出川門がある。御所は中央稍北に當り、其の東南に仙洞御所・大宮御所が並び、東北に明治天皇に縁きよの祐井がある。桓武天皇が延暦十三年に奠都の時成りし御所は西方の内野大内裏址であつたが、天徳の災以來屢々火災に罹り、遂に廢城と成るに至つた。然して天皇は里内裏即ち假皇居を以て御住居に宛てさせられる事と成り、土御門殿・閑院殿・大炊殿等の殿舎が御在所と成り、其處に紫宸殿・清涼殿等を造營して公事・儀式等を行はせられた。今の御所の地はもと藤原氏の傳領で、大納言邦綱の家が在つた所だが、高倉天皇讓位の後暫く此處に遷幸された事があり、其の後所謂里内裏と成つて諸殿の造營等あつたが、屢々火災に罹り戦亂に禍された。現在の御所は安政三年の新營である。(市電堺町御門下車) **檜皮葺** 檜皮で屋根を葺くこと。又其の屋根。 **紫宸殿** 京都御所の正面にある正殿で、歴代御即位の大禮を行はせ給ふ所(前項参照)南面にして東西十五間の大建築で、屋根は全部檜皮葺である。正面の階段は十八、其の階段の兩脇には名高い左近の櫻・右近の橘がある。 **比叡山** 京都府と滋賀縣との界上、京都市の東北に屹立する古來有名な山で、山頂を境に其の西半部は京都市左京區に編入。王城鎮護の靈山として知られた。比叡山は高度僅か八四八米に過ぎぬが、京都市民は恰も我々が富士を仰ぐが如き感で比叡山を慕ふ。之は山其の物が周圍の群峰より秀で、居るのみならず、此の山には平安遷都と同時代に天台宗の法燈を掲げた延暦寺と、比叡山王と言はれた官幣大社日吉神社が有るからである。丹波高原の東端を限り古生層を主とし、南半には粗粒質黒雲母花崗岩を迸發し、山頂は風化されて樹木生ぜず白く禿げて居る。谷は深く細く刻まれ遠望すると其の巒が實に

美しい。登山には京都市北出町柳から叡山電車、坂本からは比叡登山鐵道が有つてケーブルカーを山に通じ、何れも十分餘で山路の大部分を登る事が出来る。 **賀茂川** 淀川の支流。貴船山に發



加 茂 御 祖 神 社

源、上賀茂・下鴨を経て南下、癸橋附近で高野川と合し、上京區・中京區と左京區・東山區の間を流れ、桂川と合して淀川に注ぐ。古來賀茂川の清流として著名であるが、現在は水量少く名聲に添はない。但し下鴨附近の西岸は眺望佳。河床は概ね砂礫で、淺瀬の所々に晶玉を轉ばし、四條河原の夕涼は昔程でも無いが、今尙京都の夏の涼しい景物たるを失はない。 **下加茂の社** 上・下兩社より成る。共に官幣大社に列す。上賀茂社は賀茂別雷神社(カモノワキイカッチノジンシヤ)と稱し、京都府愛宕(ヲタキ)郡上賀茂村上賀茂に鎮座して別雷神を祭り、下加茂社は賀茂御祖神社(カモノミオヤノジンシヤ)と稱し、京都市上京區下鴨糺(タダス)の森に鎮座して玉依姫命(タマヨリヒメノミコト)賀茂建角身命(カモノタケツスミノミコト)を祭る。上・下二社相待つて常に賀茂神社といふ。

玉依姫命は上賀茂の祭神別雷神の御母、建角身命は即ち八咫鳥に化して皇軍を導かせ給うた神で、其の外祖父に當る。賀茂氏の祖神として往古より神威高く、桓武天皇平安奠都以來、殊に王城の鎮守と

して朝野の尊崇極めて厚く、神領も亦豊かである。上・下の兩社一と成つて山城國の一の宮と成り、伊勢・石清水と共に三社と崇められ、二十二社の奉幣に預り、桓武天皇以來行幸啓等の盛儀多く、國難に際しては必ず祈願し給ふを例とした。賀茂川を挟んで、一は賀茂・御生所（ミアレ）の山を負ひ、一は糺の森に鎮座する。例祭は五月十五日、其の祭は賀茂祭又は葵祭といひ、平安京裡壯觀の隨一として今も名高い。

銀閣寺 ギンカクジ 正しくは慈照寺といひ、もと天台宗の名刹淨土寺の有つた所であるが、足利將軍義政が三代將軍義滿の例に倣ひ、此の地をトして別業を營み、文明十二年政務を譲つて後は専ら此處に閑居して東求堂並に銀閣を造營したが、延徳二年薨去の後、遺命に依つて寺と成し、相國寺の末寺の一に列する事に成つた。東求堂とは蓋し義政の持佛堂で有つて、觀世音菩薩を本尊とし、堂内の一室である四疊半の茶の湯の間は後世の茶室四疊半の濫觴と爲すものである。銀閣は寶形造二重の高閣であつて、上を心空殿、下を潮音閣といふ。彼の義滿將軍創建の北山鹿苑寺の金閣と並び稱せられ、室町後期の邸宅建築として典型的のものである。庭園は相阿彌の作で、是又造園の好模範とされ史蹟名勝地として指定。（市電銀閣寺道下車）

東山 ヒガシヤマ 市の東方に連なる所謂三十六峰で、京都名所の半は此の山麓に在ると言つても良い。山が全部丸味を帯びた所に他の地方に見られぬ軟らか味があり、優しみが有り曲線美がある。圓山公園から眺めた横が圓く山を蔽うた東山の優雅さは他に比べる物が無い。朝日・夕日・月明・星月夜と其の折々に東山の色が變り、バツクの空の色が變る時、各種各様捨て難い趣がある。

平安神宮 ヘイアンジンギョウ 市電平安神宮前下車、岡崎公園に隣接し桓武天皇を祀る官幣大社。明治二十八年京都市に於て桓武天皇平安遷都一千一百年祭を舉行の際、天皇の

宏謨を追慕尊崇し神靈を奉祭せんと政府に出願した所、允許を賜ひ社號を平安神宮として官幣大社に列せられ、御内帑金二萬五千圓を下賜された。境域は約一萬坪、神殿は南面して往時平安京の大極殿を模し、古制の約二分の一だが華麗莊嚴の殿堂で、丹朱を塗り屋根には碧瓦を用ひ鴟尾を附してある。神苑は櫻花を始め四季の眺めに富み、清楚にして都塵を知らぬ思ひがある。尙大極殿址は千本通下立賣下る小山町の西側に在り、千本通から西に入り新屋敷の舊地より北方一帯の地で、今尙地中から礎・碧瓦等を發掘する事がある。千百年祭舉式の際古圖舊記に據つて敷地を考證し、碑を建て、舊址を後世に傳へて居る。此の碑から以南に一直線に朱雀大路が通じ、其の南極九條通に面して羅城門があり、其の左右即ち東西に東寺・西寺が有つたわけである。

南禪寺の山門 ナンゼンジノヤマカド 南禪寺はもと龜山上皇の離宮で東山の翠巒を負ひ景勝の地であつた。後寺と成り京都に禪宗の五山が出来た時には其の上に置かれる事に成つた。堂舎は多く應仁の亂に焼かれ、後類廢に委したのを豊臣・徳川の二氏が漸次に復興して今日に至つた。名高い山門は五間三戸の大樓門で、寛永五年藤堂高虎の再建に係る。門は又天下龍門と言ひ、樓は特に五鳳樓と號し徳川時代初期に於ける禪風三門の代表作である。臯賊石川五右衛門が此の樓上に住んで居たと言ふ俗説で知られて居る。

疏水 ソウスイ 東山の中腹を貫き隧道を通じ琵琶湖の水を京都市に引き、一は以て水力發電運輸灌漑等に利用し、一は以て飲料水を得んとする疏水の大工事は、明治十八年六月に起工し二十三年四月を以て竣工したもので、時の京都府知事北垣國道が遺業の一である。琵琶湖面は京都の蹴上迄三十六米餘の落差があるが、此の間疏水の勾配は二千分乃至三千分の一である。蹴上迄は急な傾斜を爲し、以て水壓動力を起して居る。輸送船はイン

クラインに依つて第三隧道西端より南禪寺舟溜に至る迄上下する。此の延長五百米、幅二十一米、勾配十五分の一、鐵軌四條を敷設し左右の船臺を交互に上下せしめる。所要時間十三分である。

知恩院 東山の景勝の地を占め、寺號は華頂山大谷寺。もと吉水の禪房と稱し、天台座主慈鎮和尚の施與する所、淨土宗の宗祖法然上人止住の地であつて、一宗根元の道場である。上人示寂の後叡山の衆徒蜂起して堂宇を破壊し墳墓を發掘したが、文曆四年再興し、其の後後柏原天皇勅を下して一宗の本寺とし、後奈良天皇更に勅額を賜はつた。滿譽僧正の代、徳川氏の外護に依つて大に寺門を紹興し、堂塔規模宏壯を極めた。且後陽成天皇に奏して第八皇子八宮を講じて法親王とし華頂宮を創立して以來、歴世法親王を以て門主とし、其の風明治維新の頃迄繼續された。今の本堂は寛永十年徳川家光の造營で上人の影像を安置してある。例の鶯張の廊下で名高いのは此の建物である。

圓山公園 其の昔平忠盛か古狐と誤り老僧を捉へたと云ふ祇園の社、即ち今の官幣大社八坂神社附近一帯の盛場を祇園と言ひ、江戸の淺草と並稱される。圓山公園は八坂神社の東、東山の翠巒を擁し、南は高台寺、北は知恩院に接し、櫻樹が多く京都第一の公園。園の中央に老齡の名木垂枝櫻がある。四月上旬の花期には夜毎にボンボリを附け篝火を焚いて眺める。樹下に群る人影は燈火と花とに映じ美觀言ふべからざるものがある。世に之を祇園の夜櫻と稱し、京都情調の第一に數へる。

八坂神社 市電祇園石段下車。下京區祇園町北側に在り、圓山公園に隣接して居る。素盞鳴命・稻田比賣命・八柱御子神を祀り、今も明治以前の祇園社の名で通つて居る。此の社で名高いのは一月元旦の淨火を貰ふ白求祭と七月十七日から二十四日迄の祇園會である。殊に祇園會は江戸の神田祭・浪花の天滿祭と共に日



八 坂 の 塔

本三大祭の一つで、山鉦の行列や祇園囃子は今尙盛なものである。本殿は南面して設けられ祇園造と稱する江戸時代に出來た大規模のもの、室町時代の作と言はれる西樓門と共に國寶である。細雨靜に降る日淡く霞んだ東山を背にして此の丹碧の門や廊が夢の様に浮んで居る風情は、京の祇園といふ感じが迫つて來る事を覚える。社格は官幣大社。

清水寺 西國十六番札所。法相宗。寶龜年中、小島寺報恩大師の弟子延鎮法師の建つる所、初め木津川上の行叡居士の舊庵に草堂を建て、止住せしが延暦十三年平安に遷都の後、延鎮又東山なる今の地に移り、同十七年將軍坂上田村麿の歸依を得て伽藍を營み北觀音寺と稱し、同二十四年定額寺と成り、大同二年今の清水寺の名に改めた。本尊は十一面千手觀音菩薩、脇士は毘沙門天と地藏菩薩である。此の寺は興福寺の末寺として法相宗に屬した爲、屢々延暦寺の衆徒と争闘し幾度か回祿に罹つたが、參詣の道俗古より今に至る迄常に絶えず、實に洛東隨一の靈場である。今の本堂は寛永十年の造營に成るもので、俗に清水の舞臺と稱し、南の方山涯に沿ひ掛出して營構してある。風光明媚、新高尾の溪谷を眼下に見、遠く京洛の西南望を一望の間に收める事が出来る。

八坂の塔 八坂法觀寺の塔を言ふ。八坂の法觀寺は平安奠都以前の舊刹で有つて、或は聖徳太子の草創とも傳へ

られて居る。往昔は寺運隆盛を極め延喜七太寺の二に數へられた程の名刹で、淨藏貴所が持念の力を以て塔の傾いたのを直したと言ふ有名な話も残つて居る。此の塔創建當初のものは夙に焼失し、建久年中源頼朝之を再興したが、又回祿に遇ひ烏有に歸した。今の塔は永享十二年足利義政の營建したもので有つて、五重の塔内には大日・寶生・彌陀・釋迦等の五智如來の像が安置してある。

豊國神社 又ホウコクジンジャとも言ふ。東山區茶屋町に在り豊臣秀吉を祭る。慶長三年八月秀吉薨じ、洛東阿彌陀峯に葬り、山下豊公坦（ホウコウダヒラ）に神祠を創建、同四年四月竣工、吉田神道の宗源行事に依て祭事を行ふ。同月十七日豊國大明神の神號を賜はり、尋いで正一位を贈らる。秀頼社領一萬石を寄進、爾來年々盛大なる豊國祭（ホウコクサイ）が行はれたが、元和元年豊臣氏滅亡後は社殿荒廢に歸し、徳川四代將軍家綱一時之を復興せんとしたが果さず。明治元年豊國山の廟祀再興の詔旨を拜し、同六年八月別格官幣社に列せられ、九月大佛殿の遺址に社殿竣工して神靈を遷座し今日に及ぶ。大正十四年三月夫人北政所を配祀して攝社貞照神社を創立した。例祭九月十八日。

三十三間堂 蓮華王院。市電七條大和路停留場の東南に在る天台宗の名刹で、本堂の長さ六十五間二尺三寸、二間毎に柱が建て、あるので世に三十三間堂と呼ばれる。此の地は昔後白河法皇の御所の内で有つたが、法皇が深く佛教に歸依し給ひ、平忠盛に奉行せしめて建立され、其の後屢々災厄に遭ひ建長三年再建に及んだ。正に平安朝末期、鎌倉時代初期に於ける我が國有数の建築物で、特別保護建造物に指定されて居る。淨瑠璃で名高い「棟木の由來」は本堂の棟木に用ひた柳を題材としたもので勿論傳説に過ぎない。 **一千一體の御佛** 本堂は建長三年の造營に係り、桁行六十五間二尺餘、



梁行九間一尺八寸に餘り、百五十八本の柱が有つて、七百年に近い星霜を閱するも猶棟宇の傾欹したものが無い。正に洛中古建築の粹である。本尊の千手觀音像一體（一丈七尺國寶）脇立二十八部衆二

十八體（五尺四寸國寶）風神一體（國寶）雷神一體（國寶）は建長三年後深草天皇の勅を奉じて湛慶・康圓・康清等が作つたもの、爾餘の千手觀音一千一體も同時の作であると言はれて居る。瓦屋根で圓柱は丹塗を以て塗られ、内部の繪は五彩の色絢爛を極めたが、今も其の面影は剝落の中に隠見して居る。

三十三間堂

稻成らせ給ふ御靈なりとして古來世の崇信厚き官幣大社稻荷神社は、伏見稻荷山の西麓に在つて京都に通ずる街道に面す。省線及び京阪電車は直ぐ其の西に在る。伊奈利神は元秦氏の創祭する所、山内の三所に祭つて三座であつた。延喜式に紀伊郡稻荷神社三座並に名神大社とあるは之である。中古以來攝社田中大神・四大神の二社を本殿に合祀し世に稻荷五社の名がある。本社の外に若宮・拜殿・繪馬堂・寶庫・御殿・樓門等がある。現今の諸社殿は天正十七年

豊臣秀吉の造營に係る。神社に隣接して荷田東滿舊宅（指定史蹟地）がある。

伏見桃山の御陵

省線桃山驛より一軒（京阪電車桃山下車）伏見區桃山町古城山に在る。明治四十五年七月三十日明治天皇崩御し給ひ、大正元年九月十三・十四・十五日御大葬を取り行はせられ、同月十六日、京都の

南、伏見の東方、即ち桃山町古城山に葬り奉った。(當時紀伊郡堀内村)伏見桃山陵と稱し奉る。御陵は其の形式、上回下方にして御拜所より二〇米の高さにある。回頂部には砂磔を敷詰め、其の高さ六・三米。此の地は伏見山と言ひ、又桃山とも言ひ、豊臣秀吉が伏見城を築いた所、本丸は御陵の北に當る。

東陵

(ヒガシノミサ、ギ)桃山陵の東、坂を下れば昭憲皇太后の御陵、桃山東陵である。御陵の形式は桃山陵と同様で規模が稍小さい。皇太后は大正三年四月九日沼津御用邸にて重態に渡らせられ、同四月十一日青山御所還御の上崩御遊ばされた。御壽六十六。同五月二日殯殿に移御、

九日昭憲皇太后と御退號、二十四日夜代々木にて御式あり、二十五日夕刻御寶壙に斂め奉り、此の日伏見桃山東陵と御命名あらせられた。

乃木神社

伏見區桃山町桃山御陵畔の板倉周防に在り、乃木大將と夫人靜子の方を祭る。社格は府社。

二條の離宮

舊二條城で堀川の西、竹屋町の南、押小路の北に在る。慶長七年徳川家康が關西の諸侯に課して造營し、一つは輦下の鎮營とし兼ねて自身上洛の際宿營に充つるの目的を以て築城したものである。爾來徳川諸代の將軍上洛駐旆の所であつた。徳川慶喜に至つて、慶長三年十月、上洛此の城に在つて天下の形勢を考へ、遂に大政を奉還したのである。明治元年正月太政官代と成り、二月明治天皇の御臨幸あつて親征の詔を頒ち給うた所である。明治十七年改めて宮内省に移管して離宮と爲し今日に至つた。今の正殿は舊二條城の二の丸の遺構で、車寄・遠侍・大廣間・黒書院・白書院等から成つて居る。

北野神社 北野の天満宮又は北野天神として聞えた社で、上京區馬喰町に鎮座。(市電北野下車)御祭神菅原道實公筑紫太宰府に薨せられて四十年の後今の地に祀られ、爾來上下の崇敬を集めたもので、現在の社殿は豊臣秀頼が片桐且元を奉行として慶長十二年に造營し、権現造社殿の初期のもの、特に本殿は八棟造の名がある。中門(三光門)本殿・拜殿・南廊の廻廊等何れも建築當時の儘で、今國寶に指定されて居る。社格は官幣中社、境内は梅の名所として知らる。

三層の金閣

鹿苑寺。臨濟宗。西園寺公經、承久の亂後權勢あつて北山に山莊を造つたが、後又足利將軍義滿此の地を好み、大に別業を營んだ。子義持父の遺命に依り禪刹として義滿の院號を採り鹿苑寺と號した。庭内に三層の金閣あるを以て俗に金閣寺と言ふ。高さ四十餘尺、初層を法水院、第二層を潮音閣、第三層を究竟頂と言ひ、初層の右側、池中に突出せる所を漱清と稱し當初盟獻の所である。第三層は優雅な寶形造で柱・壁・窓・戸・天井・勾欄等悉く漆を塗り金箔を押ししたものである。屋頂には銅鳳を置く。建築の様式は禪宗建築に寢殿



金 閣 寺

元を奉行として慶長十二年に造營し、権現造社殿の初期のもの、特に本殿は八棟造の名がある。中門(三光門)本殿・拜殿・南廊の廻廊等何れも建築當時の儘で、今國寶に指定されて居る。社格は官幣中社、境内は梅の名所として知らる。

造を加味し、藤原時代の裝飾を加へたもので、室町時代建築林泉の好資料として現に特別保護建造物である。庭園は指定史蹟名勝地。

仁和寺

眞言宗御室派の大本山、右京區御室にある。御室御所とも言ふ。本尊は阿彌陀如來、宇多法皇が開祖。代々法親王相繼承し御室門跡と號す。明治維新に純仁法親王復飾せられ小松宮と申す。本堂・五重塔・御影堂は國寶、其他山門・黒書院・中門・宸殿・經坊・觀音堂等があり、御室の櫻・霧島躑躅・六本杉等も有名、特に櫻を以て知られて居る。御室驛から一軒五、嵐山電車御室下車。御室の櫻は指定名勝。

池 澤 廣

廣澤の池 右京區下嵯峨の池を言ふ。由來京洛の北郊には山麓に沿うて小澤地が點在するが、何れも丘陵と沖積地との間に堤防を設けて人工的に堰塞されたものが多い。嵯峨の大覺寺より東約八七二米の廣澤池も其の一つで、大さは方が三二七米餘、僧寛朝が掘つたものと言はれて居る。池畔に影を映す遍照寺山の低き顛頂形に丸められた姿は、此の附近に見る特有の温雅な山姿である。池は月見・櫻花・水禽・秋草・觀雪の名所として知られ、古人の吟詠に入つた事も少くない。今も春秋の頃池塘に風流を眞似る人が後を絶たない。

大澤の池

上嵯峨に在り、もと嵯峨



天皇の離宮地の域内に在つたもの。池中に菊島と呼ぶ島がある。島の西北端に庭湖石と稱する岩があり、往時は嵯峨に於ける奇勝と稱へられて居た。紀友則の「ひと」と思ひし菊を大澤の池の底にもながめつるかな」と詠んだのは此處である。後世に成つて池畔に在つた名石は閑院内裏に移され風致も自ら廢れた。今池畔に楓樹多く、春日秋好に節を曳くに良い。

嵯峨野

右京區嵯峨附近を言

ふ。市の西北隅に位し、桂川を隔て、嵐山に對する。昔から嵯峨野として著れ、附近一帯に竹林多く、箭の名産に富み、大覺寺・大澤池・清涼寺・祇王寺・二尊院・天龍寺・小倉山等の名所舊蹟がある。殊に平家物語にある小督の局の話は普く人口に膾炙して居る。本課も恐らく其の邊を指したものであらう。

嵐山

指定の史蹟名勝地。保津川峡谷の狹隘急湍が京都盆地の沖積平野に開いて瀾然たる

所に嵐山の清境があり、架するに渡月橋の長橋を以てして居る。山は海拔三七五米に過ぎぬが、櫻花と楓樹、鬱蒼たる綠樹に點綴して、春に良く秋にも好い。水清く山姿倒に搖れる夏日の行樂は又捨て難い。昔は紅葉の名所として知られ、醍醐天皇の御遊の時、紀貫之が書いた大井川行幸の記も紅葉や晩秋の景のみを叙して花には觸れて居ない。勿論秋も好いが、春の花は更に好い。殊に小倉山の中腹から見下した眺は天下一品で、花に包まれた山裾を桂川の清流が流れ、行き交ふ遊舟は花の上を滑つて居る。嵐山は其の山容も美しいが、それに配する桂川の清流が有つて始めて眞の美しきがある。嵯峨驛から渡月橋迄八〇〇米、其他四條大宮・北野から電車、大阪方面から京阪電車の便がある。高尾 紅葉の美と山河幽邃の勝地として古來其の名を天下に知られた高尾・楳尾・榊尾の所謂高尾は清瀧川に沿うて相接して居る。清瀧川は古生層の巨岩蟠居して急湍岩を嘯むの壯絶さを持た

ぬが、深く侵蝕された溪谷に清流潺湲として、秋日とも成れば峡谷の冷気は懸崖に臨んで密生せる老楓を血よりも深く染めて紅雲谷に滿つるの觀がある。幽雅な高尾橋を渡つて對岸の石礎を登れば、和氣清齋が建てた高尾山神護寺（眞言宗大覺寺派）がある。嵐山電車高尾下車。 **勤行** 佛語。佛道を修行すること。佛前で時を定めて讀經や回向等を行うこと。おつとめ。 **三條の大橋** 三條通賀茂川に架した橋で、京都三大橋の一。長さ一一三米、幅八米一、古來東山・東海・北陸諸道の起點と成り、里程元標も其の西詰に在つた。創設は古く、天正十七年豊臣秀吉が改造して紫銅の擬寶珠を作り、維新後も改造・修理され、大正元年に大改造。形式は舊式だが、擬寶珠の外は全部改め、舊石柱は之を徹した。繁華な三條通である爲交通頻繁、又東詰からは京阪電鐵本線及び京津線が出る。橋の東詰南側には高山彦九郎の銅像がある。

擬寶珠 橋の欄干の柱の頭、又は堂の棟等に飾り附けるもの。形は葱（ネギ）の花に似て居る。

大原女 洛北大原から出る黒木賣で、白河から花賣に来る白河女と好對である。衣服は木綿小紋黒掛襟、帯は御所染といふ紺地白小紋、其の上に抱帯を結んで抑へ、白腰巻・黒か白の手甲・白脛巾前合せ・白甲掛足袋・草鞋の扮装で前垂は用ひない。手拭は綿入で房があり、頭に被り腰にも下げる。

友禪染 染方の名、絹帛に種々の染料で人物・花鳥等の模様を鮮かに染出したもの。昔は多く手工的で糊や染液・色糊で描染め、加賀友禪・京の友禪等が有名であつた。今日は大量生産の目的で型紙捺染法を行ふものが多い。宮崎友禪の完成した染方であるから、此の名がある。友禪は京都の人、書を能くし狩野・土佐兩派を折衷、又光琳の長を採つた畫風を爲し、京知恩院門前に住む。天和二年には村山座の狂言額を描いたが、此の年發行の一代男に友禪が

圖して賣る扇が友禪扇として行れた。晩年加賀に移住し前田侯保護の下に加賀友禪の盛名を博した。

元文元年歿、墓は金澤の龍國寺に在る。

西陣織 起源は遠い。桓武天皇平安奠都と共に起源を發せる京洛の絹業は、應仁の亂の爲一時全く荒廢したが、亂後四散せる工人等山名氏布陣の跡たる當時の白雲村に復歸し漸時隆盛に赴き、遂に全國機業の中心と成るに至つた。西陣の名は之に因縁して居ると言ふ。徳川幕府は西陣の紋織特許權を認定し、或は組合制度を定める等特に之が保護に力を用ひた。轉じて維新の始め時の知事は人をフランスに派遣し、泰西の染織術を研究せしめ或は新にジャツカード織と稱する紋織機を輸入する等勸業大に努めた。西陣の今日あるは専ら是等保護政策の賜と言ふ事が出来る。最近年額六千二百萬圓を突破するの盛況に在り、使用織機も時勢の進展に伴ひ漸次動力化されつゝあるが、所謂西陣の精巧なる紋織物は依然として手織機に依るものが多い。

東寺 眞言宗東寺派の總本山。市電七條大宮東寺道下車。東寺は又教王護國寺と稱し桓武天皇延暦十五年羅城門の左右に東西兩寺を建て都鎮護と爲れた其の一つである。西寺は早く廢れ東寺のみ昔時の面影を偲ばせて居る。嵯峨天皇の弘仁十四年弘法大師に現在の寺號を賜ひ眞言宗の大本山と成つた。京都の第一印象と成つて居る五重塔は高さ七十一米弱、世界最高の木造建築物であるが、今煤煙の中に包まれて居る。本課は此の煤煙に京都の近代化を思はせて居る。

指導精神

多くの名所や史蹟を疊み込んで、舊都としての京都の面影を偲ばせて居る。着眼は勿論京都情調を味はせ

るに在るが、文の観點は後半の『しかし京都はたゞ古い歴史だけの都ではない。町並が蒼盤の目盛のやうだといつたのは昔のこと、近郊二十七市町村を合はせた今の京都は、何といつても近代的大都市である。』の邊りに在つて、舊い都から新しい都へと近代化して行く、人間努力の偉大さと文化的發展の跡を辿らせる點に在る。其處には近代日本の姿も暗示され、發展向上の意氣に燃える國民的氣魄も窺はれる譯である。取扱も之に即し無用の穿鑿は嚴に之を戒め、ひたむきに此の標的に邁進する用意が肝要である。

題材の京都は地勢上如何にも優越な位置を占めて居る。東に加茂川があり西に桂川がある。南は京都平野に連り、北は所謂北山一帯の山嶺を負ひ、東は三十六峰眠るが如き東山に接し、西は嵐山・天王山の山峰を繞らし、南は巨掠池や宇治川を隔て、奈良丘陵があり、山河襟帯、自然の城の名に背かない。桓武天皇の延暦奠都以來、一千百餘年の帝都と成つたのも偶然では無い。従つて市の内外は名勝・古蹟に富むこと海内第一で、然も風俗は優雅、山水は秀麗、東山の艶、西山の翠、加茂川の清、大堰川の奇、一容一態、其の趣を變へて人を厭かしめず、淹留旬日、尙戀々として歸るを忘れしめるものがある。

京都の趣味は何と言つても此の低回味にある。見るもの聞くもの總てが歴史美に彩られ、低回去る能はざるものがある。立並んだ家居、往き來の人々、四條の橋はコンクリートで固められたが、松原から五條の邊り、天氣の好い日、河原に晒す紅の布と、川岸に立並ぶ柳の淺緑、昔を偲ぶ欄干に横に翳した日傘の下から遠くに霞む東山の姿、唯それ床しく美しい。昔の書物に「京は砂糖漬のやうな所」と書いてあるが、三十六峰の布團着て寝た様な圓いノンビリした姿を眺めた氣分は、全く砂糖漬の味である。尤も近頃は加茂川の畔にイルミネーションが光つたり、町中を貨物自動車物が物凄じい地響を立て、驅廻つたり、優美を跨る大原女さ



京都附近

へ足にゴム靴を履く時勢と成つたから、昔の面影は日増しに薄れて行く。然し如何に近代化したとは言へ、京都は矢張京都である。清水の舞臺、八坂の塔、三十三間堂の佛、知恩院の疊、北山の金閣寺、東山の銀閣寺、北野の梅、嵐山の水、さては葵祭の御所車、祇園祭の鉦山車等、何れも慕はしく奥床しい物の一つで有らねばならぬ。

市の遊覽には普通東山方面を一日、西山方面を一日で済すが、之はホンの通一遍の見物で、詳しく寶物を見・建築を研究し・史蹟を探るには五日や十日でも尙不足である。試みに遊覽順路を示せば、

(1) 東山から北山方面

- 東本願寺—西本願寺—博物館—豐國神社—大佛—三十三間堂—智積院—妙法院—西大谷—清水—高臺寺—八坂の塔—東大谷—圓山公園—八坂神社—知恩院—動物園—平安神宮—インクライン—南禪寺(以上を普通東山巡と言ふ)——永觀堂—若王子—黒谷—眞如堂—吉田神社—法然院—銀閣寺—

百萬遍—下加茂—上加茂(以上を普通北山巡と言ふ)—相國寺—御所—新京極—六角堂。

(2) 西山方面

東寺—鳥原—壬生—北野神社—平野神社—金閣寺—建勳神社—大徳寺—等持院—仁和寺—妙心寺—天龍寺—嵐山—虚空藏—釋迦堂—松尾神社—西芳寺—梅宮—廣隆寺—二條離宮。

(3) 保津川下り

龜岡驛下車、保津川遊船で嵐山迄四里の間を一時間半で下る。此の舟遊は初夏新緑の候、躑躅花咲く頃が好い。

(4) 三尾の紅葉

愛宕山の東麓清瀧川の曲流する所、高雄には神護寺、緋尾には高山寺、横尾には西明寺があり、紅葉の名所として知られて居る。京都から西北四里、自動車の便がある。

(5) 八瀬大原方面

山端から比叡の西麓を進み、大原女で知られた八瀬大原に行くと、寂光院・三千院寺の名刹があり、建禮門院や後鳥羽・順徳兩院の昔偲ばれる址が多い。京都から東北四里、電車・自動車の便がある。

(6) 桃山から宇治方面

桃山御陵參拜を兼ねて乃木神社や萬福寺、宇治の平等院・興聖寺・縣神社其の他を見るのは京都から一日の遊覽區域で、奈良線の汽車に依つても良いし、電車や自動車で行つても良い。

(7) 長岡の古都址方面

京都の次驛向日町附近は桓武天皇の一度都を置かせられた長岡の古都址で、長岡天満宮・大原野神社・粟生光明寺・善峰寺等があり、京都から一日の遊覽區域である。

(8) 清水から山崎方面

山崎附近には天王山・妙喜庵・櫻井の里・水無瀬宮・石清水八幡宮等があり、山崎驛を起點として巡遊するか、桃山御陵參拜の上京阪電車で八幡へ行き歸途山崎驛に出るか、何れにしても京都からは一日遊覽區域である。

指導形態

指導上の認識點

- 1 本課の指導觀點は先づ優美極まる歴史の古都として皇國精神の浸潤した京都を偲ばせ、懐古懐舊の情を喚りつゝ、京都情調を満喫せしめるに在る。
- 2 其の爲には此の低回味豊かな文から美的京都の全貌を想像に描かせ、懐古味に富む挿畫の活用によつて身恰も境地に在るが如き實感本位の指導方法を立案せねばならぬ。
- 3 更に現代京都の眞相を理解させる爲、既習の東京・大阪等の大都市と比較させ、活躍京都の現状を認識させる事も、國民教育としての祖國理解の立場から又大切な事であらねばならぬ。

- 4 本課は一千餘年來の古都として土地柄名所舊蹟の數多く、勢固有名詞の數も少く無いから、一々其の故事來歴を補説するのは煩しいが、中でも重要なものに就ては簡單な話材を附加して理解を容易にするのも止むを得まい。
- 5 本課は大體五時間見當で如上の指導を纏める様立案するのが妥當であらう。

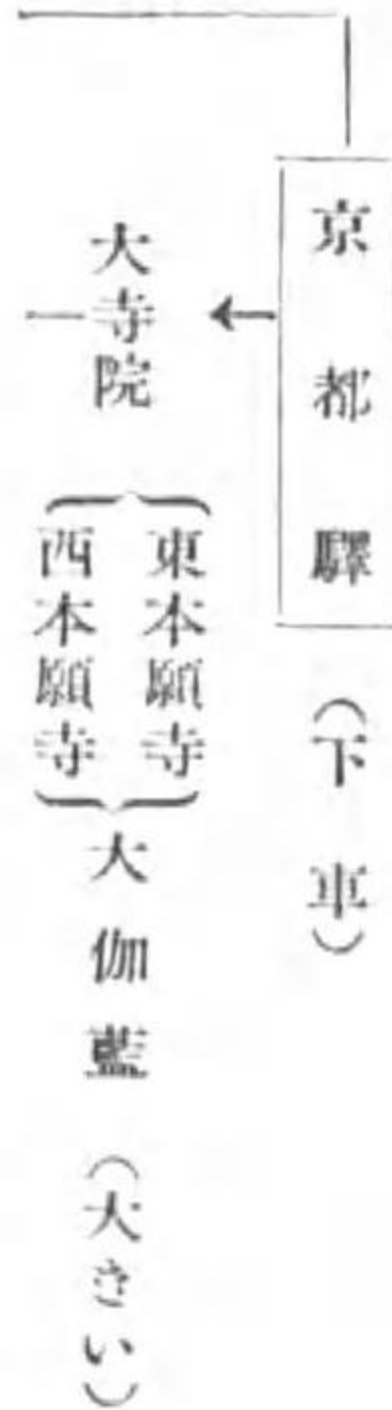
第一次指導

- 1 題目の取扱。
 ▽板書して讀ませ地圖と照合させて地點を明らかにする。
 ▽兒童の能力如何に依つては多少の補説を加

- 2 一度静かに全課を通讀させる。
- 3 第一印象其の他は記載させて置く。
- 4 讀後の印象を中心とし地理での學習も想起させて。
- 5 新出文字の指導。
- 6 教材の性質上之も一括して授け、讀みの障礙を逸速く除去してやる。
- 7 方法としては第一讀後上欄文字を順々に板書し振假名を附してノートに書取らせる。
- 8 又手引を謄寫して與へたり小黑板を利用するのの一法であらう。
- 9 鎮護社 興展 飾華 恭鎮 屑澤 峯繁 華飾
- 10 再度通讀させ全課の荒筋を掴ませる。
- 11 何處から見物を始めたか どんな道順に何を見たか 見て何う思つたか 不明の箇所は無いかな等。

- 1 難語句の指導。
- 2 質問を待つて隨所に指導する。
- 3 行く 大寺院 大伽藍 近代京都 御苑 芝生 檜皮葺 皇城鎮護 昔ながらに 清流 神域 佛閣 面影をしのび 感興 名所 歩に従つて 展開 觀音 三重五重 唐門 一千一體の御佛 御所 恭しく そゝるに しるふ 満山の錦 げに笑ふが如く 堂塔 勤行 擬寶珠 たま 大路小路 川原々々 優にやさしく 碁盤の目盛 近代的大都市 コンクリート造 以南 繁華 電飾 近代化 自然の勢。
- 4 個有名詞の取扱。
- 5 之も質問を待ち特に入念に指導する。
- 6 京都驛 東本願寺 西本願寺 烏丸の大通 京都御所 建禮門 紫宸殿 比叡山 賀茂川 下賀茂の社 上賀茂の宮居 銀閣寺 東山 平安神宮 大極殿 南禪寺 疏水 智恩院 圓山公園 八坂神社 清

- 8 地名は地圖・挿畫・繪葉書等を利用し成べく具體的に指導する。
- 9 全課の點讀。
- 10 景觀を想像に描かせて。
- 11 指名讀。
- 12 適當に句切つて、何人かに。
- 13 挿畫と文とを照合させる。
- 14 何處を見せたものか、書物に何う出て居る

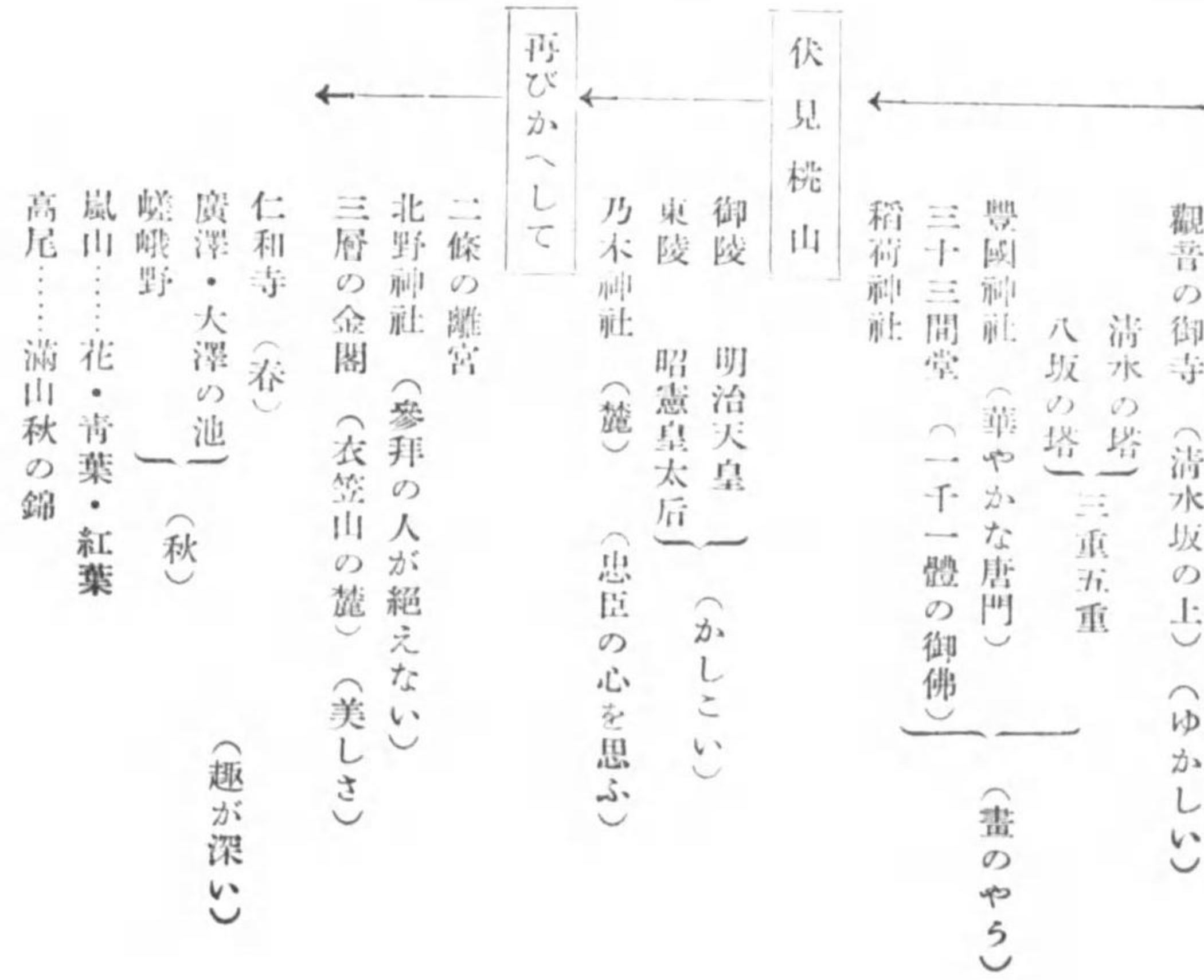


- 1 輪讀。
- 2 場面に分けて、座席順に。
- 3 文の要所に注意させて。
- 4 低音讀。
- 5 文意の在處を探らせて。
- 6 逐次研究。
- 7 頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

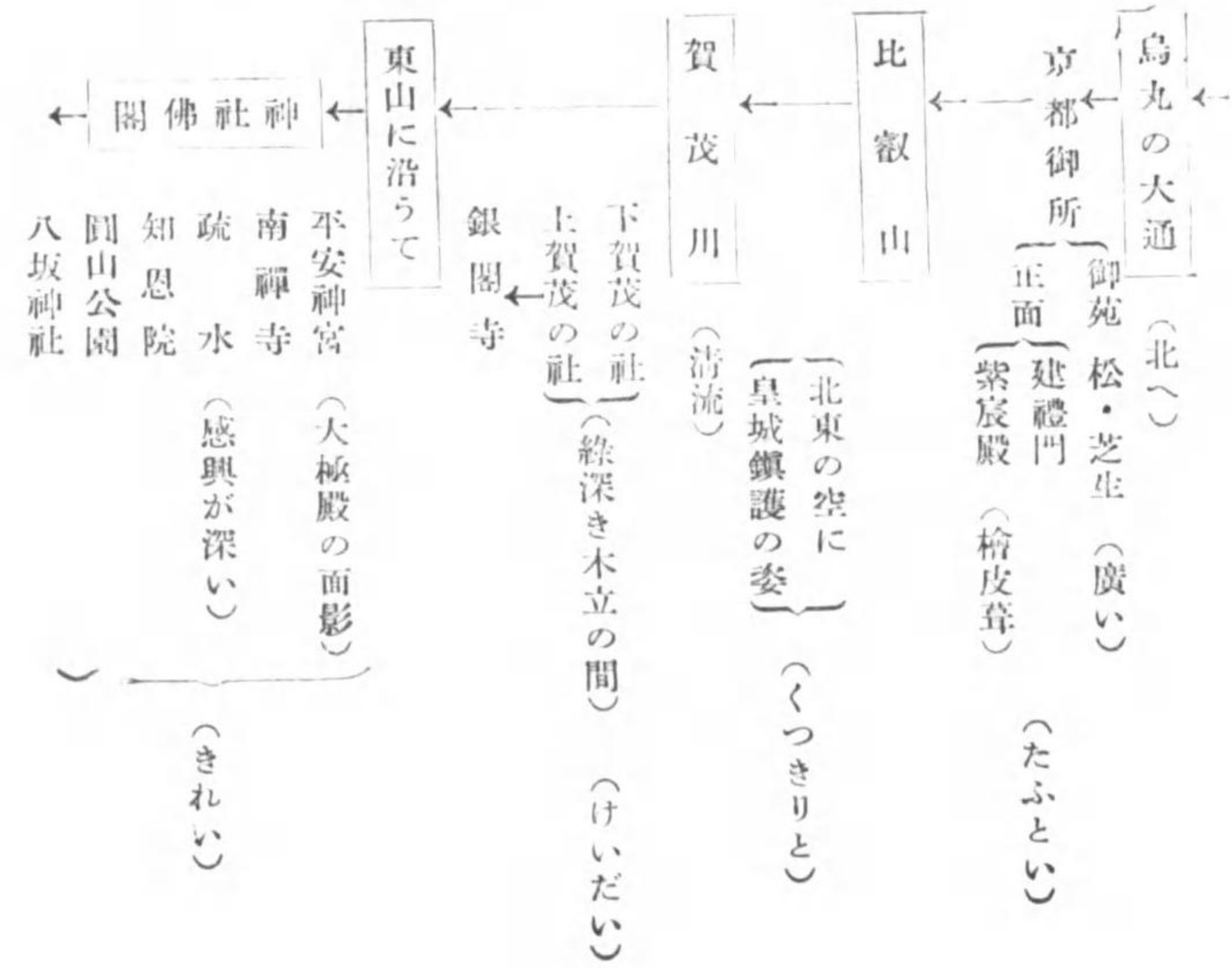
第二次指導

- 1 低音讀。
- 2 全課を一氣に。
- 3 ノートを纏めて提出させる。
- 4 課外に檢閲して短評を加へる。

都 京 の 史 歴



影面の都古いしさに優



東 山 三十六峯 [堂塔こゝかしこ] 晝夜勤行の鐘

三條大橋 [擬寶珠 (朝もや)]
川沿ひの柳 (夢のやう)
大原女 たま〜見かける
大路小路を行く人の言葉
友禪染 河原々にさらす
西陣織 花と織出される

近代的都市

町並 (碁盤の目盛)
近郊 二十七市町村を合はせ
四條・七條の橋 コンクリート造に代り
新しい大建築 市中至る所に
九條以南 [工場の煙突が並び
東寺の塔も黒煙に
四條通・京極・河原町
繁華 夜は電飾の輝き
年々に 近代化して行く (自然の勢)

今の華やかな京都

5 話合。

▽配付した文圖と各自のノートを対照させて
京都情調を満喫させる。

6 文意の檢證。

▽各自に把握した文意を表現面に即して確め
させる。

7 話合。

▽文意を中心に。

8 黙讀。

▽文意を確認させる意味で。

9 味讀。

▽靜かに音讀させる。

10 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 指名讀。

▽中・劣生を主として。

2 文の觀點を言はせて見る。

▽古都としての京都のみやびやかさ。近代的
大都市としての京都の華やかさ等。

3 話方練習。

4 ▽遊覽的な旅行氣分で。

演習。

5 ▽説明入りの繪圖を作製させる。

朗讀練習。

6 ▽適宜範讀を交へて。

學習事項の整理。

7 ▽内容・形式の兩面に亘つて。

補充説話。

8 ▽教師の體驗に依る旅行談や印象等。

▽繪葉書・寫眞帖等を示して。

9 ▽重要な箇所を選んで。

10 新出文字の書取。

11 語句の應用練習。

テスト。

テスト問題

一、次の文を読んで後の問に答へなさい。
やさしいのは古都の眺である。東山三十六峯げに笑ふが如く、堂塔こゝかしこに聳えて、晝夜勤行の鐘
がさやかに聞かれる。三條の大橋が朝もやに包まれ、其の擬寶珠の一つ〜薄れて行く彼方には、川沿

ひの柳が夢のやうに煙つて見える。たま／＼見かける大原女も、大路小路を行く人の言葉も、川原々々にさらす友禪染も、花と織出される西陣織も、すべて優にやさしいのが京都である。

1 「古都の眺め」とはどんな眺めか。
2 「げに笑ふが如く」とあるが何がさう見えるのか。

3 「勤行の鐘」のわけ。
4 「道行く人の言葉」とある其の言葉はどんな言葉か。

5 優にやさしく思はれるのは何と何か。
二、次の書取をなさい。

1 クワウジヤウチンゴノスガタ
2 ミドリフカキコダチ
3 ギンカクジ
4 カンキコウガフカイ
5 ホニシタガウテシカイスル

6 ウヤウヤシク
7 サンバイノヒト
8 マンザンアキノニシキ
9 ハンクワ
10 デンシヨクノカガヤキ

三、次の語句に振假名を附けて解釋しなさい。

1 芝生
2 紫宸殿
3 大極殿
4 稻荷神社
5 二條の離宮

6 勤行の鐘
7 擬寶珠
8 友禪染
9 共盤の日盛
10 自然の勢

第四 源氏物語

関秀作家としても將又日本女性としても典型的才媛の第一に數へられる紫式部が一代の傑作「源氏物語」を題材とされた事は、流石に新讀本の内容として興味もあり、古典文學の概念を授ける上にも又好箇の教材と言ふべきである。前巻の清少納言と好一對の題材で、本課に依つて大體紫式部其の人の人柄や氣品に接し、其の風格を偲はせる事が出来よう。

後半に源氏物語全卷五十四帖中の片影が、現代語に譯出されて居るのも注目し値する。唯口語化された爲纏綿たる原文の名調子も失はれた嫌はあるが、女性らしい繊細な描寫は實に美しい魅力を以つて讀者に迫る。殊に本文中の主人公たる紫の君の純眞さや不遇な身の上に惹附けられ乍ら、源氏のおどけた所作に朗かに成る邊り、感情の轉換が巧に生され、僅か足丈の短篇の中にも原作者の非凡さが満足に窺れるわけである。

十七頁の「切揃へた髪がともすると肩のやうに廣がつて肩の邊にゆらく／＼掛るのが目立つて」と言ふ描寫の如き、實に印象的で美しく、古い繪巻物を繰廣げて見せられる感がある。最後の「落ちた。それは有難い」の邊に漂ふ源氏のユーモラスな所作も面白い。心理描寫の巧さと涙ぐましい肉身愛がヒタ／＼と讀者に迫つて来る。

挿畫の印畫と其の説明

第十九頁の挿畫は平安朝上期即ち藤原一族榮華時代の殿上風俗を見せたもので、建物は此の時代の貴族住宅特有の寢殿造である。『家屋雜考』に據ると此の構造は寢殿造の中でも泉殿いづみどのに屬する。即ち本殿の兩端に廊下を突出し池中に建てたのが釣殿又は泉殿で、床の下に清流があり鯉・鮒等の川魚を放つたものである。四方に壁無く簀子に高欄を繞らし、納涼・觀月・花見等に用ひられた。尙釣殿・泉殿には疊を用ひず、畫面に見る敷物は薄縁である。

此の挿畫は有明堂文庫の源氏物語に據つたもので、原圖には此の挿畫の右下方に源氏が小紫垣の外から覗いて居る場面があるが、其の部分のカットして泉殿のみを見せて居る。種本は藤原時代末期の殿上畫家藤原隆能畫くと傳へられる『源氏物語繪卷』で、其の俯瞰圖的形式と言ひ、上部に霞を配した邊り、古畫の風格を偲ばせて居る。向つて左方に立つ幼女が本篇の女主人公紫の君であり、右方の經机に凭掛つたのが祖母の尼公、廊下に坐つて居るのは侍女、立つて後姿を見せて居るのが乳母であらう。前方に燎亂たる櫻を見せ、泉殿の花見季節を思はせて居る。

文字 語句

新出 文字

才サイ 假カ 漢カン 撫フ 拭シ

讀替 文字

表オモテ (新出は 卷五、オモテ) 髮カミ (新出は 卷十、ハツ) 夢ユメ (新出は 卷十、ユメ)

語句と其の解説

源氏物語

紫式部の作。國文學の代表的作品。平安朝文學の白眉。卷數五十四。又光源氏物語・紫の物語、略して源語・紫語・紫文・紫史とも言ふ。解題に『源氏物語五十四帖は紫式部の作所、平安朝詞人の所謂『物のあはれ』を寫すを以て主とし、行文の間屢々作者の理想の光のほのめくを見ると雖も、要するに當時の宮廷を舞臺の中心とし、貴人宮嬪の生活を活寫せる一箇の寫實小説也。全篇五十四帖中、前の四十四帖は當時上流社會に於ける理想的人物たる光源氏を以て主人公とし、配するに絶世の佳人紫上を始め貴賤幾多の男女を以てし、男子にありては光源氏並に之が陪客の地位に立てる頭中將を寫す事頗る精緻なりと雖も、作者の旨とする所は、蓋し様々なる婦人の性格を寫し分くるにあり。讀者の最も感興を惹かるゝ所も亦茲にあるべし。後の十帖は光源氏の假子薫の大將を主とし、外孫匂兵部卿宮之が陪客たり、配するに宇治の優婆塞の宮の女なる三美姫を以てし、姉妹三人の中、泛々たる柏舟の如き浮舟の君、最も葛藤の中心たり。此の薫・匂と浮舟と三人の關係、即ち後篇の眼目なり。要するに前篇は絢爛華麗にして文亦之に伴ひ、後篇は老蒼沈鬱にして筆亦之に隨ふ。其の相異なる事此の如きを以て、古來或は前後篇別人の手に成れりと唱ふるものあり。然も其の説の信憑するに足らざるは、猶源氏物語は紫式部の作に非ずとする説の信憑するに足らざるが如くなるべし』とある。

紫式部 平安朝時代の女流文學者。源氏物語の著者、又梨壺五歌仙の一人。堤中納言兼輔の孫越前守藤原爲時の女。爲時は菅原文時の門に盛名を馳せた學者で歌人、式部の兄惟規(ノブノリ)も亦歌名がある。母は常陸介藤原爲信の女で關白道長の北の方倫子の女房であつた。紫式部といふのは呼名で、實名が傳らぬのみか、歿年も不明で經歷は僅に其の著紫式部日記を據所とし、諸書を參酌

して考證されるに過ぎない。日記に據れば幼時から明敏で、見惟規が父から史記を授けられるのを傍から聞いて見よりも早く記憶したので、父は式部が男子でないのを惜しみ歎いたと言ふ。長じて右衛門権佐藤原宣孝に嫁し、大貳三位(賢子)辨局の二女を挙げたが(尊卑分脈には辨局を記載しない)長保三年四月夫の死去に逢ひ、寡居して居た。寛弘二三年頃中宮彰子(上東門院)に仕へる事と成り、四年中宮に樂府二卷を講じた。源氏物語は寡居の間に書き始められたものらしく、此の頃は既に若紫の巻迄は殿上人の間に著名と成つて居た事は、日記寛弘五年十一月の項に『左衛門督(公任)「あなかしこ此のわたりに若紫やさむらふ」と伺ひ給ふ云々』とあるに依つて知られ、又一條天皇が源氏物語を讀み「この人は日本紀をこそ讀みたるべけれ、誠に才あるべし」と言はれたので、日本紀の局と呼ばれたと言ふ。學は和漢に通じ、史書を讀み、和歌を能くし、管絃・繪畫・書道にも暗からず、又當時名媛とせられる人々に對して峻嚴な批評を下す一家の見識を持して居るにも係らず、外には溫柔謙遜で、屏風の文字をも讀み得ぬ風を裝つたと言ふ。又中宮の父御堂關白道長は屢々和歌を詠みかけて誘ひ、深夜渡殿の戸を叩くに至つたが、式部はさりげ無く應接して従はなかつた事が寛弘五六年頃の日記に見えて居る。以て其の才德兼備貞操無比であつた事が窺ひ知られる。晩年の事は記録に残されて居ないが、歿年は萬壽二年から長元四年の間であらうといふ。大日本史の本朝烈女傳には長元四年五十七歳とある。史記 漢の司馬遷が其の父談の志を繼いで撰著したもの。百三十卷、本紀(一二)表(一〇)書(八)世家(三〇)列傳(七〇)から成る。本紀は編年體で春秋の筆法に擬し、世家・列傳は春秋左氏傳に倣つたもので、紀傳體の始めである。其の文章の巧妙なる古來左・國・史・漢と

並稱し詞章の模範とされる。我が國でも王朝時代に此の書を天子に進講した。

爲時 越前守、中

納言爲輔の孫、刑部大輔雅正の子、詞藻あり、藤原孝道・源爲憲等と名を齊らす。

藤原宣孝 右

衛門權佐。長保三年四月歿。式部と婚した時宣孝は四十八歳、式部は二十二歳(推測)であつた。

上東門院 一條天皇の中宮、名は彰子、藤原道長の女。長保元年從三位に叙し、入内して女御と成る。

世界的の文學 紫式部は世界の小説の先驅者と言つて誰が咎めるものがあるか。伊太利は近代歐洲文

藝思潮の源泉地であるが、其の人間の文學・現實的傾向の藝術の祖たるボツカチオに先だつこと何年

で有つたかを思へ。此の物語をボツカチオのデカメロンに比較せよ、我々自身と雖も驚かざるを得な

い。源氏物語の一節 引用された箇所は「若紫」の巻が主で、それに「末摘花」の末節が附加さ

れて居る。源氏物語には「三月の晦日なれば、京の花盛は昔過ぎにけり。山の櫻は

まだ盛にて、入りもておはする儘に、霞のたゞすまひもをかしら見ゆれば、かゝる有様もならひ給は

ず、所せき御身に、珍しう思されけり。」とある。「のどか」は此の心持を汲んだものであらう。源

氏は病を病み北山に有驗の僧ありと聞き、其の加持を受けに行つた際の出来事である。垣の内

僧庵に 源氏には「目もいと長きに徒然なれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて」と有つて、源氏が

垣の外から紫上を隙見する事に成つて居る。此處も其の積りで取扱つて欲しい。場所は「北山になむ

なにがし寺といふ所に」とある。年とつた上品な尼さん 紫上の母の母親、即ち少女の祖母。

女の子 源氏が豫て慕つて居た藤壺の女御の兄兵部卿の宮の娘、後の紫上。切替へた髪が 此の

邊源氏には「中に十ばかりにやあむと見えつる兒どもに似るべくもあらず、いみじうおひさき(成



人の後の美しき) 見えて、美しげなる容貌(カタチ)なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらくとし、顔はいと赤く(泣きたる様) すりなして立てり。』と訝えた筆致の程を思はせて居る。どこか似た所、似るのも當然、母方の祖母だもの。犬君 召使の童女の名。當時はイヌキ・アテキ等の名があつた。まるで赤ちやんですね 此の邊源語には『尼君「いであな幼や。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく、今日明日になりぬる命をば、何ともおぼしならで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞ゆるを。心憂く」とて、尼「此方や。」といへば、つい(跪き)ゐたり。』とある。現代語化しては此の旨味が失はれる。あなたのおかあさんは 紫の母、即ち尼の娘。おとうさんを 尼の夫、即ち紫の父。それから一年程 此處は次の末摘花の巻に移り、二條院で源氏が畫を書いて紫と戯れる場面である。孫の紫の君 後の紫上。源氏の君 光源氏。最後
に女の畫を奪いて 之には源氏が末摘花に愛想をつかしたイキサツがあるが、それは態と兒童に隠してある。鼻を赤くぬつて 之も源氏の心には鼻の赤い末摘花の姿が浮んで、紫と戯れ乍らそれと思ひ浮べて居るわけだが、此處は全然それを内所にし單なる戯れ事として紹介してある。指導者も其の積りで取扱はねばならぬ。とりわけ紅梅が美しく 此の結びも源語には『日のいと麗らかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、心もとなき中にも、梅は氣色ばみほゝゑみわたれる、とりわきて見ゆ。階隱のもと紅梅、いと疾く咲く花にて、色づきにけり。』と妙なる筆致の訝えを見せて居る。

資料

原 據

若 紫 (源氏物語)

日もいと長きに徒然なれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの(僧都が家の)小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々はかへし給ひて、惟光ばかり御供にて、のぞき給へば、ただこの西面にしも、持佛すゑ奉りて、行ふ尼なりけり。簾すこし上げて花奉るめり。中の柱に寄り居て、脇息の上に經を置きて、いと惱ましげに讀み居たる尼君、たゞ人と見えぬ。四十餘ばかりにて、いと白くあて(貴人らしく)に瘦せたれど、頬つきふくらかに、まみ(日つき)の程、髪は美しげにそがれたる末も、なか／＼長きよりもこよなら今めかしきものかなと、あはれに見たまふ。清げなるおとな二人(侍女)ばかり、さては童女ぞ出でいり遊ぶ。中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる著て、走り來たる女子、あまた見えつる兒どもに似るべくもあらず、いみじうおひさき見えて、美しげなる容貌なり、髪は扇をひろげたるやうにゆらくらしめて、顔はいと赤くすりなして(泣きたる様)立てり。尼『何事ぞや、童べと腹だち給へるか』とて、尼君の見上げたるに、少し覺えたる(似たる)所あれば、子なめりと見給ふ。見『雀の子を犬君へ召使の童女)が逃しつる。薰籠の中に籠めたりつるものを』とて、いと口惜しと思へり。この居たる大人『例の心なしのかゝるわざをしてさいなまるゝ(責められる)こそ、いと心づき(好かぬ)なけれ。何方へかまかりぬる。いとをかしうやう／＼なりつるものを。烏などもこそ見つけれ』とて、立ちて行く。髪ゆるらかにいと長くめやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人いふめるは、この子の後見なるべし。尼君『いであな幼や。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく、今日明日になりぬる命をば、何ともおぼしたらで、雀慕ひ給ふほど



よ。罪得ることぞと常に聞ゆるを、心憂く』とて、尼『此方や』といへばつい（跪き）みたり。頬つきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなく（頑是なく）かいやりたる額つき、髪ざし（髪の様子）いみじうつくし。ねびゆかむ様ゆかしき人かな、と目とまり給ふ。さるは、限なう心を盡し聞ゆる人（藤壺）にいとよう似奉れるが、まもらるゝなりけり、と思ふにも涙ぞおつる。尼君髪をかき撫でつゝ、尼『梳ることをもうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとかなうものし給ふこそ、哀にうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかなぬ人もあるものを、故姫君（紫の母即ち此の尼の娘）は、十二にて殿（夫即ち紫の父）に後れ給ひしほど、いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。たゞ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ』とて、いみじう泣くを見給ふも（源氏が）すゞるに悲し。幼心地にも、流石にうちまもりて、伏目になりて俯したと聞ゆる程に、僧都あなたより来て、僧都『こなたは顯（外からもよく見える）にや侍らむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖（ひかり）の方に、源氏の中將の、瘧病まじなひに物し給ひけるを、たゞ今なむ聞きつけ侍る、いみじう忍び給ひければ、え知り侍らで、此所に侍りながら、御とぶらひ（御尋ね）にも參うでざりける』と宣へば、尼『あないみじや。いと怪しき様を人や見つらむ』とて簾おろしつゝ、僧都『この世にのゝしり給ふ光源氏、かゝる序に見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう（源氏の有様を見

又居たる大人、げにと打泣きて
夫人はつ草の生ひゆく末も知
らぬまにかでか露の消
えむとすらむ

れば）世の愁忘れ、齡のぶる人の御有様なり。いで御消息聞えむ』とて立つ音すれば、歸り（源氏が）給ひぬ。あはれなる人を見つるかな、かゝれば此のすきものどもは、かゝる歩行（あゆみ）をのみして、よく然るまじき人をも見附くるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思の外なることを見るよ、とをかしうおぼす。さてもいと美しかりつる兒かな、何人ならむ、かの人（藤壺）の御かはりに、明暮のなぐさめにも見ばや、と思ふ心、深うつきぬ。

末 摘 花（源氏物語）

二條の院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生（未成人）にて、紅はかう懐しきもありけりと見ゆるに、無紋の櫻の細長、なよゝかに著なして、何心もなく物し給ふ様、いみじうらうたし。古代（古風な）の祖母君の御名残にて、齒黒（はくろ）もまだしかりけるを、引きつくるはせ給へれば、眉のけさやかになりたるも、美しう清らなり。心から（以下源氏の心）などかから憂き世を見あつかふらむ。かく心苦しきものも見てみたらで、と思しつゝ、例の諸共に難遊し給ふ。繪など畫きて色どり給ふ。萬にかしうすさび散し給ひけり。我も畫き添へ給ふ。髪いと長き女を畫き給ひて、鼻に紅をつけて見給ふに、圖（かた）に畫きても見ま憂き様したり。わが（源氏の）御影の鏡臺にうつれるが、いと清らなるを見給ひて、手づからこの紅花（赤き繪具）をがきつけ、にほはして見給ふに、かくよき顔だに、さて交れらむ（紅の交りたる）は見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひ給ふ。西（まろ）が、斯くかたはになりなむ時、如何ならむ』と宣へば、紫『うたてこそあらめ』とて、さもや染みつかむと危く思ひ給へり。空拭（そらぬぐ）をして、西『更にこそ白まね、用なきすさびわざなりや、内裏（時のみかど）にいか宜はむとすらむ』と、いと眞實（まこと）に宣ふを、いといとほしと思して、寄りて御視の瓶の水に、陸奥紙をぬらして拭ひ給へば、西『平仲（平貞文、有名なる色男、女の許にて泣く眞似すると、墨の交りたる水を知らずして目に塗りて女に嘲られし事あり）がやうに色どり添へ給

ふな、赤からむは（墨と違つて赤は）あへなむ」と戯れ給ふ様、いとをかしき妹背と見え給へり。日のいと麗らかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、心もとなき（花もやがて咲きさうなる）中にも、梅は氣色ばみほゝゑみわたれる、とりわきて見ゆ。階隠はしごしのものと紅梅、いと疾く咲く花にて、色づきにけり。
 『くれなるの花ぞあやなくうとまるゝ梅のたち枝はなつかしけれど
 いでや』と、あいなく（思はず）うちうめかれ給ふ。あないとほし。かゝる人々の末々いかなりけむ。

指導精神

平安朝時代の物語は竹取物語の様な傳奇物語と伊勢物語の様な歌物語とが次第に合流して、寫實小説の性質を持つ理想 説と成つて展開した。宇津保物語・落窪物語の如きは其の二者の合流する過渡期の作品である。源氏物語は此の傾向が最も完全に大成した大小説であつて、其處には精細明確な現實が描寫されて居乍らも尙一種の高い幻想が秘められて居る。此の意味に於て源氏物語は、寫實小説でもあると同時に理想小説でもあると言ふ事が出来る。此の大作は最も圓熟の境地に達した假名文に依つて表現された長篇小説であるが、五十四帖の卷々を精密に調べて見ると、夫々の卷々が各々纏つた一つの短篇小説的構想を有し、且つ短篇小説的効果を具へる。之は恐らく當時の長篇小説が装幀上、一軸又は一卷に小さく纏める必要が有つたからであらう。

一條天皇の後宮には才女が多數輩出し、和歌に、日記文學に、隨筆文學に、夫々目覺しい異彩を放つた。就中物語文學は是等の才女に依つて支持され創作され、茲に所謂宮廷文學全盛時代を現出せしめた。浪漫主義的精神は斯の如くして後宮に榮え、狭衣・瀆松中納言・夜半の寢さめ・堤中納言等の多くの物語に影響を

與へた。源氏物語は實に平安朝に於ける浪漫精神の健全なる境地に到達した時期に於ける大作で、平安朝物語文學の展開上からは勿論のこと、之が約一千年前の一女性の作であると言ふ點に於て、日本小説史全體の上から見ても最も重要な位置にあるは言ふ迄もなく、世界最古にして（ダンテの神曲より約三百年前）然も最大の長篇小説であると言ふ歴史的價值に至つては更に大である。其の藝術品としての價值に就いては、古來多くの學者に依つて論せられた様に、

(1) 構想が雄大であること。

(2) 自然及び人生の觀照並に表現に必然性と正確さの存すること。

(3) 浪漫的傾向を多分に含み乍らも、精密な寫實的傾向を失はないこと。

(4) 文章が流麗で情趣潤すべき名文であること。

等は源氏物語の特殊な性質であつて、之が他の諸作品に比して群を抜く所以である。寔に源氏五十四帖は、之を全體として見れば御堂殿の榮華にも比すべき光源氏一生の榮耀と之を廻る社會とが眩き迄に輝き、之を部分として見れば幾百人と言ふ人物、わけて美しい女性達が浮彫の様に我々の前に立つを覺える。源氏物語は宮廷の運命史であり、貴族を中心とする社會史であり、又世にも美しい女性史でもある。古來此の物語は種々の立場から批評されて居るが、批評は如何様で有らうとも源氏物語は依然として源氏物語であつて、其の本質其の價值は毫も變る所がない。源氏物語に於ける不變なるものは、永遠なるものは、實に其處に描かれて居る生ける人間の相である。所謂眞實なるもの、美なるものであり、物のあはれである。之ある限り源氏物語の價值は凡ゆる批評を超越して永遠に不滅である。

作者紫式部の生後未詳であるが、其の幼時から聰明であつた事は、父爲時が『口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸福なかりけれ。』と常に歎いたと言ふ日記の記事を見ても知る事が出来る。家庭に於て相當早くから教養を受けた事も此の記事から推測される。儒學に造詣の深い父を持つた彼女は漢籍に對する素養も亦十分で、家集及び日記に依れば筆の傳授を求められたり、中宮に白氏文集の樂府を進講し奉つたり、文學以外に音楽の道にも秀でた才能を持つて居た。尙佛典の方面にも詳しかつたが、之は兄の阿闍梨定暹の影響に負ふ所が多かつたで有らう。斯うした遺傳と環境とが彼女の慎ましい精進と相俟つて、他日源氏物語の大作を生む動因を既に孕んで居たのである。式部は幼時何れかの宮か公家に仕へたであらうとされて居る。又父爲時には泉州玉井に別荘があり、爲時は其の地に度々遊んだ事がある。従つて式部も亦、河内・和泉の邊に旅した事が有つたに相違ない。長徳二年十九歳の時には越前守として赴任して行く父に伴はれて、其の秋旅に出た。家集に肥前に下つた友達と歌の贈答をして居るのも此頃である。越前の旅は餘り楽しいものでは無かつたらしい。道中の難儀に苦しみ、ひたすら都を戀ひ慕つて居た。此處に滞在する事凡一ケ年であつたが、さして親しい友も出來ず、郷愁に沈んで居た。彼女に取つて唯一の慰めは肥前の友との文通であつた。長徳三年の秋の頃には、父爲時が任期の満ちるを待兼ね一人都へ歸つて居る。此の都へ歸ると言ふ少女心の樂みが同じ道中にも苦難を感じさせ無かつたものか、浮々した心持を幾多の歌に残して居る。都に歸つて間もなく、四年の春頃からで有らうか、後に夫と成つた藤原宣孝との戀愛關係が始められた。式部は初めのうちは宣孝の熱烈な求愛にも拘はらず、容易にそれを受け納れようとはしなかつた。それには種々の理由があらう。性格の相違、年齢の差、殊に宣孝には他に三四人の妻妾の有つた事などが數へ擧げられよう。其の年の秋頃

迄はどちらともつかぬ關係が續けられて來たが、長保元年に至つては大分其の仲が接近し、秋には遂に結婚するに至つた。此頃宣孝は四十八歳位、式部は二十二歳位であつた。妻としての式部は時として宣孝が夜離を歎つ事も有つたが、概して極めて平靜な睦い生活を樂んだ様である。宣孝歿後に於ける式部の追想及び哀愁は、それを證して餘りがある。長保二年の事であらう。二人の間に女賢子が生れた。(一説には今一人辨局があると言ふが確かでない)此の賢子は後冷泉天皇の御乳母越後の辨となる人で、後に正三位太宰大貳高階成章に嫁してから大貳三位と改めた。式部の結婚生活は、然し餘りにも果敢ないもので有つた。結婚の翌々年、長保三年四月二十五日には、最早夫宣孝に死別せねばならなかつた。其の結婚生活が幸福で有つた丈に、其の淋しさは又深く切なるものが有つた。一度は出家遁世せんと迄世の無常を果敢なむ心にも成つた。然し幼い賢子を抱へた現實を振返つては、又其處に如何ともし難い自己を發見するのであつた。此の生活の懊惱と亡き夫への果敢ない追慕とが、畢生の大作源氏物語製作の大きな動機の一つと成つて居る事は看過出來ない。爾後五六年宮仕へ迄の寡居生活に於て、源氏物語の一部は染筆せられ、寛弘五年頃には少くとも其の或部分は世に流布して居た。式部は又上東門院に仕へる前に、鷹司殿へ仕へたと言ふ傳説がある。遽に其の當否は定め難いが、源氏物語に於ける宮廷生活の描寫及び夫等と日記中の記事の相似等から一概に否定も出來まい。寛弘四年十二月二十九日に年三十歳で初めて上東門院に仕へた。宮仕後の式部は一條天皇・中宮彰子及び道長夫妻から崇敬の念を以て眺められた。勿論自尊と權謀とに満ちた當時の宮廷であつたから、同輩の嫉妬や敵愾心が相當式部を惱ました事も事實である。宮廷に於ける理想生活の中にも自らの境遇の拙さを知る式部は、常に住む憂き世界を持つた。然し此の常に憂き生活に在つて心から式部を喜ばせたものは

勝部少少將の君との交情で有つたらしい。寛弘五年四月十三日中宮彰子は、御懷妊御修法の爲に土御門殿へ出御される。式部も之に随つて御殿へ出で三十講に列席した。紫式部日記は此頃の事から書かれて居る。中宮の御産が近づくに従つて、人々は其の準備に忙殺された。此頃の式部はまだ新参者であつた。九月十一日に後一條天皇がお生れに成り、九月十五日の御産養の日には、式部も祝歌を詠んで居る。十月十六日の行幸に次いで、十一月一日には若宮(後一條天皇)の御五十日の祝儀が行はれた。其の日の宴に酔つて藤原公任が『あなかしこ、此のわたりは若紫やさぶらふ。』と式部に戯れかけた話は有名である。十一月十七日には内裏に歸られる中宮に従つて宮廷に移つた。十二月二十九日には去年始めて宮仕に出た時の事を回想して現在に思ひ及んで居る。寛弘六年正月三日若宮の御戴餅の事があつた。其頃の事であらう。式部は源氏物語がお前にあるのを見て歌ひ挑んで来た道長と歌の贈答をして居る。此の年の夏御堂殿で式部が渡遷に寝た夜、ほとくと局の戸を叩く者が有つた。恐しさに返事も無くて居た所、聖朝道長から歌があつた。然し『たゞならずとばかりたゞく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし』と式部はそれに従はなかつた。寛弘七年正月十五日には、二宮後朱雀帝の御五十日の祝儀があつた。現存の紫式部日記は此の日の記事で終つて居る。寛弘八年二月一日父爲時は越後守に任せられ、四月頃赴任した。同年六月二十二日には一條天皇が崩御あらせられた。一條院の法事の過ぎた後、枇杷殿に移られる中宮に式部も随つたが、此の時に詠んだ哀傷の歌が榮華物語岩陰の巻に載つて居る。長和元年二月十四日には中宮彰子は御歳二十五にて皇后宮に上らせられ、式部は續いて之に仕へた。とは言へ、寛弘八年の春には父爲時を其の任地に送り、一條院崩御以來哀愁に沈める元の中宮彰子に仕へて居た式部は、長和二年には更に父を訪れる兄惟規を越後國へ送る等で、寔に空虚な

淋しい日々を過ぎて居た。然も長和三年には兄惟規は越後で歿して邊骨と成り、任期を終らぬうちに官を辭した父爲時に連れられて都に歸つて来たのであつた。式部はさうした悲歎のうち、更に年來の友少少將の君の死に會はねばならなかつた。近親の人々の上についた悲しい事の數々に式部は自らの生命の喪へと前途に對する何か知らず暗い影を感じた事であらう。悲歎と寂寥とが積り積つた爲であらうか、長和三年頃の式部にはしみじみと思ふ事の多い病氣勝ちの目が続いた。人生諸相の無常さに今更のやうに悲しくやるせない思ひを抱いて居た式部は、それから間もなく彼の不朽の功績と偉大な名聲とに儂くも負いて、長和五年の春頃三十九歳(推定)を最後として此の世を去つたのである。彼女の偉大な文學上への貢献は、其の生得的な性格の必然の所産で有つたと言へる。内面的生活に於ける朗かな自照的な傾向、それこそ式部の性格の最も著しい點である。従つて對象に對する式部の態度は常に靜止的であり思念的であつて、夫宜孝歿後の衝激と相俟つて稍もすれば遁世的でさへ有つた。感動が常に大きな角度を爲しつゝ、自己の内部へ集注して來るのであつた。結局彼女は飽く迄内省的性格の故に表面は靜かに振舞つたが、又感受性の人一倍強く有つた事と相俟つて、内面的には絶えず峻烈な自己批判に苦惱し、可なり複雑な心の生涯を送つたのであつた。

引用されたのは「若紫」の巻から「末摘花」の巻に掛けて、源氏が十八歳の三月から十九歳の正月迄の事である。梗概は夕顔を失つた後の源氏は、とかくに心地が勝れず、其の上癩病を煩つたので、北山の名僧を訪れて加持をして貰つた。其の途中、家來の惟光が明石の入道に姫君の有ることを話した。山の中で源氏はふと小柴垣を美しく繞らした草庵に十歳許の可愛い少女の居るのを見つけた。素性を尋ねると、それは源氏が豫て慕つて居た藤壺の女御の兄の兵部卿の宮の娘と知れた。源氏は此の少女のことを忘れ兼ね、今は都

に歸つて病の篤いといふ少女の祖母の尼君を見舞つたが、姫に遭ふことは出来なかつた。思ひあまつて源氏は『手に摘みていつしかも見む紫のねに通ひける野邊の若草』といふ歌を詠んだ。其の年の秋尼君は遂に亡くなられた。然も七々日を過ぎた頃には父君兵部卿の宮が姫を引取ることになつて居ると聞き、源氏は先を越して姫を二條院に連出した。後で父宮は姫の行方を探したが分らなかつた。其の後源氏は親代りに手習・和歌・琴等よろづの事を教へ、其の成人を待つた。此の少女が後の紫上である。初春の或日、源氏は紫の君と雛遊びをしたり畫を書いたりして戯れた。源氏は髪の長い女の畫を描き、其の鼻に紅を付け、又自分の鼻に紅を塗つてそれが取れぬ、困つた事になつたと言ひなどして矢鱈に笑ひ興ずるのであつた——と言ふのであるが、恰好の引例として態とあどけない子供本位の場面を摘出したものであらう。指導の進むに連れ、適宜原文と對照して其の風格を偲ばせる事を忘れてはならぬ。題材精神は源氏物語が我が國文學の至寶である事を知る者には、今更事新しく説く要はあるまい。之に依つて紫式部の偉大人となり知らせ、其の大作源氏物語が世界的に大きな足跡を印した事を我人共に誇とし得れば、本課指導の目的は貫徹したものと云つて良い。特に其の口語化された源氏物語の一節に至つては、心理描寫の巧みな點、情味豊かな場面の雰圍氣、加ふるに頓笑ましいユーモアを以てした邊り、能く原文の趣を傳へ、兒童を喜ばせるに十分であらう。本巻には女子的教材が他巻に比して少い様だが、若し之を女兒向と言ふならば、其の最も大きなものゝ一つと言へる。心行く迄讀み浸らせたい。

指導形態

指導上の認識點

- 1 本課の觀點は我が國に於ける小説の開祖紫式部の爲人と其の大作源氏物語の如何なるものかを知らせ、其の引例として口語化された断片に依つて原文の風格を偲ばせるに在る。
- 2 形式上では心理描寫の巧みな點、内容上には涙ぐましい肉親愛、特に其の少女らしい振舞と少女を慈しむ尼君や光源氏の温情・上品なユーモア等、共に之れ本課の重要な觀點たるを失はない。
- 3 本課は平安朝文學の面影を偲ばせると同時に絶好の女子的教材たるを忘れてはならぬ。
- 4 既習の『雪の山』に於ける清少納言と關係づけ我が國女流文學者の足跡を偲ばせ、愛着感と尊敬心を養ふ事も大切である。
- 5 本課は大體四時限程度で取扱ふ様立案すべきであらう。

第一次指導

1 題目の指導。

4

全課の自由讀。

△挿畫を一瞥させて讀心を唆り、直に通讀に移るが良い。

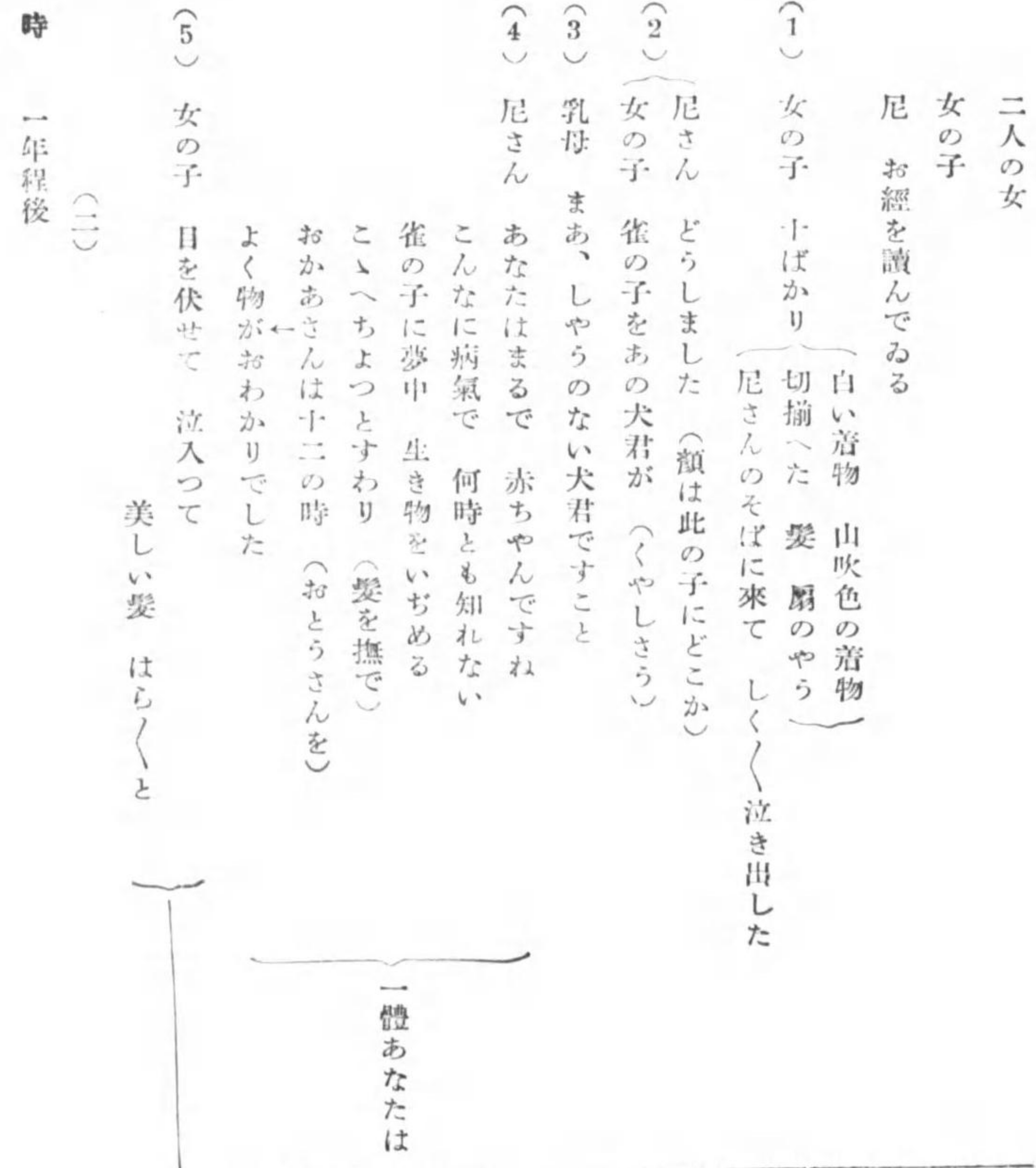
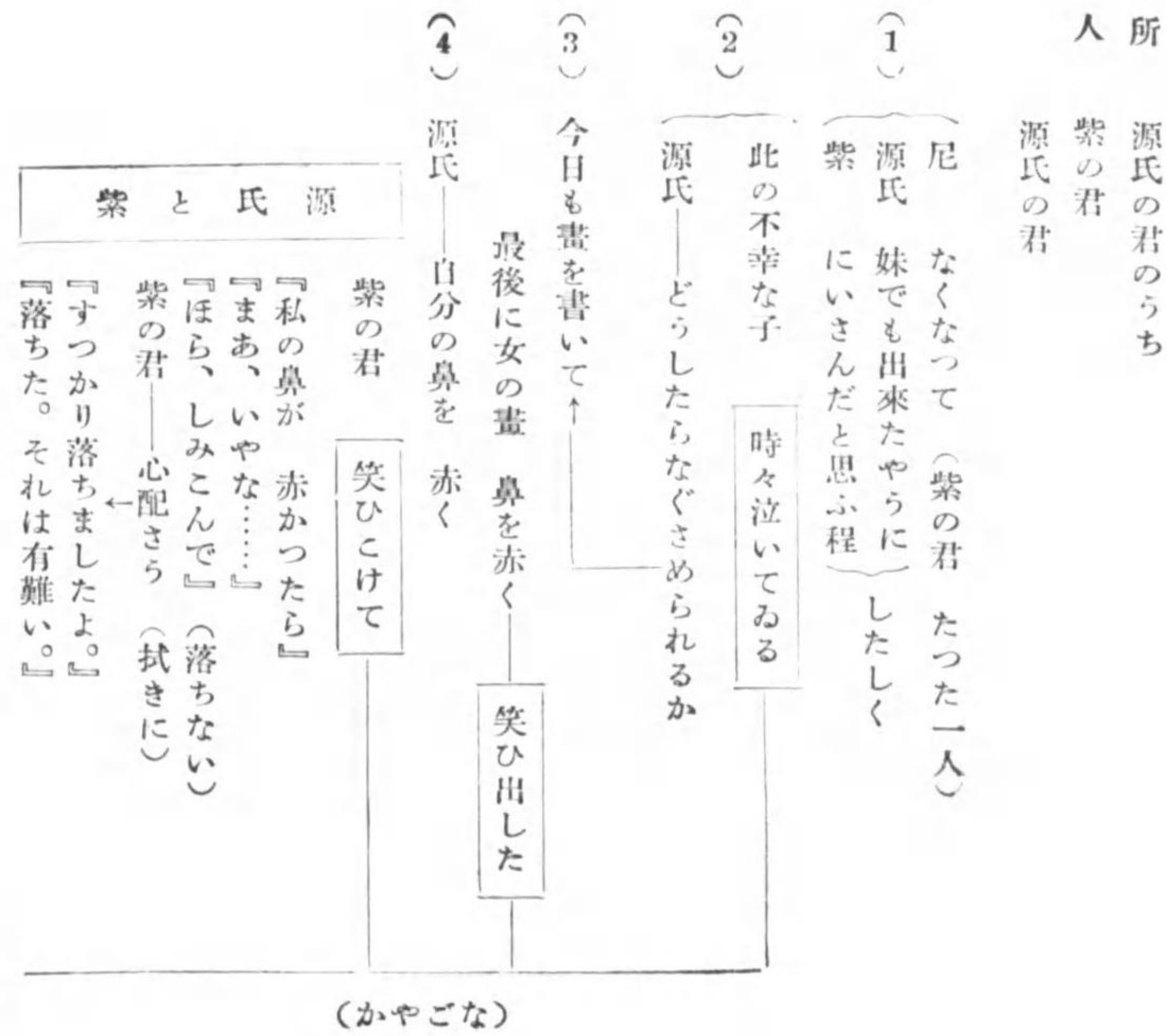
- 2 長篇讀破の心構を話合ふ。
▽既習の卷十雪の山(清少納言)を讀んだ時の心持で、ゆつくり全課を通讀させる。
- 3 先づ不明の箇所を確める。
▽新出文字の讀み・重要語句の解釋等を謄寫した手引を與へるのも一法である。
▽新出文字。
才 假 漢 表 髮 夢 撫 拭
▽難語句。
紫式部 史記 父の爲時 學者 歎息
藤原宣孝 不幸 源氏物語 上東門院
文學の天才 圓滿 深みのある人 假名
文 漢文 五十四帖 小説 外國語 譯
され 世界的の文學 簡單 しば垣 僧
庵 みす 佛壇 山吹色 犬君 乳母
うつ伏せ 泣入つて 紫の君 源氏の君
わざと うらゝか 紅梅

- 11 低音讀。
- 12 場面情景を頭に描かせて、ノートを纏めて提出させる。
- 10 たっぷり時間を與へ自由に讀破させる。
- 9 印象其の他は記帳させて置く。
- 8 全課の荒筋を掴ませる。
- 7 頭に残った話の大意を話させて見る。
- 6 指名讀。
- 5 場面に別けて、輪讀式に。
- 4 題目の再吟味。
- 3 何處から題が出たか、文は何を目當にして居るか等。
- 2 話合。
- 1 讀後の印象を中心に。
- 10 輪讀。
- 9 一句切宛、座席の順に。
- 8 前半と後(一)(二)に分けて大要を言はせる。
- 7 紫式部は何んな人か、源氏物語とは何か、何んな體裁に書いたものか、引用された一節は何んな話か等。

紫式部

- 11 低音讀。
- 12 場面情景を頭に描かせて、ノートを纏めて提出させる。
- 10 たっぷり時間を與へ自由に讀破させる。
- 9 印象其の他は記帳させて置く。
- 8 全課の荒筋を掴ませる。
- 7 頭に残った話の大意を話させて見る。
- 6 指名讀。
- 5 場面に別けて、輪讀式に。
- 4 題目の再吟味。
- 3 何處から題が出たか、文は何を目當にして居るか等。
- 2 話合。
- 1 讀後の印象を中心に。
- 10 輪讀。
- 9 一句切宛、座席の順に。
- 8 前半と後(一)(二)に分けて大要を言はせる。
- 7 紫式部は何んな人か、源氏物語とは何か、何んな體裁に書いたものか、引用された一節は何んな話か等。

- (1) 子供の時……非常にりこう
兄(史記)……兄より先に覚えて
父爲時……あゝ此の子が男であつたら
- (2) 大きくなつて……藤原宣孝の妻
其の頃 ↑不幸 (夫に死別)
- (3) 源氏物語……筆をとつて
其の後 ↓上東門院 (名は一世に高く)
- (4) 彼女
文學の天才
婦人としても圓滿・深み
- (5) 假名文で
當時の口語を自由自在に
其の時代の生活を細かく寫し
女でよかつた
- (6) 源氏物語
五十四帖
我が國第一の小説
世界的の文學
- (7) 次の一節
約九百年の昔
美しく
人間を生きくと
細かく
- (一)
時 のどかな春 (暮れさうで暮れない)
- 所 僧庵
- 人 尼さん



(5) 紫 — すっかり晴れやかに
 (6) 庭 — ぼうつとかすんで 紅梅が美しく

美しい文し

第三次指導

- 6 話合。
▽配付した文圖を中心に。
- 7 指名讀。
▽場面を分けて、何人かに。
- 8 不明の箇所を質問させる。
▽重要な點は指摘して確める。
- 9 輪讀。
▽適宜に句切つて、座席順に。
- 10 範讀。
▽文の觀點に注意して。
- 11 全課の文意を掴ませる。
▽ゆつくり默讀させて。
- 12 話合。
▽把握した文意を中心に。
- 13 ノートを纏めて提出させる。

- 1 通讀練習。
▽全課を一氣に。
- 2 範讀。
△徐々に追讀させる。
- 3 指名讀。
▽一句切宛、輪讀式に。
- 4 會讀。
△グループ(學習團)に分けて、文意や觀點を互に講究させる。
- 5 構想の吟味。
▽既習の長文と比較させて。
- 6 話方練習。
▽劇的に。

テスト問題

- 一、次の反對語を書きなさい。
 - 1 覚えて 6 だるさう
 - 2 歎息 7 かはいらしい
 - 3 漢文 8 うつ伏せ
 - 4 細かく 9 夢中
 - 5 國語 10 笑ひこけて
- 二、次の文中にあやまりがあつたら直しなさい。
 - 1 此の子と男であつたら、りつばに學者になるであらうが。
 - 2 のどかな春の夜は暮れそうでなか／＼慕れない。
 - 3 切揃へた髪が、ともすると扇のやうな廣がつて肩の邊がゆう／＼と掛るのが目立つて美しく見る。

- 7 後半の場面を脚本化させる。
▽全級總掛りで。
- 8 劇化實演。
▽背景其の他は各自に工夫させて。
- 9 話合。
▽印象や讀後感を懇談的に。

- 10 △特に雪の山の清少納言と比較させて。
朗讀練習。
- 11 視寫・聽寫練習。
- 12 新出文字の書取。
- 13 語句の應用練習。
- 14 テスト。

- 4 どうしました、子供たちが言合いでしたのですか。
 - 5 櫛を使ふことがおきらいだが、それにしては、まあ、何かいふよい髪でせう。
- 三、次の漢字を組合せて熟語を五つ作りなさい。
- 満簡最壇時
當四佛單後

教材劇化

第一場

時	平安朝時代の都の春
所	僧庵
人	尼さん
	女の子 (十ばかり)
	乳母
	侍女
	女の子たち

僧庵には夕日があたつて、西側はみすが上げられ年とつた上品な尼さんが、佛壇に花を供へ静かにお經を讀んでゐる(すこし病氣らしい顔)そばに侍女が二人(一人は乳母)がすわつてゐる。

(間)

(時々女の子が出たり入つたりして遊んでゐる)

そのうち十ばかりの女の子 白い着物の上に出吹色の着物を重ね髪を切揃へてゐる)が急にかけ出して来て、尼さんのそばに立ちしきく泣く。

尼さん どうしました。子供たちと言合ひでもしたのですか。

女の子 (くやしさに) 雀の子を、あの犬君が逃したの、かごに伏せて置いたのに。

乳母 まあ、しやうのない犬君ですこと。うっかり者だから、ついゆだんをして逃したのでせう。せつかなれて、かはいくなつてゐたのに。鳥にでも取られたらどうしませう。

尼さん (といつて、雀をさがしに下手へ行く)

尼さん (もの静かに) いやもう、あなたはまるで赤ちやんですね。どうして何時までかうなでせう。わたしがこんな病氣で、何時とも知れない身になつてゐるのに、あなたは雀の子に夢中なんですか、生き物をいぢめるといふことは、佛様に對して申しわけのないことだと、ふだんから教へて上げてあるでせう。さあ、こゝへちよつとおすわりなさい。

尼さん (女の子は大人しくすわる。尼さんは子供の髪を撫でながら)

尼さん 櫛を使ふことをおきらひだが、それにしては、まあ、何といふよい髪でせう。でも、かう何時までも赤ちやんでは困りますよ。もう、あなたぐらゐになれば、もつともつと大人しいはずですよ。

(間) さうく、なくなられたあなたのおかあさんは、十二の時おとうさんをおなくしてしたが、それはそれは、よく物がおわかりでしたよ、今でも此のおばあさんがゐなくなつたら、一體あなたはどうかさらうといふのでせう。

(女の子はじつと聞いてゐて、なみだをうかべて目を伏せてゐたが、とうとう伏せになつて泣き入つてしまつた。美しい髪がはらりと前へこぼれかゝる)

(静かに幕)

第二場

時 第一場から一年後
 所 源氏の君の家
 人 源氏の君
 紫の君 (前の女の子)

〔最初一人源氏の君がしよんぼりとすわつてゐる。庭には木々の梢がぼうつとかすんで、紅梅がきれいに咲いてゐる〕

源氏 (ひとりごと) あの紫は本當に不幸な子だ。母にも祖母にも死にわかれ、たつた一人で此の世に残されるなんて。

〔間〕 時々おばあさんをしたつて泣いてゐる。だが、何といふかはいゝよい子だらう。何とかしてなぐさめてやりたいものだ。 (と考へこむ)

源氏 (とそこへしづかに足音がして、紫の君が泣きながら入つて来る。元氣がなささうである)

源氏 紫、おかへり、さあ、今日は面白い繪を畫いて上げよう。見てお出で。

紫 どんな繪なんですか? (すこし元氣を出して)

源氏 さうだね、何でもお前のすきな繪を。

紫 ちや、雀の子を書いて。

源氏 よし、雀か、雀は—— (とすぐかく) どうだ、上手だらう。

紫 え、ちや、今度紅梅の花を書いて。

源氏 よし〜。

〔と源氏は紫が言ふまゝにあといろ〜書いてやる〕

源氏 さあ、今度は、どんな繪が出来るか、見てお出で。

〔といつて、女の繪を書く〕

紫 まあ、きれいな女の人。

〔源氏だまつて、女の顔の鼻を赤くぬる〕

紫 フフ、、、 (と笑ひ出す)

〔源氏は今度、鏡を取りよせ、自分の鼻をいたづらに赤くぬつて見せる〕

紫 ホホ、、、ホホ、、、ホホ、、、 (と笑ひこける)

源氏 わたしの鼻が、ほんたうにかう赤かつたら、どうだらうね。

紫 まあ、いやなことをおつしやる。繪の具が本當にしみこんだら、どうしませう。

〔源氏はわざとふくまねをして、ふかずに〕

源氏 ほら、すつかりしみ込んでしまつた。落ちないよ。

〔と、まじめな顔をする〕

〔紫はさも心配さうに水入の水を紙にひたして、源氏の鼻を拭きにかゝる〕

源氏 いや〜、赤い方がまだ増した。此の上、墨でも附いて黒くなつたら大變ぢやないか。

〔といふうちに、紫の君拭き取る〕

紫 すつかり落ちましたよ。

源氏 落ちた、それは有難い。

(泣いてゐた紫の君、すっかり晴れやかになる)

紫 オホホ、、、

源氏 アハ、、、

(二人共朗かに笑ひころげる。庭には鶯の聲)

—幕—

第五 法隆寺

我が國の特別保護建造物中筆頭第一に擧げられる奈良の法隆寺は、現存する世界最古の木造建築物として世界の建築史に燦として光彩を放つ計りで無く、其處に秘藏された美術工藝品の殆ど總てが國寶に指定された貴重品であり、佛教文化移入時代の尊い考古學的資料たるは言ふ迄もない。

即ち法隆寺を語る事は同時に我が文化の發祥を學ぶものであり、其の建築・壁畫・佛像等の夫々に聖德太子の御遺徳を偲び奉る事が出来、約一千三百年前の歴史を回顧するにも絶好の資料として、寶物類は全部門外不出のものとされて居る。さてこそ本課の内容美に千鈞の重みが加はり、懐古的低回味が一段と高まるわけである。

編者は本課に於て従來の教材とは一段の飛躍を試み、建築及美術工藝に對する鑑賞眼を養成しようとして試みた點に特に着目すべきであらう。例へば建造物相互の調和の美を語り一本の柱の形狀にも驚異の眼を見張る邊り、古代建築の見方を暗示したものと云へる。單に正面から觀察するのみで無く、側面からも内面からも又歴史的にも之を批判し鑑賞する態度に出たのは、編者が本課に依つて大法隆寺を知らせると共に建築・美術・工藝等に對する高尚な趣味を持たせようとする意圖の程が窺ひ知られる。其の點に於て同じ古美術の都を題材とした第三、京都の案内記とは全く趣を異にし、兒童の審美眼・考古的知識・乃至は探究趣味を誘致しようと言ふのが本課の趣旨では有るまいか。文章も亦頗る流麗、形式・内容共に是又本卷中の珠玉篇たる

を失はない。

挿畫の印象と其の説明

第二十六頁の寫眞は法隆寺の中門で、畫面に見る如く中央に柱があり出入口が柱を距て、兩側にありと言ふ、他に類例を見ぬ獨特の様式である。重層で上層は入母屋造・本瓦葺、飛鳥時代建築様式の特異性を傳へる物として勿論國寶である。門の兩側に金剛力士像が一軀宛立つて居る。何れも和銅四年の作、實に一千二百二十數年前に作られたもの。惜しい哉頭部のみを殘し、體軀は後代に修補の手が加はつて居る。

第二十八頁の寫眞版は五重塔で、建築美に於て實に日本一と稱せられ、然も現存する塔としては最も古い。元來我が國の塔建築は、時代を遡る程完全だとされて居るのも注目し得るであらう。各層の屋根は本瓦葺・中心柱、即ち柱の根元は深く地中に埋められ、耐震建築の考慮充分なもの興味がある。内部の東面に七軀、西面に二軀、南に一軀、北に三軀の古像（和銅四年の作）を藏し、何れも國寶である。

第三十頁は金堂の全景である。石で固めた基壇が二重に成つて居るのも此の建築の特色であるが、重層で裳層を附した建築美が溜らなく立派である。本瓦葺・入母屋造の屋根の勾配、即ち其の微妙な曲線に建物自體の魅力が潜んで居る。此の内部に佛像・繪畫・彫刻、其の他各種の國寶が多數秘藏されて居る。

第三十二頁の寫眞は法隆寺金堂内に秘藏された國寶玉蟲の厨子で、宮殿の屋根を模して有るので宮殿形厨子とも言ふ。天平十九年二月の法隆寺資財帳の目錄に、「一具金泥押出千佛像」とあるのが即ちそれで、玉蟲の羽が敷並べてあるから玉蟲厨子の呼名で知られて居る。全體黒漆繪塗に金銅透彫も麗かしい。千佛像と言ひ漆繪と言ひ、我が國に現存する最古の工藝品として重要な考古資料たるは言ふ迄もなく、國寶中の國寶として尊い。

第三十四頁の寫眞版は東院の中庭に在る夢殿で、寺内に現存する重要建築物の一。天平十一年行信僧都の建立と言ふから、約一千二百年前のものである。尤も鎌倉時代に至り建久四年に補修されたと言ふ記録もあるが、原型は昔の儘に保存されて居る。様式は金堂と同様、二重の基壇上に建てられ、八角圓堂・單層本瓦葺、屋頂に寶珠を冠し、堂の四面には兩開の板扉が石段に添ひ、他の四面に櫺子窓がある。内部に和かな救世觀音菩薩の立像を始め、多くの秘佛が安置されて居る。

文字 語 句

新 出 文 字

例 著 麗 莊 縮 慕 祕

讀 替 出 字

形 (新出は卷六、カタチ) 支 (新出は卷六、シ) 殿 (新出は卷十、オゴツカ。同、ゲン)
雄 (新出は卷三、ヲ) 追 (新出は卷四、オヒ) 持 (新出は卷三、モツ) 富 (新出は卷四、フ)

語 句 と 其 の 説 明

法隆寺 奈良縣生駒郡法隆寺村に在り、法相宗の大本山。南部七大寺の一。古名斑鳩(イカルガ)寺。推古天皇十五年開創。推古様式の金堂・五重塔婆中心の兩院と、天平様式の夢殿中心の東院と二區に



法 隆 寺 全 景

分れ、以後各時代建立の諸堂・諸門之に附屬。金堂本尊釋迦如來・夢殿祕佛觀音等諸佛像・金堂四壁四佛淨土圖等皆古代美術の至寶。尙日本書記天智天皇九年火災の記事に依り、現存の建物を和銅以後の再建とする説もある。

南大門 西院の正門で永享六年火災に罹り、同十一年再建。門を湛ると右に寶光院、空地を置いて護摩堂、左に地藏院・西園院・新堂等の建物があり、道を隔て、遙に中門が見える。

中門 中門を入ると長く立て繞らされた廻廊があり、其の中に金堂と五重塔とが昔を語り顔に立つて居る。中門は樓門制で樓上に孝謙天皇勅願の百萬塔があり、又二王の塑像を安置してある。本寺の誇は實に此の中門・金堂・五重塔が推古式たると、其の寺寶が隨・唐・三韓の光明を有する點に在る。

五重の塔 地・水・火・風・空の五大にかたどつて五層に積み建てた塔。此の五重塔は高さ四十五米、四面に鳥佛師作と稱する塑像がある。

華嚴

うるはしくはなやかなこと。きらびやかなこと。かめしいこと。りつばでのごそかなこと。

金堂 金箔を塗り又は金銀をちりばめた堂宇。金色の堂。伽藍の中心で本尊を安置する殿堂。法隆寺の金堂は八十平方米、堂階ある壯麗な建物で、四佛淨土の壁畫は特に名高く、今尙五色燦然たりし古を偲ばせて居る。内陣土壇には釋迦如來の金銅坐像、其の外東壇及西壇佛、土壇四隅には四天王の像がある。珍寶玉蟲の厨子や橋夫人厨子も本堂にある。

講堂 一番奥に在つて中門と遙に向ひ合つて居る。中門から眺めると、右に金堂、左に五重塔、其の間から遙に講堂の雄大な姿が見える。建物の中では之が一番大きい。法隆寺資材帳に「天平の資財帳に所見なし。延長三年別當觀理の時焼失し、六十六年の後、別當仁階の時、正暦元年再建す。舊位置を改め、北に寄せて北室跡に興す。其の構造は目錄抄に此堂者六間四面、南面戸六本、北面戸二本也。又新後戸一本、左右妻各一本也。云々」とある。

輕快 輕量で快速なこと。すらすら氣持よく運んで滯せぬこと。輕捷。

藥師の尊像 藥師は藥師瑠璃光如來の略。如來の一。須彌山の東方淨瑠璃國の教主。誓願を發して衆生の病患を救ひ、無明の痼病を醫す。其の像は左手に藥壺を持ち、右手に施針長印を結ぶを通例とす。又醫王とも言ふ。

聖德太子 御名厩戸皇子。又豐聰耳(トヨトミミ)皇子・上宮皇子と言ふ。世に上宮法王・法主王と稱し、後人更に其の御徳を尊び聖德太子と號す。用明天皇第一皇子、御母は穴穗部間人皇后。

用明天皇 欽明天皇の第四皇子。御母は堅鹽媛、蘇我稻目の女。第三十二代の天皇。敏達天皇の崩後、皇弟を以て位に即き、磐余之池邊雙槻宮(大和十市郡)に都し給ふ。

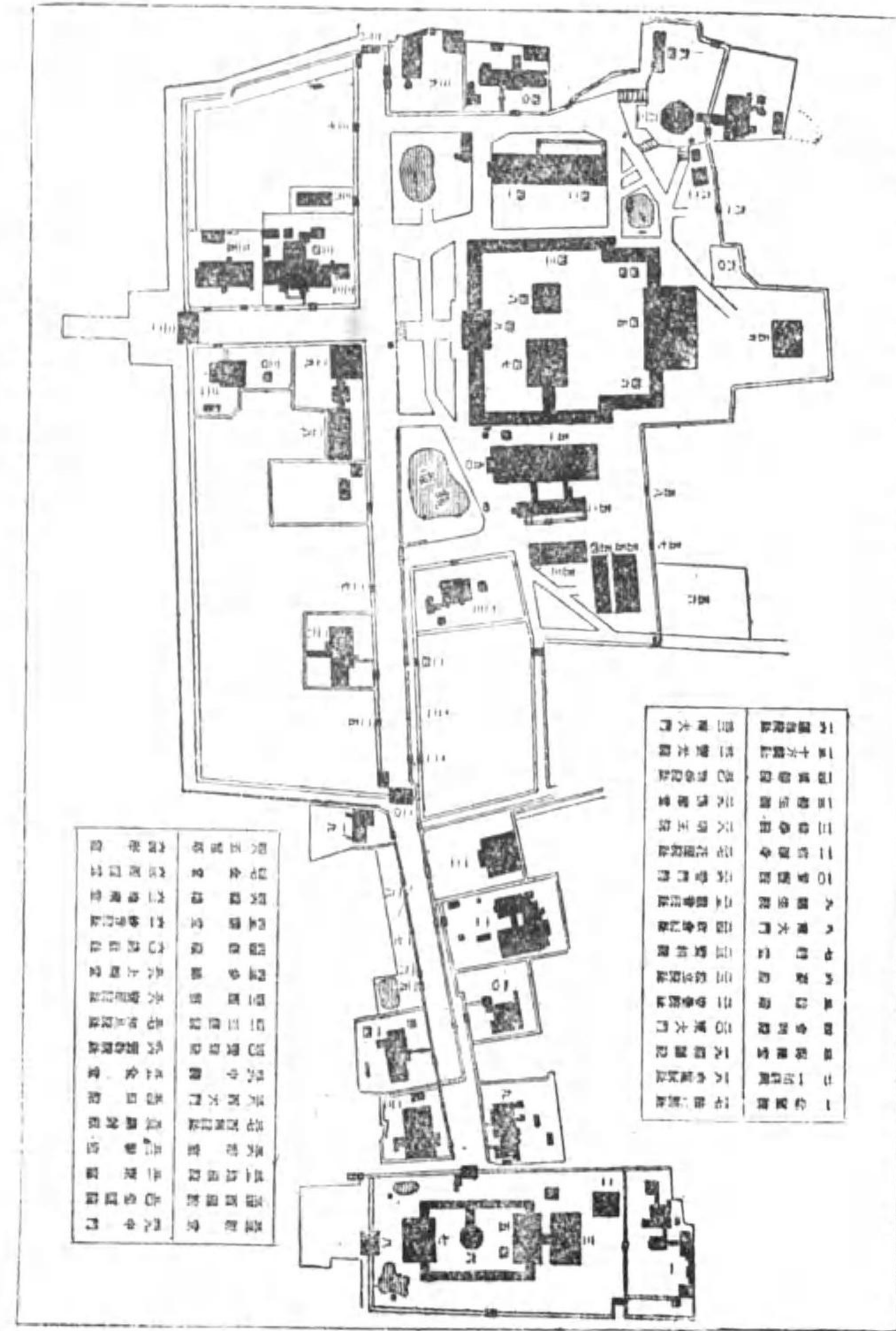
追慕 おひしたふこと。死者又は立ち去つた人を思ひしたふこと。

釋迦三

釋迦・文珠・普賢の三菩薩を言ふ。金堂内の佛體は寺記に據ると、内陣土境の上には、南面中央に本尊金銅釋迦如來坐像（一丈四尺五寸）脇土金銅藥王藥上菩薩（各二尺八寸七分）あり、聖德太子御生前の誓願に依り、御母及び妃の冥福を祈らんが爲、鳥佛師をして作らせ給ひしものにして、本尊背に銘あり、造佛の由來を記す。東には金銅藥師如來坐像（一丈二尺五寸）脇土金銅日光月光菩薩立像あり。太子の御父用明天皇の御爲に作らせ給ひし最初の本尊にして、鳥佛師の作なりと云ふ。西には金銅阿彌陀如來坐像（二尺六寸）あり、太子の御母の爲に作らせ給ひしものにして、承徳二年盜難に罹り、今は貞永元年佛師康勝・銅工平國文の造る所なり。土境四隅に四天王像（各四尺）あり。其の内西方天光背の銘に『山口大口費上而次木開二人作也』又一體には『藥師德保上而鐵師 古二人作也』とあり。山口大口費は孝徳天皇の朝の人なり。この外佛像の優秀なるもの多し。百濟渡來と傳ふる虚空藏立像（七尺四寸）は最古のものなり。文珠普賢・日光月光・觀音勢至・觀音菩薩立像・彌勒坐像・地藏立像・普賢延命坐像・多門天・吉祥天立像等あり』とある。參考すべきであらう。

山背大兄王 ヤマトノオホノミコ 聖德太子の御子。蘇我入鹿は其の叔母の舒明天皇の妃と成つて生める古人大兄（フルヒトノオホエ）皇子を皇位に即かしめんとし、山背大兄王の威名天下に重きを忌み、皇極天皇の二年、兵を遣つて王を斑鳩宮に襲はしめた。王は難を免れ遂に斑鳩寺に入り、子弟妃妾と共に縊れ死なれ、聖德太子の胤悉く絶えるに至つた。斑鳩寺は今の法隆寺である。

等身 トウジン 人の身の丈と同じ高さ。とうじん。 **鳥佛師** トリボツシ 鞍作氏、鳥は其の名である。佛師であるから世に鳥佛師といふ。一に止利に作る。梁の歸化人司馬達等（シバタツト）の孫、多斯那の子。勅命に依り幾多の佛像を造り、今國寶



法隆寺現境内平面圖

として残存する物も少くない。後世鳥を佛師の祖とする。齋禁 不思議な現象の有つた跡。靈蹟。偶然 豫期せずして然ること。思掛無いこと。不圖。壁に畫いた繪畫。法隆寺の四佛淨土の壁畫は確に偉大な藝術である。其の大きに於て、其の古さに於て、其の曲線の示した力に於て、然して堂内に人々に強い印象を與へる點に於て我が國唯一のものである。記録に據ると『内壁には寺傳鳥佛師・曇徴の筆と稱する繪畫あり。西壁は阿彌陀の淨土、東壁は寶生佛の淨土、北裏東脇は藥師の淨土、西脇は釋迦の淨土を畫けり。佛菩薩の像は各一丈七尺内外の大作なり。今剥落せりと雖も色彩尙燦然たり』とある。龜裂 龜の甲の如きさけめを生じたこと。ひびが入つたこと。ひびわれ。ひび。推古天皇 欽明天皇の第三皇女。敏達天皇の皇后。御母は蘇我稻目の女堅鹽媛。第三十三代の天皇。皇姪豐聰耳皇子（聖德太子）を立て、皇太子とし政を攝せしめ給ふ。聖德太子が十七箇條の憲法を制定し給うたのは此の御宇の事である。御念持傳 念持佛の敬。自分の居間に安置し、又は身に持添へて信仰する佛。二蟲 鞘翅類中吉丁蟲科に屬する昆蟲。硬甲を有し三對の肢あり、全體綠紫色で黄金色の縦線がある。吉丁蟲。椿象。金花蟲。玉蟲の御厨子 厨子は佛像を安置するに用ひる具。佛龕。寺記に據ると『玉蟲厨子は木造にして、總て高さ七尺八寸、臺座高一尺、廣四尺五寸、須彌座高三尺一寸、其の上に宮殿を置く。屋上の鴉尾迄三尺六寸、四方は密陀繪にて經説を描き、鼓具は唐草の透彫にて其の下に金花蟲の羽を敷詰めて裝飾と成したり。故に玉蟲厨子と稱す。傳に推古天皇御持佛の厨子と云ふ。橋夫人三千代念持佛厨子は高八尺八寸、彌陀三尊を安置す。共に無類の名品なり』とある。

東大門

西院から東院に通ずる東院側の門。東院は此處から數町を隔て

た所にある。其の道筋に中道院趾・法花院趾・運池院趾・十方院趾等が礎石を残して居る。東院

上宮王院と號し、西院の東五町許に在る。聖德太子斑鳩宮の舊址で有つたのを蘇我入鹿の爲に焼亡せられ其の後行信僧都が天平十一年に創立した。四方廻廊を繞らし、西に四足門、南に禮堂南門がある。夢殿 夢殿は東院の金堂とも稱せらるべきもので、聖德太子が三昧定に入らせ給うた所である。東院は斑鳩宮の焼けた跡に天平年間に創建されたものであるが、其の夢殿は傳法堂と共に能く天平時代の建築様式を遺して居る。夢殿は西面の八角堂で各面の幅四米半、高さ約十二米、二重の石壇の上に立てられて居る。柱も八角形で殿の四方には鐵金具付の扉があり、四隅に連子の窓がある。瓦葺屋頂には寶珠露盤があり、寶珠は火焰を飾る。本尊救世觀音は鳥佛師作と稱せられ約二米（六尺五寸）の立木像で、太子等身と言はれ天下有数の佛像である。斑鳩宮 斑鳩は今の奈良縣生駒郡法隆寺村の地域を言ふ。古昔斑鳩が群居して居たので此の名がある。推古天皇の九年聖德太子が此處に宮を建てて斑鳩宮と稱し給うた。其の跡は法隆寺の夢殿の邊であると言ふ。（或は言ふ夢殿は其の宮址である）此の斑鳩の地に法隆寺其他の諸寺を建立し、佛法興隆の聖地と成つた。従つて法隆寺は舊名を斑鳩寺と言ふ。憲法十七條 憲法はのり。おきて。法制的には國家の元首が其の副機關の組織・

権限、其の作用等を規定する大法。即ち一國の國體及政體の組織・編制を規定する法文を言ふ。推古天皇十二年聖德太子初めて憲法十七箇條を作り、國家の制法を定めらる。金人 黄金で鑄造した人の像。祕佛 祕藏する佛像。厨子の中に祕めて拜ませぬ佛像。安置 据ゑ置くこと。やすらかに置くこと。神體や佛像等を崇め置くこと。富の小川 龍田川の支流、今の富雄川を言ふ。

奈良縣生駒郡北倭村大字高山に發し、佐保川と合して大和川と成る。 **いかるがや富の小川の絶え**

ばこそ 片岡山飢人の歌、拾遺集に出づ。いかるがやの「や」は呼掛け、語調を整へる爲に置く。絶えはこそは絶えたらそれこそその意で、反面に永久に枯渴せぬとの心を込めたもの。直譯して言ふと、萬一流れが絶えたら、其の時こそ我が大君の御名が忘れられよう（だが流れが絶えぬ限りは永久に忘れられない）となる。忘れぬの「め」は將（む）の變化したもので、動作を未來に言ふ助動詞。忘れぬは忘れられよう。従つて一首の歌意は、あの斑鳩の地を流れる富の小川の水が枯れて仕舞つたら何うか知らぬが、あの流れが絶えない限り何時迄も我が大君の御名は忘れられない、と君萬歳を祝ひ壽いだもの。 **太子をしみく**と 拾遺集の歌は太子を誦つたものでは無いか、所は思出多い斑鳩であり富の小川であるから、古歌を想ひ起し其の心持を其の儘に太子を偲び奉つたものであらう。前の歌の「わがおほきみ」を聖德太子と解する人もあるが、それは當らない。矢張斯う解するのが至當であらう。

指導精神

世界最古の木造建築物、我が古代藝術の淵藪、世界美術の寶庫、此處にも我が大和民族の誇らしさが脈々として高鳴つて居る。蓋し本課の着意も亦茲に在るは言ふ迄もない。文も囁んで含む様な現代的紀行文で、明朗掬すべき風格を具へて居る。其の觀察の鋭く確かな點、物の見方が犀利で藝術眼の豊かな點等、能く我が大法隆寺の面目を紹介し得て餘蘊がない。題材の法隆寺は奈良盆地周邊矢田山脈の盡きる所にある。聖德

太子が用明天皇の遺願に依り創建された古刹で、法相宗の大本山、南都七大寺の一である。本寺の誇は西院の金堂・中門・五重塔が推古式建築たると、其の佛像及幾多の寶物類が隋・唐三韓の光輝を有する事である。金堂は八〇平方米、堂階ある壯麗な建物で、四佛淨土の壁畫は特に名高く、今尙五色燦然たりし古を偲ぶに餘がある。内陣土壇には釋迦如來の金銅坐像、其の外東壇及西壇佛、土壇四隅には四天王の像がある。珍寶玉蟲厨子と橘夫人厨子のあるのも本堂である。中門は樓門制で孝謙天皇勅願の百萬塔があり、又二王塑像を安置する。五重塔は高さ四五米、四面に鳥佛師作と稱する塑像がある。寺は南面し南廊に中門、北廊に講堂、中庭に金堂・五重塔の相對した百濟様の調和好き配置を味ふ事が出来る。

本寺が再建されたか否かに就ては、學者の間に今尙議論がある。日本書紀天智天皇九年庚午四月の條に『壬申（三十日）夜半之後災（法隆寺）一屋无餘。大雨雷震。』又七大寺年表に『和銅元年戊申。依詔造（大宰府觀音寺。又作法隆寺。』等の文獻に依り、明治二十二年小杉樞郎・黒川眞頼は先づ再建を論じ、同二十六年伊東忠太、同二十七年塚本靖は様式から非再建を主張、同三十年堀井卯之助は斑鳩の地に三寺あるを指摘して非再建を唱へ、同三十一年再び伊東忠太は實測に依て確證し、同三十四年平子鐸嶺も屢々非再建を論證、同三十八年關野貞は高麗尺と唐尺との差を以て同論に傾いたが、是等に對し喜田貞吉は再建説を高調した。其の他天沼俊一・水木要太郎・池田谷久吉・上田三平等は多く實測の結果を以て非再建論を支持したが、昭和八年會津八一は文獻に依り再建説に傾く等、定着を見ない。近年伽藍の根本修理工事が着手され、意外の發見が世を騒がせて居るから、最後の決定を見るのも遅くは有るまい。然し再建・非再建の年代の差は約百年で、様式が飛鳥時代のものなる事は再建論者も認めて居る。何れにしても之が世界最古の木造建築物た

るは否定し難い事實である。大類博士の『史蹟めぐり』に法隆寺は往時數千の僧坊を有して居たといはれるが、今は荒廢して其の數も非常に減じて居る。六十一の塔中が今は僅に十二を存するに過ぎないと云ふ。然もそれらの跡には殺風景な築地が長く連つて、空しく門のみ残して居るものもあるが、中には畑地に成つて居る所も少くない。鬼瓦の殿しい門があるから、試に其の扉を押して内を窺へば、たゞ一面の麥の緑なのを見るに過ぎない。或は或寺の門には村役場の札と在郷軍人分會の札とが並び懸けられて有つた。誰か時世の變を感じない者があらう。然し其の物寂びた土塀の處々に桃や櫻は咲き亂れて居り、然して圓頂緋衣の人々はそちこちに往來して居る。如何にも落着いた氣分のする道であつた。道を曲り／＼して行くと、やがて丹塗の大きな建築が林の間に見えた。それが現今の法隆寺である。

中門を入ると、長く立て繞らされた廻廊があり、其の中には金堂と五重塔とが昔を語り顔に立つて居る。金堂の内部には幾多の優秀な佛像や種々の寶物類があるが、就中著しいものは其の壁畫である。それはひどく剝落し破損して居るけれども、尙千有餘年の歴史の色に彩られて、動ずんだ壁面には佛像が明かに描き出されて居る。如何にもそれは力ある線を以て描かれた諸佛の姿である。壁畫保存の爲には目下保存會が組織され、歴々の人々が其の保存法に頭を悩まして居られるが、我等も亦此の偉大なる藝術が永久に保存される事を衷心から希望して已まない。金堂の内に充滿した幾多の佛像、乃至調度品いづれも優秀の藝術品である事は云ふ迄もない。元來聖德太子の時代には日本が佛教の興隆を圖り、盛に大陸文化を輸入すると同時に、國內諸制度の改善整頓に力を盡した事は實に著しいもので有つた。然も其等の努力の間に在つて佛教が重ぜられて居たことは注意さるべきであらう。要するに當時の日本は大陸支那に對して、自國の立場を固めねば

ならぬ場合にあつた。統一的國家の面目は大に發揮されなければならなかつた。かゝる統一的努力の結晶として又當時の文化的事業の代表物として、今日に残つたものが法隆寺であつた。其の一切が力強い趣に富んで居るのは如何にも當然の事と思はれる。試みに中門に立つて廻廊から金堂の邊りを眺めて見れば、柱に梁に家屋に纏つてに直線的な重々しい感じが溢れて居る。更に奥深く進んで講堂を遠くから望めば、其の大きな家根の反が描く極めて悠揚とした曲線は、何と立派な古典的な崇高さを示して居るのであらう。

以上は法隆寺の西院であるが、東院は此處から數町を隔てた所にある。東院には夢殿と呼ばれる八角堂があつて、之は聖德太子の御遺跡である。此の夢殿は東院の莊嚴なる趣に反して極めて優美な感がある。其の八角堂を廻つた丹塗の廻廊、其の檐を飾る放光の擬寶珠、それらが折柄傍に咲き亂れた枝垂櫻を背景として、此處に遊んだ者の腦裡に深い印象を與へずには置かない。殊に夢殿の周圍に在る繪殿や舍利殿の美觀は、此處に遊んだ者の腦裡に深い印象を與へずには置かない。殊に夢殿の周圍に在る繪殿や舍利殿は、何の裝飾もない澁い色をした低い平たい建物である。其の中央に丹塗りの空想的な八角の夢殿が放光の擬寶珠を頭に翳して立つた有様は實に巧みな對照である。假りに法隆寺の感じを直線とすれば、夢殿の感じは曲線である。一は男性的、一は女性的、彼を松に譬へるならば、之は柳に喩ふべきであらうか。此の夢殿の中には聖德太子の御作と稱する優秀なる佛像がある。太子と等身の救世觀音と言はれるもので、古來祕佛として容易に人目に觸れなかつたものであつた。それは金色に耀いた立派な像である。否單なる立派では無い、實に唯一と云ふべきもので有らう。それは飛鳥朝佛像に見る異様の偉大さと快適な氣分とを、其の樂天的な面貌と其の豊かな曲線の趣味とに最も立派に表現したものである。其の莊嚴なる異様さは之を表すべき言葉がない。たゞ唯一のものと云ふより外にないと思ふ。殊に左右に跳る袖飾りの曲線の立派さは、一丈

に近い體が狭い厨子の間に描いて居る曲線と共に、實に驚嘆すべきものであらう。更に夢殿の近傍には中宮寺があるが、之は聖德太子が母君の御願に依つて建てられた尼院である。其の本尊の觀音は極めて優美な作で、然も片膝を組み、頰杖を突いて居る珍しい御姿である。法隆寺の嚴めしい佛像に比べると、全く趣を異にして居る。元來日本古代の佛像彫刻は其の顔面にのみ全力を集中したかの觀がある。それは多く靜坐の態度と衣服を着用せる爲、四肢や筋肉に贅の妙技を示す餘地が無い爲でもあらう。然しそのみでは無く佛像に對する人々の感じが、其の相貌の端麗をのみ主として、肉體の美には考へ及ぶ事を敢てしなかつた爲であらう。古代ギリシヤの神像等とは、如何にも異つたものである。中宮寺の觀音は其の顔面のみならず、肢體の全部に亘つて柔かな曲線に十分の暖味が溢れて居るのは、古代の彫刻中に確に異彩を放つたものである。殊に崇高さに充ちた法隆寺の佛像に對して然りである。ともかく法隆寺から夢殿へ、更に夢殿から中宮寺へ、段々に其の感じの和らげられて行く所が如何にも興味深く感ぜられた。

法隆寺は聖德太子の名と離れ難い關係がある。従つて寶庫たる鋼封藏や東院には太子の木像・畫像、又は繪傳が多くある。元來法隆寺關係の遺物には異國的色彩のものが多いためであるが、其等の間に立交つて我等に人間らしい親しみを感じさせるものは、此の太子の像を以て第一とすべきであらう。五重塔内の塑像人形も我々とは皆縁遠いものに思はれた。固より太子の像も理想化されたものが多いため、太子一生の業績に相應しい程の聰明と威嚴とを示して居る。或は國家統御の大任を双肩に負うて、大陸支那と拮抗しようとする力を發揮した双眼を見開いた相貌のものさへもある。然したゞ一つ鋼封藏内の太子少年時の木像には他に見られぬ特色が發揮されて居た。それは其の眼である。他の像に在つては其の兩眼に示されたものは賢明の才

か事業の力であつた。此の像に感得される所はそれでは無くて、慈悲の相である。其の垂れ下つた背、濡ひのある眼ざし、そこに認められるのは人生の哀調で無くて何であらう。我々は他の太子像に於て偉人としての精力を認めた。然し此の像には偉人としての慈悲を認めることが出来た。然して益々太子の偉大さを悟つたのである。かゝる兩面の像を生むに至つた太子自身も、恐らく此の如き性格を備へられて居たに相違ない。蓋しかゝる兩面性は偉人として當然具備されるべきものであるから、我等は此の木像に接して人生に涙の値ある事を教へられた様な氣がしたのである。と。適宜參案して本課の内容價值を發揚せしめると共に、新鮮で然も情趣豊かな文の感觸を滿喫させて欲しい。尙結びの富の小川は龍田川の支流で古來歌枕として用ひられ、新千載集にも「斑鳩や富の小川の流れこそ絶えぬ御法のはじめなりけり」と言ふ。之に能く似た歌が見えて居る。

指導形態

指導上の認識點

- 1 本課の指標は世界最古の木造建築、古代美術の寶庫法隆寺の外観と内部の美に陶醉せしめ、其の藝術的神祕境に直接させ、感情の純化を圖り古美術愛好の精神を養ふにある。
- 2 千三百餘年を経た此の奇蹟を一に聖德太子御三代の御孝心に關聯させ、尙凡ゆる方面に

於いて太子の御生涯の崇高偉大なる事に感銘追慕せしめる事も亦本課の重要な觀點の一つであらねばならぬ。

- 3 指導は反覆讀誦に依る文の直觀から創造的聯想の啓培を企圖し、恰も實地に見學せるが如き實感を抱かしめる様にせねばならぬ。此の間挿畫の連絡活用・話方化等、種々工夫の

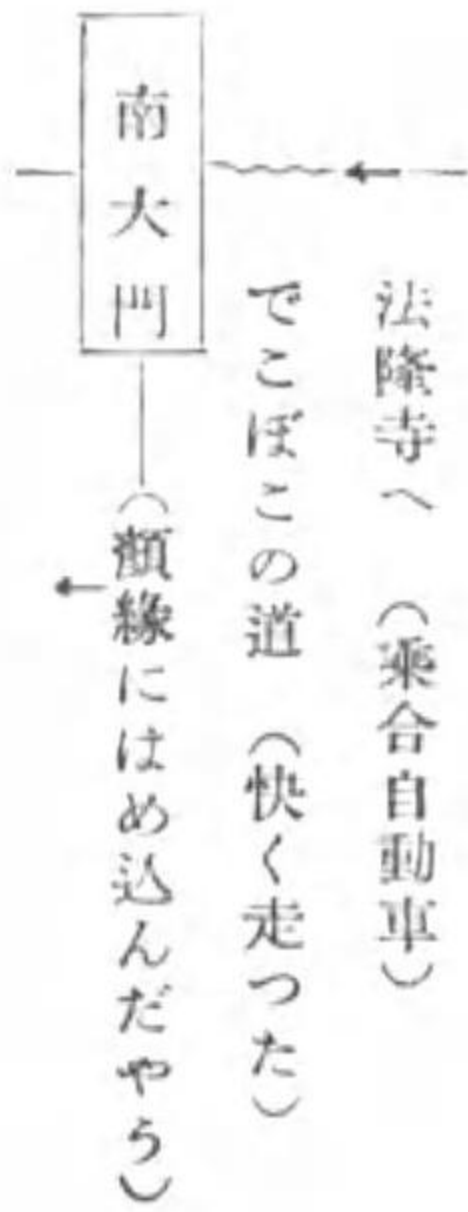
- 4 餘地が抄く無いであらう。
- 4 文は頗る垢抜けした紀行文である。従つて形式方面に於ても既習の各種紀行文と連繋させ、傑出した箇所を指摘し、文章觀の啓培に資する事も大切な心構である。
- 5 本課は大體四時間見當で指導を纏める様立案するのが妥當であらう。

第一次指導

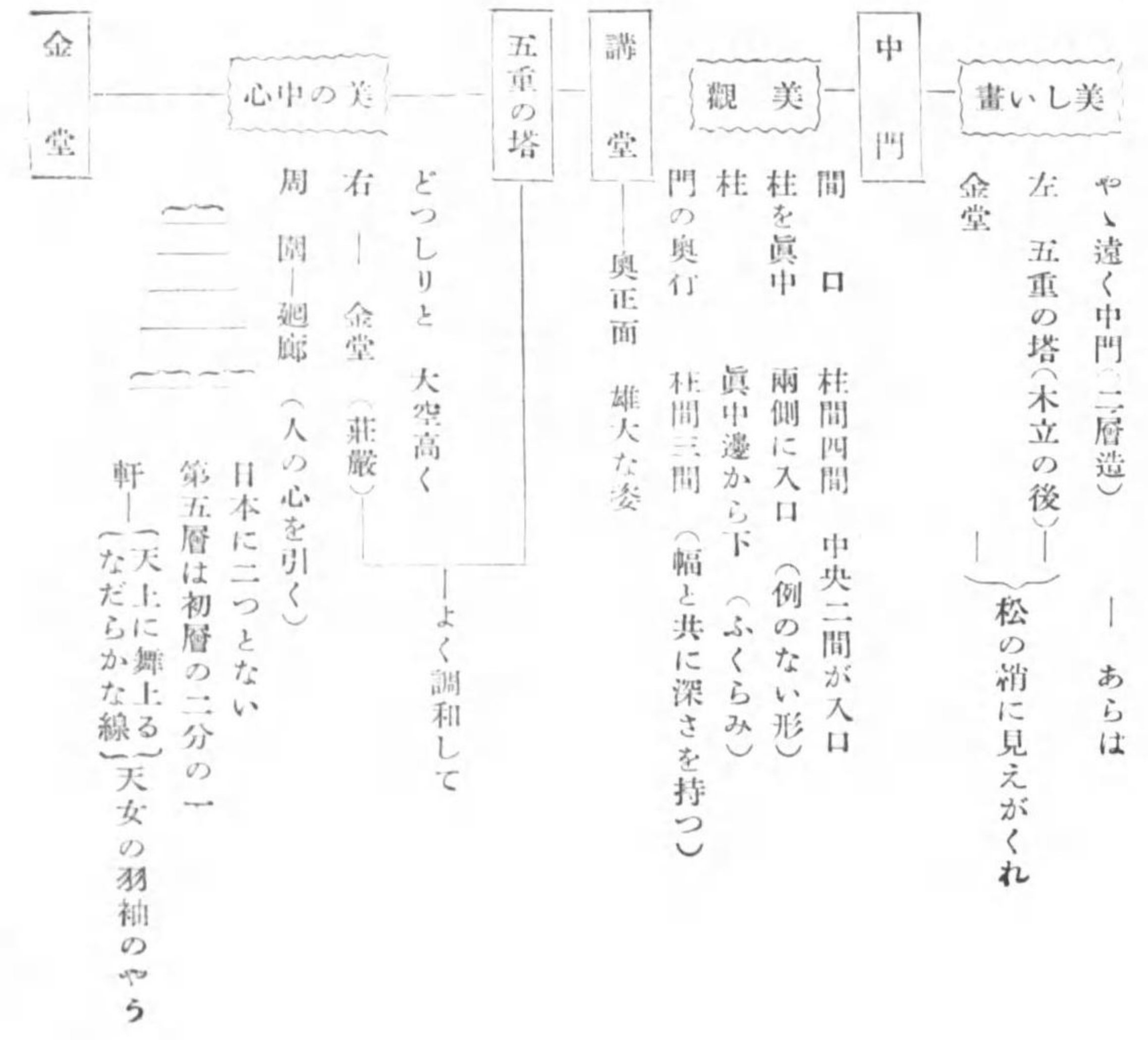
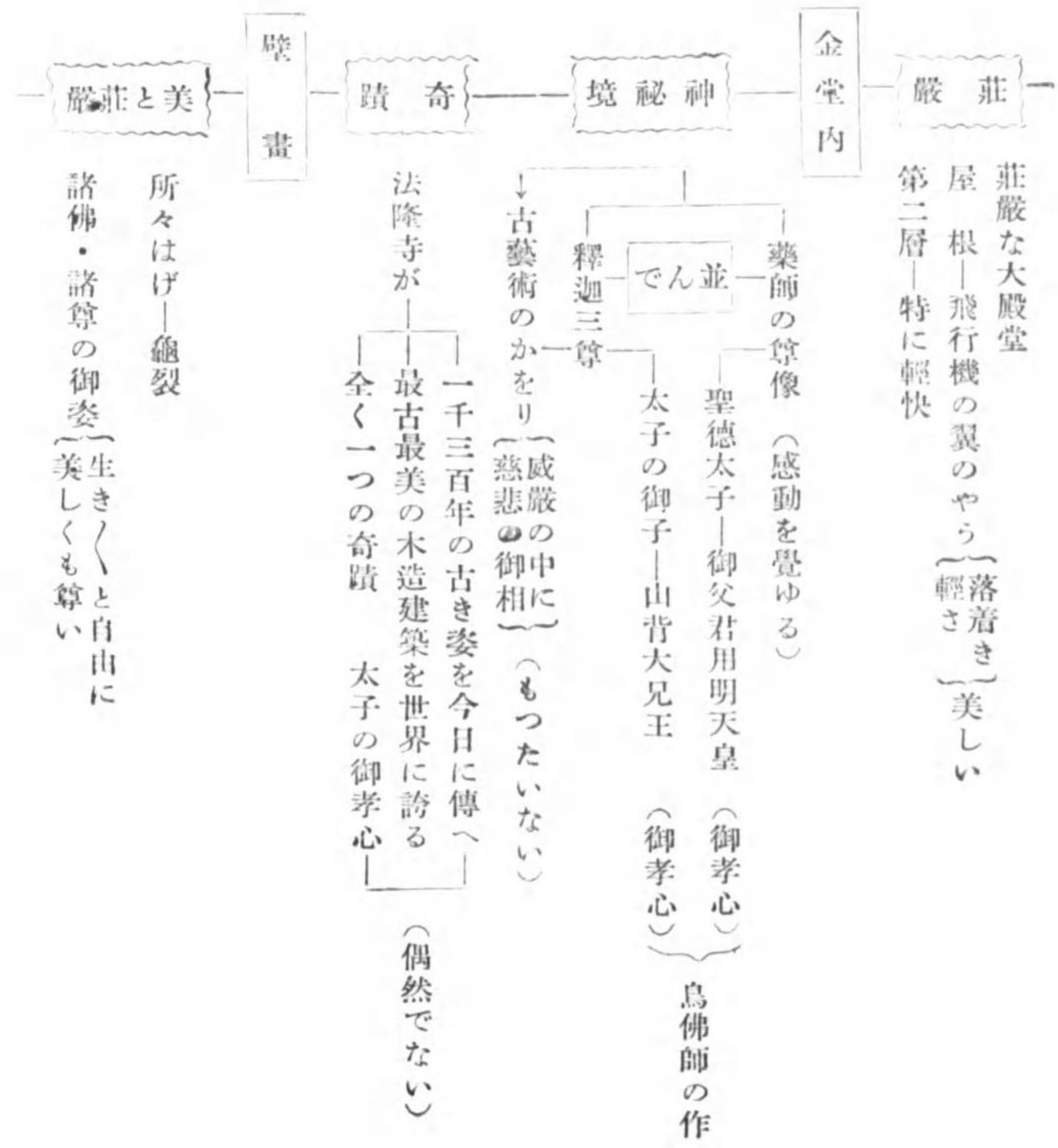
- 1 題目指導。
 - ▽近畿地方の地理學習と連繋させ、位置や地域の全體を呑込ませてから通讀に移るが良
- 2 自由學習。
 - ▽最初は投渡して自由に通讀させる。
- 3 第一印象を記帳させる。
 - ▽氣付いた事は何でも記帳させて置く。
- 4 話合。
 - ▽第一讀で得た印象や感想を中心に。
- 5 不明の箇所を質問させる。

- ▽新出文字は字書を輔導して索引させる。
- 形例 著 支 麗 莊 嚴 雄 縮 迫 慕 持 祕 富
- ▽難語句は質問を俟つて隨所に指導する。
- ひたすら あこがれる 終點 しばし たゞみながら 額縁 ゆらぎながら 見えがくれ あらは 間口 柱間 例のない あらゆる 華麗 美觀 しばし 吸附けられ そり立ち 莊嚴 ひかへ 調和 形作つて 二層 初層 縮小 重 苦しき 輕快 天女の羽袖 ならぬか 曲線 大殿堂 あたかも 比して 轉じて 神祕境 感動 追慕 結晶 現出 等身の御佛 しのばれる 大藝術 ゆかしく 慈悲の御相 奇蹟 あながち 偶然 龜裂 すかしぼり ゆかしい 憲法 十七條 金人 祕佛 安置 とけ込んで 忘れめ 口ずさんで しのび奉る
- 6 個有 詞の取扱。
 - ▽地名・物名等は寫眞帖其他を利用し、尙

- 7 挿畫と連絡して入念に指導する。
 - 南大門 中門 五重の塔 金堂 講堂 藥師の尊像 聖德太子 用明天皇 釋迦三尊 山背大兄王 鳥佛子 壁畫 推古天皇 御念持佛 玉蟲の御厨子 東大門 東院 夢殿 斑鳩宮 本尊觀世音 富の小川
- 8 黙讀。
 - ▽道順に連れて展開する情景を能く想像させる。
- 8 地圖と挿畫の照合。
 - ▽道順を次々に確かめる。
- 9 低音讀。
 - ▽しみ／＼と反覆通讀させる。
- 10 指名讀。



- 11 適宜に句切つて、數名にノートを整理し提出させる。
- 第二次指導
 - 1 輪讀。
 - ▽一場面づゝ、座席順に。
 - 2 指名讀。
 - ▽中・劣生を主として。
 - 3 話合。
 - ▽文の觀點を中心に。
 - 4 文と挿畫とを照合させる。
 - ▽何處を見せたものか？ 文に何う出て居るか？ 等
 - 5 一場面づゝ逐次に研究させる。
 - ▽頃合を見て次の文圖を騰寫して配付する。



玉蟲の御厨子

すかしぼりの金物の下に玉蟲の羽
美しい光彩 (金色の金物をすかして)
當時の形の美 [想像される]
輝かしい光彩]

尊

夢 殿 東大門から東院へ

廻廊・殿堂に囲まれた中庭にある

八角圓堂—我が國で一番美しい

夢殿の名—聖徳太子の宮殿 (斑鳩宮)

我 國 最 美

憲法十七條 夢に金人
佛教の研究

堂内の大尊觀世音 (秘佛) [太子の御姿
語りがほ]

富の小川

東院を出て又乗合自動車

晩春の夕もやの中 夢殿がとけ込んで (美しい極み)
いかるかやの古歌 しみぐと (太子をしのび奉る)

- 6 話合。
▽配付した文圖と各自のノートを対照させ大
法隆寺の面目を偲ばせる。
- 7 一場面毎に簡意を把握させる。
- 8 全紀行の中心思想を掴ませる。
▽移り變る場面の印象や感懐を纏めさせて。
全篇の文意を確める。
- 9 全篇の文意を確める。

- 10 話合。
▽文意や感想を中心に。
- 11 話方。
▽大法隆寺の全貌を追歩式に。
低音讀。
- 12 低音讀。
▽しんみりと場面の情景を味はせて。
ノートを整理して提出させる。
- 13 ノートを整理して提出させる。
- 第三次指導
- 1 通讀練習。
▽文の機構に注意させて。
- 2 會讀。
▽グループに分れて各自に深究討議させる。
- 3 演習。
▽繪圖を描かせ道順や地物の印象等を記入さ
せる。
- 4 話方練習。
▽旅行気分にならせ、實感的に。
學習事項の整理。
- 5 學習事項の整理。
▽内容・形式の両面に互つて。
朗讀練習。
- 6 朗讀練習。
▽適宜に會讀を交へ反覆讀誦させる。
- 7 視寫・聽寫練習。
- 8 暗誦・暗寫練習。
- 9 新出文字の習取。
- 10 語句の應酬練習。
- 11 テスト。

テスト問題

- 一、次の短文を出来るだけ詳しく解釋しなさい。
- 1 高い五重の塔と莊嚴な金堂とが、不思議によく調和して、こゝに美の中心を形作つてゐる。
- 2 先づ仰がれる薬師の尊像に深い心の感動を覺える。それは聖徳太子が御父君用明天皇を追慕し給ふ
餘りに作らせられたもので、實に太子御孝心の結晶であり、さうして、それが又法隆寺といふ美の殿

堂を現出したゆゑである。

3 名工鳥佛師の作として古藝術のかをりゆかしく、威嚴の中に、しみぐと慈悲の御相を拜するのであるが、今さういふこと考へるのは餘りにもつたない気がする。

二、次の漢字を使つて熟語を七つ作りなさい。

慈	額	柱	縮	華	講	雄	嚴	道	輕	祕
造	蹟	蹟	壁	麗	持	富	尊	殿	調	

三、次のヘンヤカムリの附く字を書けるだけ書きなさい。

1	βへん	2	示へん		
3	竹かんむり	4	麻だれ		
5	病だれ	6	玉へん		
7	草かんむり	8	しんねう		
9	走ねう	10	行にんべん		

第六 五月の太陽

漢詩調を多分に加味した自由詩で、近代感覺に富んだ力強い生活詩である。

夢幻の世界では無い。此の大地の上に足を踏締めて、刹那々に生きつゝある我々の生存意欲の發露だ。

空中の樓閣では無い。現實其の儘を凝視し、感激して筆を執つた散文詩だ。だから飾りも無ければ誇張も無い。感覺其の儘の表現だ。

第一聯では太陽に對する讃仰と感謝の念が躍り出て、新緑の上に映ずる燦たる光に呼掛けて居る。

第二聯は陽光に輝く農園だ。光に觸れる總ての物が潑刺と生きて動いて居る。

第三聯は農家に輝く太陽だ。有りと凡ゆる物を無差別に平等に、五月の太陽が降り注ぐ、そして、生きよ伸びよと叫びて居る。

全篇を通じて、五月の陽光に叛いて輝いて居ない物は何一つ無いであらう。森羅萬象の盡くか其の光に浴し、大地の懷に抱かれて居るのを見る。そして夫等は悉く個々に潑刺と動いて居る。潑地に働いて居る。生きて居る。脉打つて居る。それらは總て前課の一千年前の地上と變り無き姿であり、それだけの單純な事實に違ひは無いが、後から後から生れ出る者の魂には、その日／＼の新しい目覺めがあり、今更の如き感動が斯うした詩を生出すのだ。新色滴々の詩だ。噛めば噛む程、滋味の出る感興豊かな詩だ。

文字 語句

新出 文字

朗 鈍 亂(乱) 戯

讀替 文字

舞 (新出は卷八、ヒマ)

撫 (新出は本卷、ナデ)

嬉 (新出は卷七、ウレシ)

戯 (新出本課、ギ)

蠶 (新出は卷五、カヒコ)

語句と其の解説

五月

此の月は暑氣次第に烈しく、河川涸れ盡きて水が無くなるので陰曆では水無月といふ。陽光は特に強烈を覚え、物皆が生新潑刺、躍動の氣が天地に滿ちる。潑刺 魚の飛びはねるさま。撥刺。

跋刺。活潑々地。

ひわ色

鶉の羽色の如き綠黄色。又黄ばみがちな崩黄色。少し茶色がかつた鶯茶。いみじき 甚だしい。ひときは目立つ。すぐれて居る。いちじるし。みかんなく みかんは遺憾、残り惜しきこと。残念。みかんなくは其の否定。映發 光・色などのきら／＼とつり合ふこと。てりはえる。

と。なでかはいがること。

亂舞

亂舞

發撫

亂れ舞ふこと。舞狂ふこと。發撫 いく／＼しみあつかふこと。なでかはいがること。嬉戲 嬉々として遊び戯れること。ふざけ遊ぶこと。祝福 よるこびいはふこと。幸福を祝ひことほぐこと。榮光 もとキリスト教から來た名詞。神のさかえ。

はえあるひかり。今一般に人のさいはひを祝福して言ふ。

榮光

光彩

きら／＼してかゞやくこと。ひかり。はえ。つや。光輝。光華。彩華。瑤光。

生氣

いき／＼したいきほひ。發生の氣力。

指導精神

詩形も自由だし言葉もきび／＼して、ちやうど五月の太陽の様に力強い。物皆が陽光の中に融け込んで居る。さうして互に愛を感じ合つて居る。

此の詩は全くの叙景で、作者は離れて見て居る様だが、實際は降りそゞぐ光の中に融け込んで、陽光と共に亂舞し、愛撫し、嬉戲し、祝福し合つて居る。苗代時の自然を懐しむ作者の喜悅を寫して餘り無き作品で自由な詩形ではあるが、細緻な表現が目立つ。殊に最後の聯などは、着眼も新しく餘情も豊かで、恰も全詩に生氣を吹込んだ思ひがある。

此の詩は一讀して直ぐ感知される様に、五月の陽光の快さを感覺的に感受して居る。情緒的と言ふよりも寧ろ官能的で、五官を刺戟する感覺的陶醉を表現し、色・音・匂ひ、さうして何處かに音樂的の旋律をさへ覺える。此の詩の感じ方は、あらゆる梢に降りそゞいで、と言ふ單なる表現に見ても分る通り感覺的であるが、それと同時に其處に點出された色彩の配合と言つたものにも着目せねばならぬ。即ち第一聯で言へば、潑刺たる鮮綠・明朗なひわ色・鈍重な茶褐色、然して天地に滿ちたゞよふ新緑の芳香、さうした物の交錯の中に、配合されて居る色彩的な狀景を分解して見なければならぬ。色彩的な詩人として最も著名なのは俳句

の蕪村であらう。蕪村の作品は何處迄も色彩的な魅力を以て讀者に訴へて来る。此の詩から受ける感觸も何處かそれと似通つて居る。

作者は自然の歡喜を作者自らの中に感じたのであるが、其の表現に當つては自分の歡喜と自然の歡喜とを區別しないで、自分と自然との融合の中に互に相通する歡喜の情を表現しようと試みて居る。即ち自然と自分との合致に歡喜を表現したわけである。自然も歡喜に躍つて居れば、作者自身も雀躍して居る。其の狀態は作者が「波打つ麥島にをどり、目ざめるやうな野菜島に亂舞し」と表現して居るのでも分る。

五月の太陽は麥島にをどり、野菜島に亂舞し、青田を愛撫し、鎌の先に嬉戯し、さては蘆屋根に光彩を與へ、小猫を戯れさせ、物置にさし込み、鶏小屋にしのび込む。其の朗かで力強い陽光は即ち作者自身であらねばならぬ。結局作者は太陽であり、太陽は作者である。太陽と作者が渾然として全く一如の至極境を見せた所に此の詩のよさがある。愛誦に値する詩だ。味ふべき詩だ。

指導形態

指導上の認識點

- 1 生新澁刺の田園詩を通して五月の太陽の希望・榮光・生氣等に就いて深く感せしめ、新緑五月の大自然の美しさに味到せしめるのが本課の第一主眼である。
- 2 八行三聯の自由律に依る詩形から、豊かな

力ある詩情を内觀せしめ、各聯毎に統一した一つの情景・情感があり、然も三聯共通の詩心に統制されて居る表現機構・美的調和に共感せしめるのが形式上の觀點である。

3 指導に當つては先づぶつ附けに讀ませ、然る後語句の深究に移り、反覆玩味させて詩魂

- 1 題目の指導。
▽板書して讀ませ身邊を見廻して簡單に季節感を與へる程度で良い。
全課の視寫。
▽聽寫を交へるのも面白い。
通讀。
- 2 讀合せを兼ねて一度靜かに通讀させる。
新出文字の指導。
▽字書を輔導して索引させる。
- 3 朗 鈍 亂 亂 舞 撫 嬉 戲 戲 戲
- 4 讀後の印象を話させる。

第一次指導

- 1 題目の指導。
▽板書して讀ませ身邊を見廻して簡單に季節感を與へる程度で良い。
全課の視寫。
▽聽寫を交へるのも面白い。
通讀。
- 2 讀合せを兼ねて一度靜かに通讀させる。
新出文字の指導。
▽字書を輔導して索引させる。
- 3 朗 鈍 亂 亂 舞 撫 嬉 戲 戲 戲
- 4 讀後の印象を話させる。

6 ▽先づ記帳させてから讀ませても良い。
不明の箇所を質問させる。

7 ▽難語句が多いから重要なものは此方から指摘して一齊に指導するのが經濟的で且つ効果的である。

- 降りそ、いで 澁刺 鮮綠 明朗 ひわ
- 色 鈍重 茶褐色 いみじき 映發 満
- ちたゞよはしめる 亂舞 愛撫 嬉戲
- 茶摘少女 祝福 希望 榮光 光彩 蠶
- 室 鶏小屋 生氣

8 ▽場面や情景を想像させて。
話合。

9 ▽把握した詩境を話せる。
詩情を汲んで詩心を掴ませる。
▽適否の判断は後廻しとして。

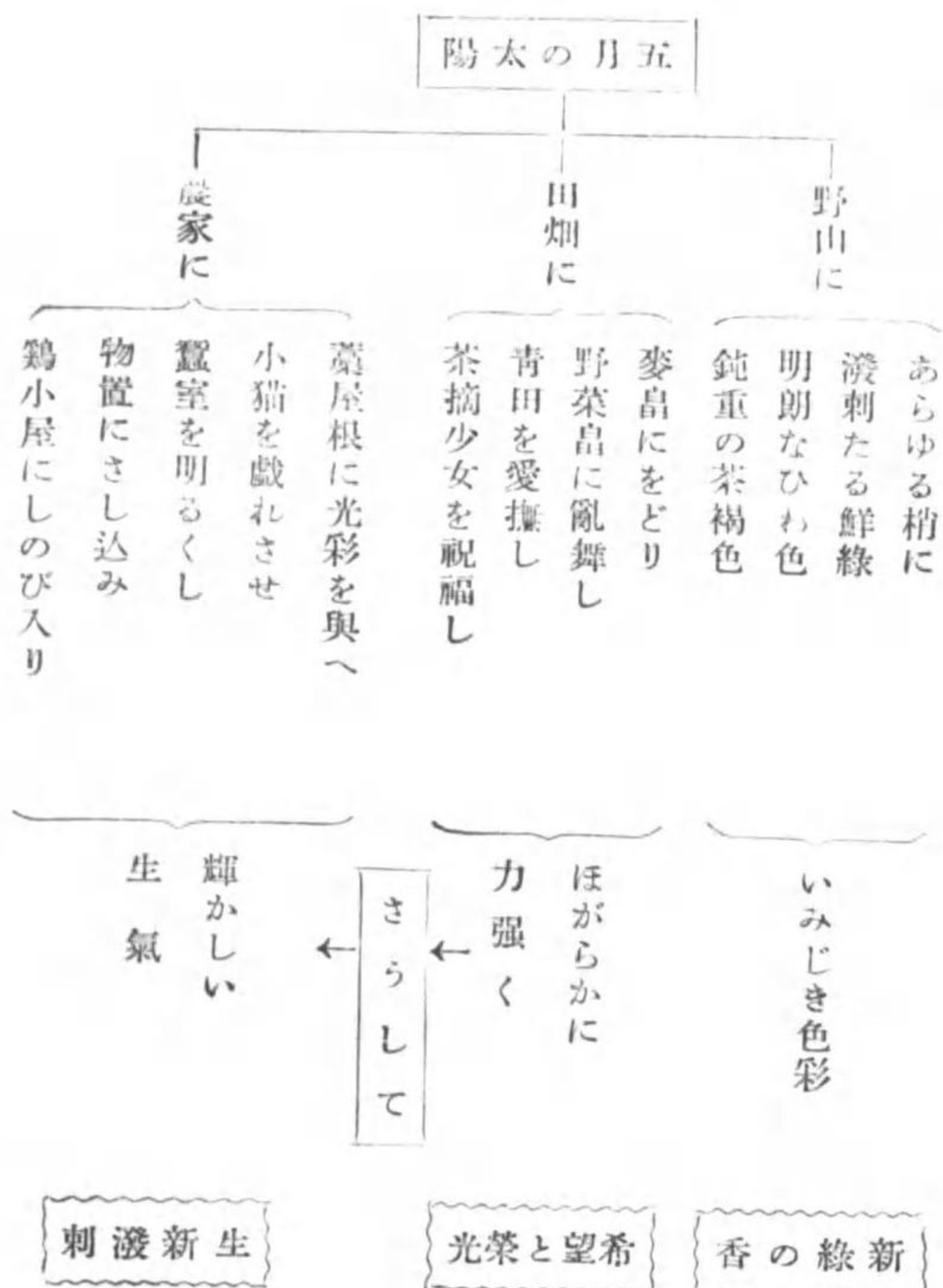
10 指名讀。
▽一聯づゝ、輪讀式に。
低音讀。
▽詩心を頭に描かせ反覆讀誦させる。

12 ノートを整理して提出させる。

第二・三次指導

1 全詩の聴寫。
2 讀合と同時に語句を吟味させる。

3 難語句は入念に板書して。
黙讀。
4 詩情や詩意を考へさせて。
詩心の現れた語句を拾はせる。
讀合せを兼ねて逐次に深究させる。



- 5 書取。
▽板書事項を適宜に書取らせる。
- 6 指名讀。
▽一聯づゝ、數名に。
- 7 誦合。
▽詩心を中心に。
- 8 詩形の吟味。
▽既習の詩形と比較させて。
- 9 範讀。
▽聲調美を内觀させ乍ら、野趣の横溢した點に注意させて。

テスト問題

一、次の詩を散文に直しなさい。

五月の太陽は、
ほがらかに、力強く、
波打つ麥畠にをどり、
目ざめるやうな野菜畠に亂舞し、
苗代の青田を愛撫し、
農夫の鋤の先に嬉戯し、

- 10 全詩の散文化。
▽詩心や詩情を汲ませて。
- 11 全詩の暗寫・暗寫。
全詩の繪畫化。
- 13 詩趣から畫題を見出させ、繪心を咬つて。
作曲化して低唱させる。
- 14 各自にメロデーを工夫させて。
新出文字の書取。
- 15 語句の應用練習。
- 16 テスト。

茶摘少女の手先を祝福しつゝ、
限なき希望と榮光を田圃に投ずる。

二、次の□の中に適當した字を入れなさい。
五月の太陽は、

□□の藁屋根に□□を與へ、
其の□□に小猫を□れさせ、
其の蠶室を□□くし、
薄暗い物置に□□み、
鶏小屋の□□入つて、
今、生れたばかりの□□に、
輝かしい□□を吹込む。

三、次の語句を書取つて其のわけを書きなさい。

- | | | | | | |
|---|----|---|----|----|----|
| 1 | 濃刺 | 5 | 嬉戲 | 9 | 祝福 |
| 2 | 鮮綠 | 6 | 明朗 | 10 | 榮光 |
| 3 | 鈍重 | 7 | 映發 | | |
| 4 | 愛撫 | 8 | 亂舞 | | |

第七 姉

嫁ぎ行く姉を中心とし、一家の微妙な、そして複雑な感情が軽く扱はれ、全く恰好の短篇である。

初めて見る盛装した姉の姿を見て、何とも名状し難い作者自身が、そはくする自らを制しつゝ、胸一杯に成り乍ら姉へ別れの言葉を述べようとする邊り、讀者も思はず胸迫るものがあらう。

本課では嫁ぐ日の華かさよりも、寧ろ嫁いで行かねばならぬ人生的宿命が暗示されては居まいか。めでたい、めでたいと言ふうちにも、何か知ら泣くにも泣けない、心から朗かな氣持にも成れない、悲喜交々と言ふ錯綜した感情の中に人生哲學の第一歩を経験させると言ふのが、恐らく作者の狙ひ所に違ひない。

作者は態とらしく、姉さんがお嫁に行つた後は急に淋しく成つたなぞと、單的に説明して仕舞はず、表面では喜びの言葉を連發し乍ら、實は濕やかに成り勝な兩親に對し、一方では朗かで快活な兄を配したりして相當多角的な内面描寫を試み、全體としては渾然一體、個々の感情の動きを能くも是程の短篇の中に、巧に捉へ得られたものと感服の外は無い。

尙此の一篇には、在來の所謂結末に當る部分が無く、態と讀者の想像に任せ、文に餘情を残した點にも着目すべきであらう。

文字語句

新出文字

嫁誌

讀替文字

夏（新出は卷五、ナツ）結（新出は卷八、ムスブ）部（新出は卷七、ブ）

語句と其の説明

す通り 立寄らずに通り過ぎること。

島田

島田詣の略。年若き婦人、特に花嫁の結ぶ髮形。東

海道島田宿の遊女がふだん結んで居た所から此の名がある。世事百談に『天和・貞享の頃、十二三歳の少女、此の風に結ぶ者多く、今も東京にては多く未婚の處女の俗とす。』とある。

裾襖（今でも） 着

物の据につけた模様。又其の模様のある着物。

分家

家族が其の屬する家の戸籍を脱して、別に

一家を創立すること。又其の創立した家。

へうきん

輕率でおどけたことをすること。氣輕で人

を笑はせるやうな所爲。

指導精神

本課は嫁人する姉に對する妹の心持を叙した抒情文で、着眼は後半の「生まれた家を出て行くのはいやですけれど、これが女の行くべき道なんですから」の邊りに在らう。文の觀點は脈打つ心の動きが其の儘文と成つて居る點にある。抒情文は魂の文章・感情生活の記録である。魂から出る叫び、心の奥の響き、それらの端的な表現である。本課は内容は勿論、其の良き範例として蓋し絶好の作品と言へよう。文の山は「ふすまが

すうとあいて、着飾つたねえさんはいつて来た。』の邊りに在つて、『ねえさん、おめでたう。』の邊りがクライマックスに成つて居る。内容が内容であるから指導に際しては婚儀の大體を先づ心得置く要があらう。婚禮は凡そ人生の大典である。従つて東西何れの國も人文始まつて以來、嚴肅に然も鄭重に式を擧げる。其の様式は風俗習慣に依つて異なり、一民俗の間にも時代に依り階級に依り數へ切れない程特異な風習がある。現今我が國に於ても地方・山間の村落等には、都會人の想像も及ばぬ奇習が尙傳へ守られて居るが、然し漸次都會地の流行風俗に、又大都市に新しく始まる様式に、大體から觀て統一されて行く傾きに在る。擧式迄に行はれる種々の慣例に就ては、如何なる式法に據るにしても、凡て中古以來の禮式の型に従つて居るのが今日の風である。結局古い傳統に時代の風習が加はつて、自然其の時代の標準的な慣例と成るのであるが、其處に又各自の社會的地位や生活に對する態度等に依つて撰擇が行はれる。それらの事は總て媒酌人と双方の間の正直な隔ての無い相談に依つて定められ、行はれるのが自然で幸福な道である。

縁談が大體整へば、先づ媒酌人を定める。婚禮に就いて一切の事を托するので有るから、大抵は初めから男女双方の間に立つて盡力した夫妻に依頼するか、又は別に師父・先輩として尊敬する夫妻に依頼する。新郎側・新婦側双方に媒酌人が定められる場合は、迎へる側を正とし、他方を副とする。縁談が全く整へば結納を双方から贈つて約束の證とする。昔は婿方から嫁方へ帶地に酒肴を添へて贈り、嫁方から婿方へ袴地に酒肴を添へて贈つたものであるが、現今では極めて鄭重な場合の外、一般には現品は贈らず、金封にして目錄に結納の品目も酒肴の品も共に誌めるのが常例である。昔は品物を釣臺に載せ、使者が付添つて持参した。今でも鄭重にすれば兩者の使者が赴くが、簡略には媒酌人が届ける。先づ迎へる方から迎へられる方へ

持参する。受ける方では受領書を渡し、鄭重にすれば使者に祝儀目録及酒肴を侷める。次に迎へられる方から同様にして持参する。此の場合金封は半額の例が多い。結納の交換が済めば、双方の親族書を交換する。近親の姓名・住所・職業等を詳しく記す。

式の期日が大凡定れば直ぐ式服の用意に掛る。何しろ一生の盛儀で、殊に女子は最も美しく装ふべく、式服は華麗を第一として、然も其の中に嚴肅な気分をも含ませなければならぬ。之は贅澤にすれば殆ど際限の無いもので、餘裕のある家庭では莫大な費用を投じて惜まない。然し最近では成丈経済的に、且つ當日のみで無く後に流用が出来る様に調製する風が生じて来た。式服は大別して袴袴・袴袴・紋付の振袖・同じく留袖の四種とする。袴袴は門地高く位階ある家の婚禮にのみ用ひられる。袴袴は身分に拘らず贅澤な婚禮として最上のものである。袴袴は盃事の時に着用し、後に黒の振袖或は色振袖に着換へる。普通中流以上の家庭では黒の振袖を式の時に着用し、後に色直しと稱へて色物の振袖に着換へて披露の宴に臨むのが一般の風である。以前は度々着換をして徒に式服の数を誇る風があつたが、今では神前結婚が流行し、披露の宴も洋風にするのが多い爲、自然時間に制限されて着換も一度か又は二度が精々と成つた。更に簡單にすれば最初黒の留袖を着て、後に色物に着換へるか、或は黒の儘で済すものもある。又色物の代りに訪問服に着換へるのも、新しい傾向である。之は矢張色物留袖よりも訪問着の方が着用の範圍が廣いのと、訪問服なら下着なしの一枚で済むと言ふ経済的見地から来て居る。夏もやはり冬と同様であるが、袴袴を用ひるのは甚だ稀である。荷物は嫁方から衣服・寢具・簞笥・長持・鏡臺・針箱・机・食器・日用品、其の他花嫁の手廻りの調度一式持参する。數量に依つては三荷・五荷・七荷・十一荷等と奇數にして、簞笥・長持の外小物は鈎臺に載

せ、定紋付の油團ユヅを掛け、人夫に揃の法被を着せ、使者附添ヒ華々しく運ぶ風は今も地方に有るが、一般には地位と生活様式に應じて適當に選び、徒に多きを誇る風は無くなつた。

斯くて愈々當日に成れば、先づ新郎から新婦への使者が赴く。以前は新婦は迎へを受けて、介添人付添ヒ新郎の家に入るのであるが、現今一般には大抵媒酌人が迎へに赴き、(本課もそれで、山田のをちさんとをばさんと言ふのが媒酌人であらう)新婦の両親と共に新婦を伴つて行く。新郎方では待女郎始め迎への人々が玄關に並び到着を待つ。新婦到着すれば化粧室で休息し、待女郎や介添の手で化粧・着付を直し式の間に入る。新郎は客座、新婦は主座に相對し、媒酌人は新郎の、其の妻(待女郎であるのが普通である)は新婦の側に相對して坐する。本酌人・加酌人下座に着く。席定れば待女郎は床の前行き、長鬘斗三寶を引き、座の上手中央に据ゑて元の座に着く。一同禮をする。待女郎長鬘斗三寶を引き元通り床に飾る。本配人・加酌人起ち床の間の瓶子を引き、雌蝶を取り酒を提子ヒツに移し、雄蝶を取り酒を移し、次に銚子に注ぐ。待女郎は初献引渡し即ち三寶に昆布・勝栗・熨斗を盛つた物を進め、盃臺を進める。本酌人は銚子を取つて新婦に三つ重ねてある最初の盃(土器)を進め三献を注ぐ。(始めに細く、次に太く、終に細く)新婦は盃を受ける形を取り、側のシタミ(用意してある土器)に酒をあける。次に新郎に其の盃を進め、三献を注ぐ。本酌人は銚子を持つて退き、加酌人は提子の酒をそれに加へる。本酌人又新郎の前に進み、盃を最下に置き、二枚目の盃を上にして進め、三献を進め、其の儘新婦に進め、又退いて酒を加へ、次の盃を上にして新婦に進め、新郎に進める。之を式三献又は三々九度の盃と言ふ。此の間媒酌人高砂を誦ヒ盃臺・銚子を元の様に床に飾り、待女郎は新婦に引添ひて別室に移り、又席を改め親子・親族の宴を行ふ。次に新婦は「色直し」即ち

衣服を改めて祝宴の席に着く。如上の式は鄭重にも又簡単に媒酌人の妻が待女郎・酌人總ての役目を務めて行ふ事もある。以上は婚儀の大體であるが、女兒向の教材であるから教へる程度は問題であらうが、指導者としてざつと是位の事は先づ心得て置かねばなるまい。

指導形態

指導上の認識點

- 1 本課の標的は一人の姉に嫁に行かれて仕舞ふ日の切實な淋しさが主因と成つて居る複雑な女性心理に共感させると同時に、嫁入する姉や兩親の氣持等、家庭の日出度い慶事の中に漂ふ一抹の寂寥さをふつくりと味はせる點に在る。
- 2 文は平易であり主題感情も生活的であるから、成るべく干渉を避け、ぶつ附けに投渡して讀書發見的に味到せしめる様にし、教師は出来る丈發言を慎しみ、兒童をして反覆誦させる様仕向くべきである。
- 3 配當時間は大體二時間見當とし、緩方とも連絡させる様工夫して欲しい。

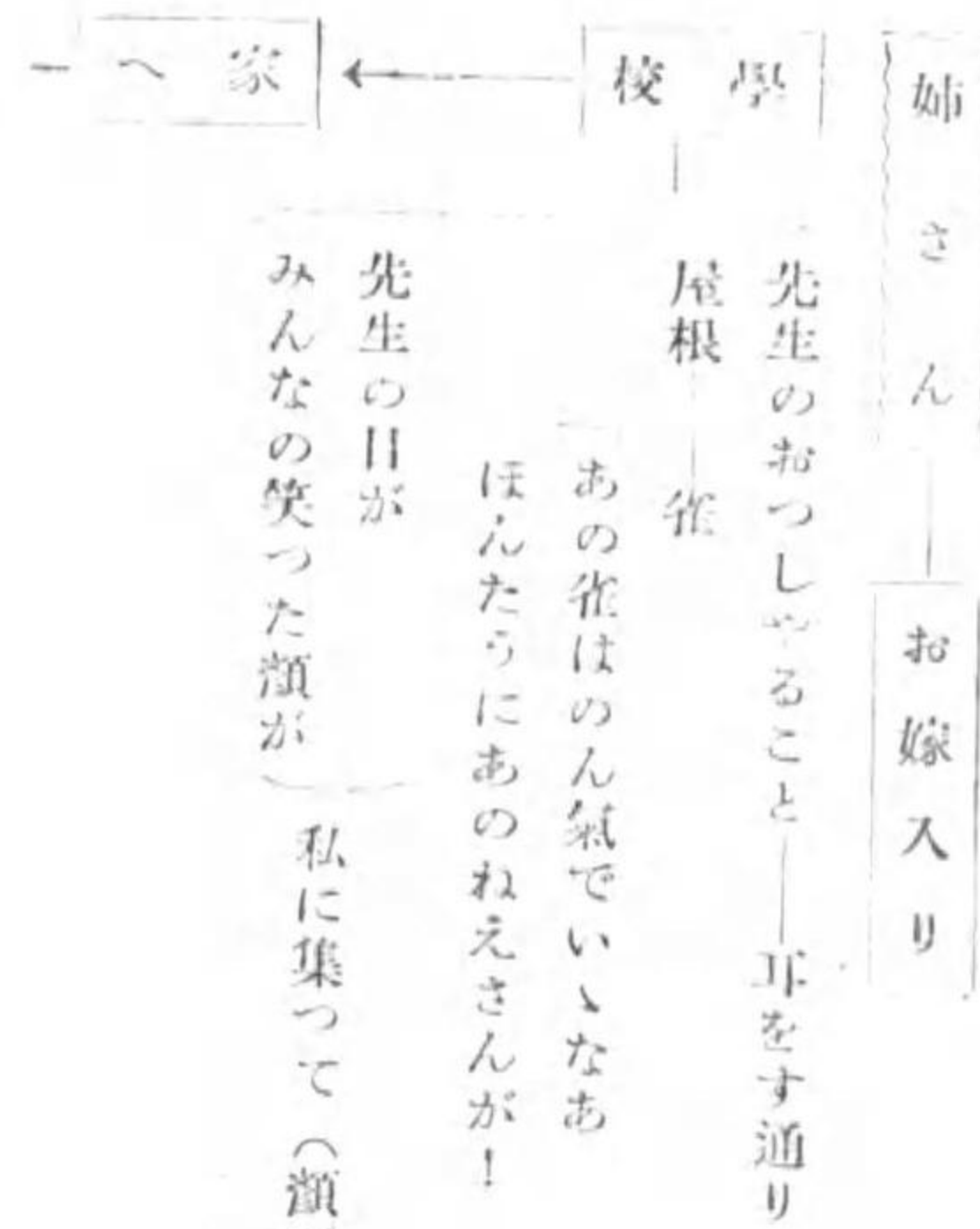
第一次指導

- 1 題目の指導。
▽題目を一瞥させ直ぐ通讀に移るが良い。
- 2 自由學習。
▽印象其の他は記帳させて置く。
- 3 文の荒筋を掴ませる。
▽叙述内容を手短かに。
- 4 新出文字の指導。
▽字数も少いから其の都度字書を索引させるが良い。
- 5 難語句の指導。
▽之も殆ど教へる程のものも無いから、其の嫁 夏 結 部 誌

- 6 繰返して反覆通讀させる。
▽文の觀點に注意させて。
- 7 指名讀。
▽適宜に句切つて、何人かに。
全課の文意を掴ませて見る。
▽把握した文意は記帳させて置く。
- 8

第二次指導

- 1 全課を一氣に通讀させる。
- 2 話合。
▽感想や文意を中心に。
- 3 逐次研究。
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し、各自のノートと對照させる。



ノートを整理して提出させる。

午後

急ぎ足で——歸つて見ると

入口に下駄が (幾足も並んで)

奥では (がや／＼人聲が)

髪結さん——ねえさんのお支度

島山 裾模様 まるでよその人のやう

分家のをばさん『あゝ、いゝお嫁さんが出来ました。』

おかあさん——にこ／＼

お座敷——みんなが話をしてゐる。

私——何だかさびしい氣がして

自分の部屋へもどつて
心をしづめようと雑誌を
(意味をなさない)

(姉)

『雪ちゃん。』

『ありがたう。私がゐなくな

つても……』

『生れた家を出て行くのは……』

(私)

『ねえさん、おめでたう。』

『はい。』

『ねえさん、これまで、ずるぶ

ん……』

夕方

迎への自動車が来た。

ねえさんは、山田のをぢさん

をばさんと

一しよに

其の夜

おとうさん

おかあさん

話はとだえがち

にいさんだけ——時々へうきんなこと (みんなを笑はせた)

4 話合。

▽配付した前項の文圖を前にし場面の雰囲気
に讀浸らせる。

5 指名讀。

▽全課を一氣に。

6 範讀。

▽心の動きに注意させて。

7 黙讀。

▽文意を確める意味で。

8 話合。

▽文の觀點を中心に。

9 低音讀。

▽場面の情景を想像に描かせて。

10 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 輪讀。

▽適宜に句切つて、座席の順に。

2 會讀。

▽グループ毎にプランを立て、互に考究させ

3 價值の感得。

▽場面が醸す雰囲気讀浸らせて。

4 話合。

▽讀後の感想を中心に。

5 話方練習。

- 6 ▽實感的に、模寫的に。
場面を分けて脚色させる。
▽第一場面は學校・第二場面は家として學級
總掛りで。
- 7 劇化實演。
▽背景其の他は銘々に工夫させて。

テスト問題

- 8 朗讀練習。
- 9 視寫・聽寫練習。
- 10 新出文字の書取。
- 11 語句の應用練習。
- 12 テスト。

- 一、次の語句を使つて短文を作りなさい。
 - 1 火のやうに
 - 2 はつと
 - 3 急ぎ足
 - 4 無理に
 - 5 行くべき道
 - 6 着飾つた
 - 7 ずるぶる
 - 8 口ぐせのやうに
 - 9 へうきんな
 - 10 我がまゝ
- 二、次の文にあやまりがあつたら正しなさい。
 - 1 ほんとうに、あのねひさんが、よその人になつてしまふのかしら。
 - 2 烏田を結つた、裾模様を着たねいさんは、まるでよその人が見える。
 - 3 お座敷でわ、山田のおじさんと、おばさんが、おたうさんや分家のおじさんなどと話をしている。
- 三、次の書取をしなさい。

1 カミユヒ	5 ヨメイリ	9 フクシユウ
2 ザシ	6 ザツシ	10 ヘヤ
3 シユクダイ	7 ショカ	
4 キカザル	8 ケウシツ	

第八 電話の發明

題目の示す通り純科學的教材であり、毎巻必ず有つた發明發見の芽生を培ふ題材の一つである。構想上最初發明者其の人の氏名を明かさず、弟子の名前が先に現れ、最後に其の人の氏名を擧げて其の功績を稱へた邊に此の文の押への強さが窺はれよう。大體の仕組は前巻に扱はれた織機の發明者豊田佐吉と共通で、其の動機から始まり、次に苦心談が述べられ、成功を以て結ばれて居る。

世人から何んなに嘲笑され馬鹿扱にされても、ひたすら研學一途なベルの研究態度が具さに語られて居る。其の發明の道程も興味が深く、一段々と成功に近づいて行く苦心の程が我々の胸を打つ。弟子のワトソンも忠實で熱心に愛すべきものがあり、我知らず機械を取落す邊り、讀者をして思はず頬笑ましめる。最初は態と「もの言ふおもちや」と斷つて置き、發明・發見と名の付く物の殆ど總てが、當初は「おもちや式」のものに始まる事を暗示して居る。ベルが發明を完了した十七年後の十月には、ニューヨーク・シカゴ間に電話が開通し其の第一聲が發せられたが、其の際受話機を握つた彼のフロックコート英姿は、アメリカの文化史上に榮光を放つ記念寫眞として有石である。

ベルの父は、ロンドン大學で辯論術の講義をした事もある人で、ベルも其の影響を受け夙に發音學・音響學及音樂の方面に興味を持ち注意を傾けた。彼は長い間、電信線に依つて電氣的に音樂を送る方法を發明し度いと考へて居たが、それに就て實驗して居る中に、もつと重大な考へ、即ち針金に依つて生地の儘の音聲

を電氣的に送る方法を工夫しようと言ふ考へを抱く様に成つた。然るに音聲に依つて電流を生ぜしめ、それを遠く離れた場所に於て再び聲音化するには何うしたら良いかと言ふ問題が起る。種々實驗して見た擧句、一八七五年六月二日、ボストンのワイリアムズ電氣工場の屋根裏で、ワトソンと言ふ若い助手を相手に實驗中、圖らずもベルは此の問題の最も簡単な解決に到達した。それは薄い鐵の圓板を磁石棒の一端に近附けて置き、其の棒に絶縁した針金を捲き附ける、それと全く同じ構造の物をもう一箇所に設備し、其のコイルの針金に二本の導線を繋ぎ合はせるのである。斯くて一方の圓板に對つて話をすれば圓板は振動し其の爲コイルの針金の中に感應電流（ファラデーの發見）が流れる。之は絶えず變化して居る電流である。それが針金を流れ話を受ける方の磁石を強めたり弱めたりして鐵の圓板を振動させ、其處に再び音聲が現れるのである。翌年三月十日見事に電話機發明に成功し、間もなく特許を得た。此の年ファイラデルフィアに博覽會が開かれ、ベルも其の發明に成る電話機を出品したが、ヘンリーだのロードケルビン等言ふ當時の偉大な電氣學者も之を見て、口々に賞讃の言葉を浴せかけたと言ふ。本課は之を題材化したものである。

挿畫の印象と其の説明

第四十九頁の寫眞は本文の所謂「もの言ふおもちや」で、ベルが發明した世界最初の電話機である。最近の電話機は薄い鐵板が張つてあるが、昔は造る方法を知らなかつたので、厚い鐵板に少し離して太鼓の皮が張つてあつた。即ち鐵板の振動を皮へ傳へるのが本機である。右側の穴から話をする、其の音聲が内側の圓筒に張られた皮に傳はり鐵板を振動させる。其の振動が圓柱のコイルに作用し、それに應じた電流が左端にある陰（マイナス）陽（プラス）ターミナル（疣の様に見えるもの）を通じて相手方に傳はるのである。

第五十頁の肖像は發明者グラハム・ベルが三十歳の寫眞で、即ち發明當時のものである。一般にベルの寫眞として傳へられるのは白髮白鬚のものが多く、壯年時代殊に思出多い發明當時の寫眞は珍しい。

文字 語句

新出 文字

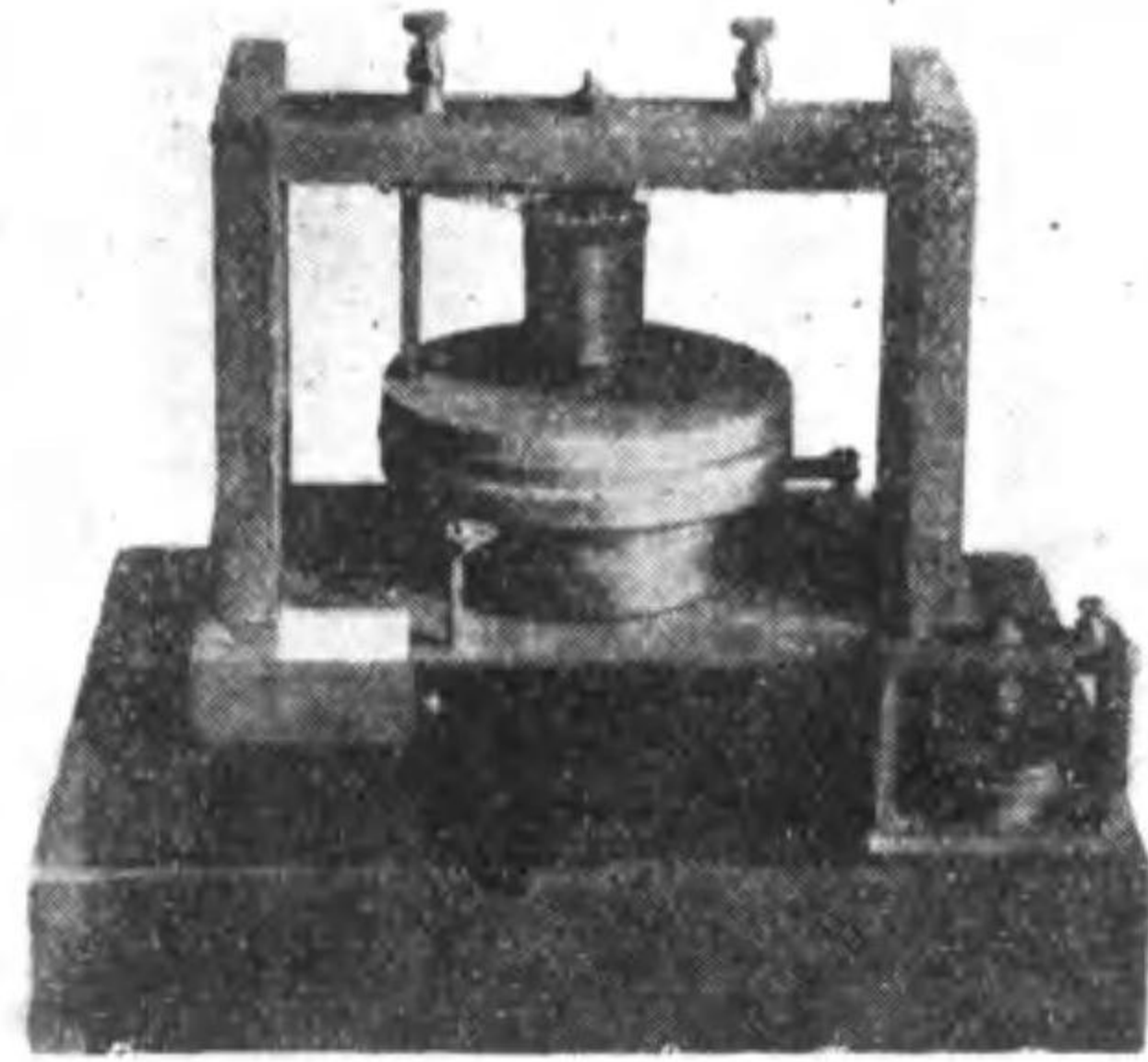
專セン 曆リキ

讀替 文字

振シ（新出は卷七、フリ） 作ツク（新出は卷三、ツクル）

語句と其の解説

電話デンワ 米人グラハム・ベルに依り發明され、尋いでエディスン・ガワー等に依つて改良された。當時二箇所のみが通話が可能で有つたが、通話範圍の擴大を計る爲、電話交換が考慮され、一八八〇年、ボストンで初めて電話交換が試みられた。其の後一八九一年、米人アルモン・ビー・ストロージャーに依つて自動電話交換方式が發明された。我が國では明治十年十一月東京横濱間に初めて布設され、爾後數年間は試験用・官廳相互間の専用で有つたが、同二十一年十二月東京・熱海間に一回線を架設、更に静岡に延長、同二十三年十二月十六日、東京・横濱間に交換業務を開始した。當時の加入者數東京一七九名、横濱四五名であつた。同二十六年三月大阪・神戸間に開始、大阪一四一名、神戸四四名、以後京都・名古屋を始め主要都市に順次布設、電話には有線・無線の二種あるが、普通に電話と言へば前



ベルの電話機
右側の小型がレシーバー（受話機）

者に依る場合を指す。最近無線電話の發達に依り、世界各國と通話可能と成つた。 **聾啞學校** 聾啞を教育する學校。聾は耳が聞えぬこと。つんぼ。啞は口がきけぬこと。おふし。おし。 **原理** 眞理の基となる根本のもの。認識の根本となる規範。正しい行爲の本と成る法則。 **生理** 生物學の略。生物學の一分科。生物體に見る生活現象及之が起因を數理化學的に考究するもの。其の特に人類のみに關する分科は之を人體生理學と稱し、基礎醫學上重要な學科で、時に或は略して單に生理學と稱する事もある。 **振動** ふるひうごくこと。又ふるひうごかすこと。理學的には物體が一定の路を前後に往復する運動。 **符號** 心おぼえのしるし。あひじるし。 **矢もたても** 諺。勢の制す可からざるをいふ。 **風變り** 普通一般の風と變つてあること。又其のもの。 **元來** もとより。初めから。もともと。從來。 **專門** 専ら其の學科を研究すること。又專一に或事柄を營むこと。 **こつけない千萬** こつけないはおどけ。道化。ふざけ。諸諺。千萬は度の甚だしいさまにいふ。至極。 **鼓膜** 耳の外聽道の底部中耳との境に位する圓形の膜。空氣の振動、即ち音響傳達の仲介器官である。 **餘念** 自餘の念慮。外の考へ。他念。他意。 **アレキサンダーグラハムベル** アメリカの人。生理學者。西曆一八四七年、エディンバラに生る。同

地の大學及びロンドン大學で教育を受け、家族と共にカナダに移り、後、間もなくボストン大學の教授と成る。一八七五年電話を發明し、大なる功績を遺す。本課は其の際の事である。彼は其の他にフオトフォーン・蓄音機等の發明もあり、飛行機の問題にも興味を有した。一九二二年歿。

指導精神

本課は此の讀本の力點の一つとして各卷に異彩を放つて居た發明發見の生きた物語で、同一系統に在る各教材と連絡して取扱はるべき重要教材である。従つて本課の指導に際しては、之を單獨の一話柄として取扱ふ事を避け、既に培はれ來つた思想系統を辿り、現代文化を招來する一ポイントとして重要な位置を興へる事を念とせねばならぬ。現代は實に電氣の世界とも言ふべく、電氣を離れては我々の生活が殆ど有り得ない事は、我々の周邊を見渡しても分る。ベルの此の偶然的發明が科學萬能時代の今日に貢獻する事の至大であつたのは、求知心に富む兒童として、必ずや感興措く能はざるものが有るであらう。

二千數百年の昔、ギリシヤの大哲人ソクラテスが、太陽はアポロの神では無く、燃えて居る火の球だ。月はアーテミスアテミスの神で無く、大きな石の塊だ」と喝破した爲、一般民衆の信仰を亂す國賊だと言ふ事に成つて、到頭死刑に處せられて仕舞つた。又ローマでは大學者のガリレオが、太陽の周圍を我々が住んで居る地球が廻るのだ」と有名な地動説を唱へた爲に宗教裁判に附せられ、彼は氣狂だと判決されやつと死刑丈は許された。それ計りでは無く、アメリカ發見で名高いコロンブス等も、地球は圓くて橙の様だ」と言つた爲、一時は馬鹿扱ひを受けた。斯様に人の知らぬ發明や發見をして、死刑に處せられたり氣狂扱ひにされた學者

や先覺は幾ら有つたか知れない。昔の古い書物を見ると、鳥の様に空を飛ぶ話や魚の様に水の中を潜る話が幾らもあるが、當時はそれを單なる空想として、そんな事が出来たら面白いだらう位に茶化して考へたに過ぎない。然るに十九世紀から廿世紀に掛けて科學が物凄い勢で發展し、昔の人が空想して居た夢は悉く實現されて仕舞つた。見よ、空には飛行機や飛行船が自由自在に飛廻つて居り、海上には汽船や軍艦、海底には潜水艦、陸には汽車・電車・自動車等、枚擧に暇が無い程、文明の利器が我々に恩恵を興へて居るでは無いか。就中目に見えぬ電氣の發見は科學界に劃期的な大革命を起させ、各種の電氣器械や電動機は言ふ迄もなく、電燈・電信・電話等の發明から、無線電信・無線電話等、居乍らにして何千里の彼方と話が出来、驚嘆すべき時代が到來したのだ。千里比隣、地球がゴム壱の様に縮んだと言ふのも全く至言だ。本課は此の思想的背景に依つて、初めて意義深きものがある。指導者は須らく文化の由來する所を辨へ、教材精神の徹底を念とせねばならぬ。

指導形態

指導上の認識點

- 1 グラハムベルが電話發明の動機並に過程に就いて知らせ、其の熱心な科學者的研究態度に傾倒せしめると同時に、機械愛好・發明發見の意慾を啓培するのが本課の指標である。
- 2 特に彼が我を忘れて其の事に没頭し切つた

學究的態度や、偶然の成功に驚喜亂舞する感
激的場面等は、兒童日常の學習態度馴致の上
に貢獻する所至大なるべきは勿論である。蓋
し本課の内容的價值も亦此の點に在るを忘れ
てはならぬ。

- 3 尙其の唯一の共力者たるワトソンが、終始

- 1 一貫形影相伴ひ、能く助手としての職責を全うした功績の程も見逃せない。本課は實に此の二重の意味に於て稀に見る絶好の科學的教材たるを失はない。
- 2 指導に際しては既習の發明發見の物語と連繫を保ち、教材精神の徹底を念とすべきは言ふ迄もない。
- 3 本課は大體四時間見當で指導を完了する様立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1 題目指導

▽板書して讀ませ電話に關する常識の程度を
確め、之を契機に讀心を唆つて通讀に移る
が良い。

2 全課の通讀

▽不明の箇所は其の儘にして一氣に讀破させ
る。

3 文の荒筋を掴ませる

▽要點を整理して記帳させて置く。

4 第一印象を言はせて見る

▽記帳させても良い。

5 新出文字の指導

▽字書の引方を教へ輔導して隨所に索引させ
る。

振作 専 曆

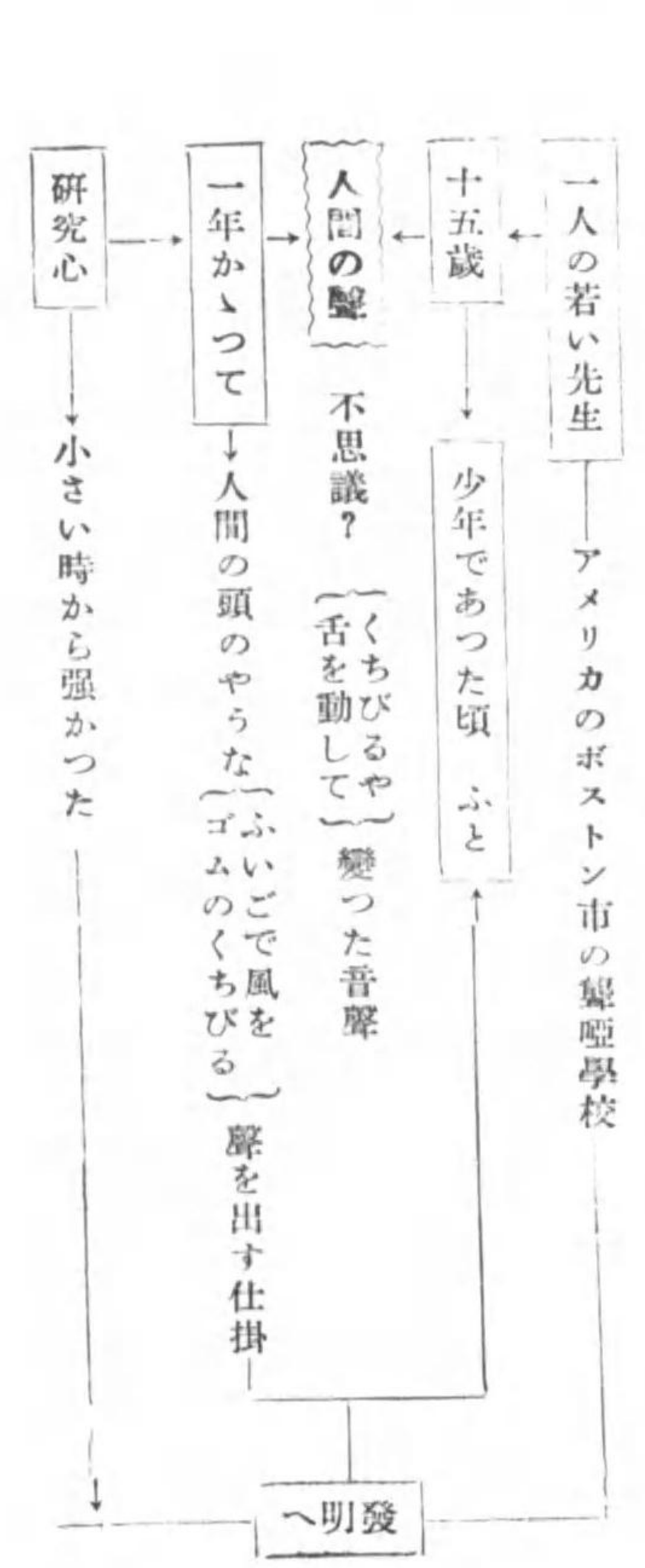
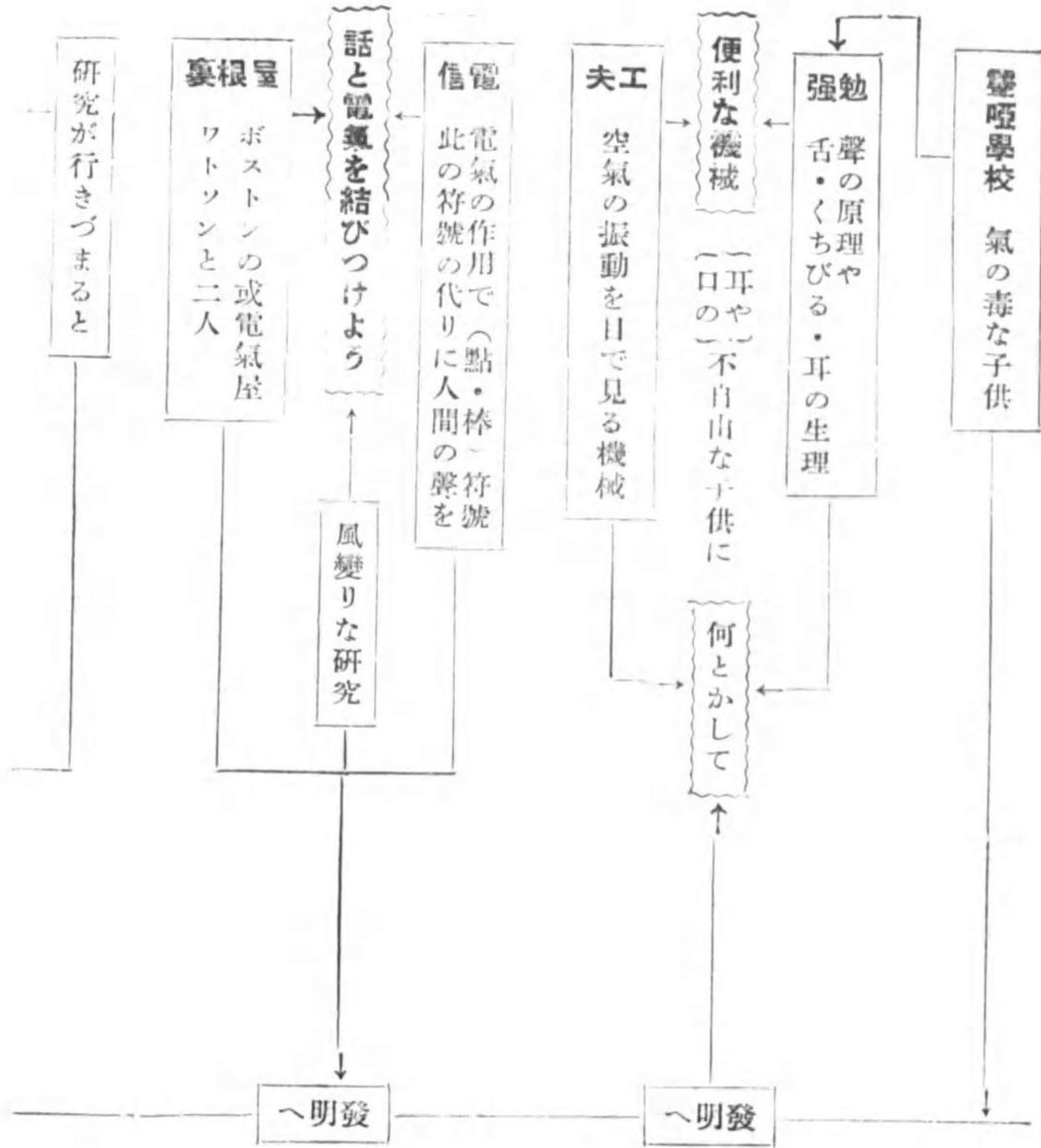
6 難語句の指導

▽質問を待つて先づ類推させてから指導する。

- ボストン市 聾啞學校 ふと ふいご
- 研究心 聲の原理 生理 並大てい 空
- 氣の振動 評判 電信機械 電氣の作用
- 符號 矢もたても トーマス・ワトソン
- 助手 電氣屋 屋根裏 風變り 行きづ
- まる 専門の學者 こつけない千萬 知合
- の醫者 氣味の悪い 鼓膜 一條の光明
- 日月が矢のやうに 研究室 磁石 餘念
- 連絡 西曆 電話 アレキサンダー・グ
- ラハム・ベル

7 指名讀

ゆつくり全課を通讀させる。



- 9 ▽文の觀點に注意させて。
文意の所在を探らせる。
▽把握した文意は記載させて置く。
 - 10 低音讀。
▽文意を確める意味で。
ノートを整理して提出させる。
 - 11
 - 2 1 數回繰返して通讀させる。
不明の箇所を質問させる。
- 第二次指導**
- 3 指名讀。
▽適宜に句切つて、數名に。
 - 4 範讀。
▽文の要所に注意させて。
 - 5 低音讀。
▽二人の學究態度や場面の雰囲気想像を描かせて。
 - 6 逐次研究。
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し各自のノートと對照させる。

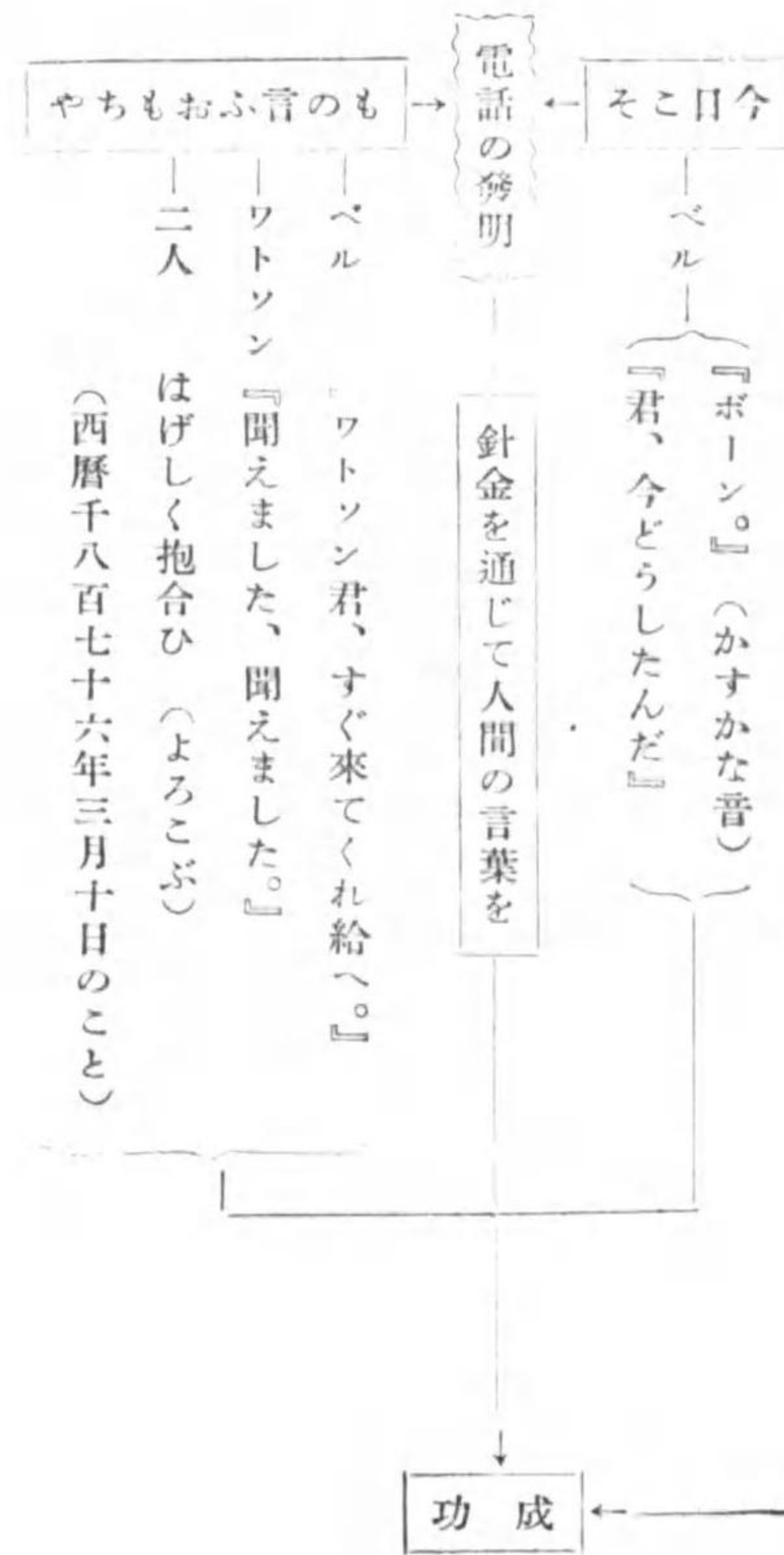
7 グループ學習。
 ▽グループに分れ配付した文圖を中心に問題を
 を作製させて研究させる。

8 表現機構の吟味。
 ▽作者の表現態度を探らせ、特に「もの言ふ
 おもちゃ」で文を統一した點や發明者の名
 前を最後に出した點等、構想上の特異な點
 を指摘して吟味させる。

9 話合。
 ▽前項に於ける作業の後を受け、此處では發
 明の動機・努力・苦心・成功・端緒・發明
 の完成等各場面に互つて話合はせ、機構の
 大體を吞込ませる。

10 文意の檢證。
 ▽把捉した文意を表面面に即して例證させる。

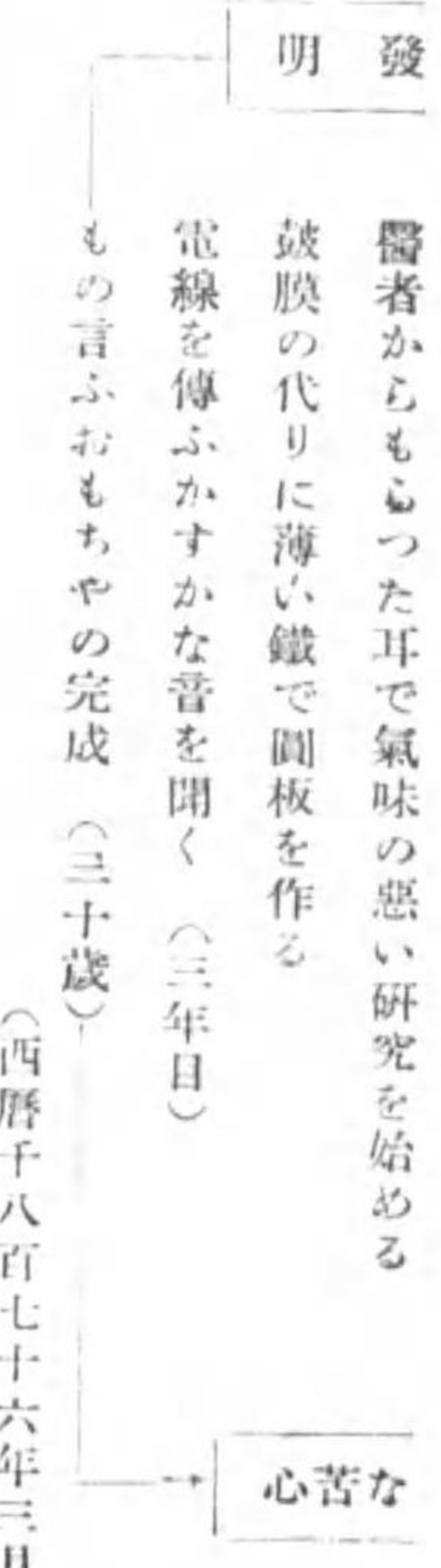
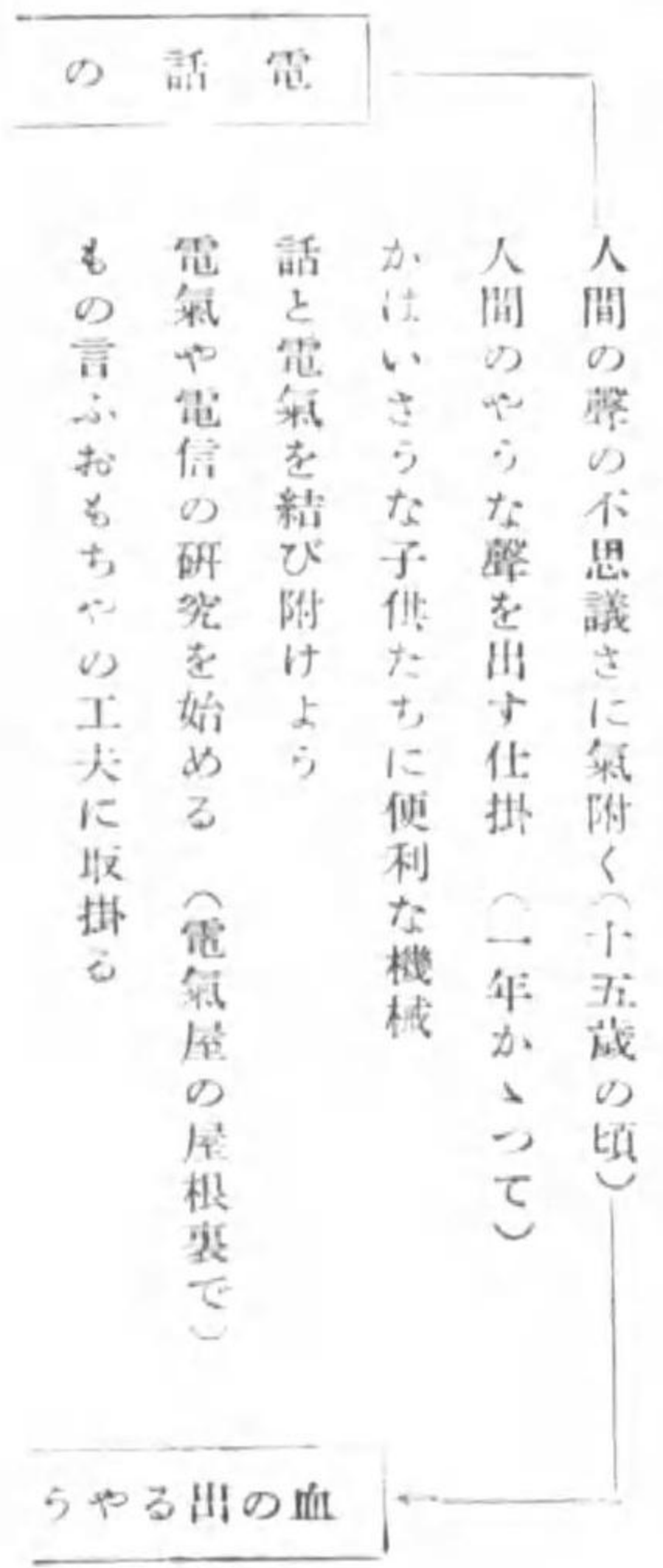
11 默讀。



- 12 ▽前項の文意を確認させる意味で。指名讀。
- 13 ▽全課を成るべく一氣に。ノートを整理して提出させる。

第三次指導

- 1 通讀練習。
 - ▽個讀に自由讀を交へて。
- 2 發明段階の考察吟味。
 - ▽最初の人間の聲に不思議さを感じた事から最後の「もの言ふおもちゃ」の完成に至る迄の各段階を探索深究させる。
- 3 話方練習。
 - ▽前項の發明段階に感想を交へて。輪讀。
- 4 ▽座席の順に、又讀んだ兒童に指名させて。挿畫の觀察吟味。
- 5 ▽四十九頁の「もの言ふおもちゃ」では發明段階を考察させ、五十頁の肖像ではベルの人柄を想像させる。
- 6 低音讀。
 - ▽場面の雰圍氣に讀浸らせて。
- 7 演習。
 - ▽文脈を辿つて文圖を作製させる。



- 8 學習事項の整理。
 - ▽ベルの何處がえらいか？ ソトソンは？
 - 何が發明させたか？ 聲啞に對する同情は？ 發明の感激的場面は？ 等。
- 9 既習の類似教材と連絡させる。
 - ▽磁石・僕の望遠鏡・木の高さ・振り時計・自動織機・飛行機の發明等。
- 10 補充説話。
- 11 話方練習。
 - ▽學習事項に話材を求めて。就いて。
- 12 視寫・聽寫練習。
- 13 新出文字の書取。
- 14 語句の應用練習。
- 10 テスト。

テスト問題

- 一、次の語句を番號で結んで意味の通る文にしなさい。
- 1 血の出るやうな苦心が () 不思議さに氣附きました。
- 2 電氣に話をさせようなんて () 人の耳をもらつて來ました。
- 3 其の後月日は () 又續けられました。

- 4 知合の醫者から () こつけい千萬だ。
- 5 ふと人間の聲といふもの、 () 矢のやうに流れ去りました。

二、次の書取をしなさい。

- 1 オンセイ 2 キノドク 3 ジツケン
- 4 デンシン 5 ヤネウラ 6 シンドウ
- 7 イチデウ 8 セイリ 9 センモン
- 10 セイレキ

三、次の熟語を二つか三つ使つて短文を作りなさい。

- 原理 機械 研究 發明
- 便利 熱心 電気 學者

教材の劇化

第一場

場所 電気屋の屋根裏
 時 西曆千八百七十六年三月十日
 人 グラハムベル
 助手ワトソン

(幕が開く舞臺はアメリカ・ボストン市の或電気屋の屋根裏、今いろ／＼の機械を前にして二人

はしきりと話をして居る)

ワトソン君、君はよく僕のたのみをきいて、こんなところへ来てくれたね。

でも私は機械が大好きですから、先生が面白い機械を發明なさると聞いてすぐ参りました。

その發明も出来るかどうかやつて見なければわかんないが、今迄聾啞學校にゐて、耳や口の不自由な子供たちを澤山見るにつけ、何とかあのかはいさうな子供たちのために、便利な機械を作つてやりたいと思ひついたのでさ。

ワトソン そんな機械が出来ると、ずいぶん助かりますね。

ベル それで第一に考へたのは、話をする時に起る空氣の振動を目で見える工夫さ。

ワトソン この器械がそれですか。(前の器械を指さして)

ベル さうだ。それから電信は電氣の作用によつて點や棒の符號を使つて通信するのだが、其の符號の代りに人間の聲を用ひることは出来ないものか、それをこれからやつて見たいんだ。

ワトソン それは面白いですね。私も一生けんめいにやりますから、どうぞ教へて下さい。

ベル どうせ、屋根裏のひどい所で、すまないが一つ手助つてくれ給へ。

ワトソン どんなに不自由でも、先生といつしよなら!

(助手のワトソンは感激してベルの顔を見上げる)

——幕——

第二場

場所 電気學者の應接間
 時 前場の翌日
 人 グラハムベル

電氣の學者

ベ
ル
者
學
者
ベ
ル
者
學
者
貝
者

（幕が開くと二人は今話し込んでゐる。電氣の機械がいろ／＼ある）
私はお願があつて伺ひました。一つ先生お教へ下さい。
まあ、どんな事か、私が知つてゐる事でしたら。
私は電氣を使つてお互に話の出来る機械を作りたいと思つてゐるのですが。
え？あゝ、又あのものを言ふおもちやの話ですか、電氣に話をさせようなんて、こつけい千萬だ。
いや、さうおつしやらずに。
だめ／＼、そんなひまは、私にはありません。
（といつて立ちあがる）

——幕——

第三場

時 夏（木々の梢は緑を増して
風にそよぐ）
所 電氣屋の屋根裏
人 グラハムベル
助手のワトソン

（幕が開くと二人は二室に分れ無言でせつせと研究してゐる。ベルは針金や磁石や時計のぜんまいなどを取付けた機械を相手に考へながらやつてゐる。ワトソンは先生の機械と電線で連絡した別の機械を調べてゐる）

第四場

所 屋根裏のベルの部屋
時 それから幾月も立たぬ或日
人 グラハムベル
助手のワトソン

音 ボーン（裏でかすかに）
（ベルは飛び上つてワトソンの部屋へかけ込む）
君、今どうしたんだ。其の機械を動かしてはならん。（ベルの手は震へてゐる）
今ちよつとこれをかうしたばかりです。（機械を手でおさへて見せる）
え？ どれ、ぢや、もう一度、やつてごらん。
（と自分の部屋へ又かけもどる）
音 ボーン
あッ、聞える。しめたッ、ワトソン君、ワトソン君、聞えるよ、電線を傳つて音が。さ、今度は君の耳で聞いてくれ。
（ワトソンはあたふたと自分の部屋にかけ込んで、機械にかじり附く）
音 ボーン
聞えました。先生。
聞えたらう、さあ、もう一息だ。出来る、きつと出来る。電線で話が出来るやうになる。
（ベルは聲を震はせて言ふ）

——幕——

(幕が開くと二人は自信ありげに機械を見詰めて立つて居る)

ベル さあ、實驗して見よう。今日こそ、うまく行くかどうか、最後の日だ。

ワトソン 大丈夫です、先生。

ベル ちや、僕が話すから、君は向かふの部屋へ行つて聞いてくれ。

ワトソン おつとがつてん。(とあたふたかけて行く)

ベル (獨ごと) うまく行くといゝがなあ。(間) 用意はいゝか (大聲で)

ワトソン はい。

ベル ワトソン君、すぐ来てくれ給へ、用事があるから。

ワトソン (びつくりして思はず機械を取り落す。そしてあわて、ベルの部屋に飛込む) 聞えました、聞え

ました。先生の言葉が、一々はつきり聞えました。

ベル ほんたうか、何と聞えた。

ワトソン ワトソン君、すぐ来てくれ給へ、用事があるからつて、はつきり聞えました。

ベル ほんたうか。

ワトソン ほんたうです。

ベル あ、今こそ、もの言ふおもちやが物を言つた。

(二人はしつかり抱合つて狂氣亂舞する)

— 幕 —

第九 瀬戸内海

瀬戸内海は吉野・阿寒・中部山岳・十和田と共に国立公園として、其の名は世界的に知られて居る。本課は此の瀬戸内海を叙した文語文の地理的教材で、一字一句を煎じ詰め、吟味され推敲され盡した名文章だ。何處に一點の難の打ち所も無く、簡にして要を得、流暢にして明快、言はゞ典型的叙景文の好模範として、其の體を得た堅實な雄篇だ。

時代が時代丈に稍奢的な措辭や技法では有るが、然も定石を踏んで一糸亂れず、句を重ね文を疊み、美言・麗句の限りを極め、朗々掬すべく其の描寫の巧な點や歴史的回顧の豊かな點等、尙捨て難き趣がある。本卷に至つて内容は勿論、形式上の文學的水準がズツと高められ現代色を帯びた事は、本課と他課を比較して讀めば直ぐ分る。舊讀本の再録ではあるが、兒童に全文を暗誦せしめ、文語文の滋味を味はせるに絶好の教材であらう。

挿畫の印象と其の説明

第五十三頁は廣島縣の東南部、沼隈郡鞆町の海岸一帯、所謂鞆の浦の鳥瞰寫眞で、瀬戸内海隨一の景觀として有名である。此の地は福山市の南一四軒、町は海岸の小島に自然と發達した鉤狀の砂嘴上に在り、他の二つの小島を利用して港灣とする。寫眞面の近景が即ちそれである。海を距て、(約三百米)前面に横たはるのは仙醉島で、全島松の美林に蔽はれ、奇岩・洞穴(七浦八洞窟)多く、中央部に大彌山(海拔一五九米)

が聳える。其の中間にある二つの島は大きい方が辨天島・小さいのは玉津島、どちらも畫の様に浮んで居るが殊に辨天島は全島巖石簾はれ、朱塗の辨才天堂が巖上青松點綴の間に隠見し、天然の美と人工の妙と相調和して一幅の活畫を成す。遠くに點在する小島は神功皇后に縁の皇后島・名も床しい躑躅島、其の景觀は古來天下一の絶讃を博し、今朝公園として名勝地に指定、西南四軒の阿伏兔岬には阿伏兔觀音の大悲閣がある。

文字語句

新出文字

接賞

讀替文字

鮮

(新出は卷十、セン)

古

(新出は卷五、フルイ)

立

(新出は卷二、タツ)

語句と其の説明

瀬戸内海 本州・四國・九州間に介在する内海で、下關海峡・豊後水道・鳴門海峡・紀淡海峡に依つて外洋に通じて居る。此の内海は大體大阪灣から周防灘に至る迄の海面に、淡路島を除いて島々が主として二箇所に群集して居る。東の群れを備讃群島と呼び、西の群れの東部を藝豫群島、西部を周豫列島等と呼ぶ、そして是等の群島が夫々海面を區切つて播磨灘・備後灘・安藝灘・伊豫灘・周防灘を形成して居る。内海北岸の地域的大部分は主として花崗岩等の深造岩で出来、山の頂に少しづつ古生層の部分を露出する所もある。内海南岸の四國では讃岐・高繩の二半島が悉く花崗岩地域で、高さに

於ても中國地方の山々と甚だしく類似して居る。又南北沿岸地帯の部分々々に、瀬戸内海の長軸の方向に並行して著しく斷層線を成す傾向がある。これらの事實は中國と四國とが嘗て陸續きで有つた事を立證するもので、過去の地質時代に頻と起つた斷層陥落の結果として中間に海面を構成し、陥落し残つた部分が島々乃至は半島を形作つたものである。従つて内海の島々は何れも地盤が花崗岩若しくはそれに近い石英斑岩等で出来て居り、其の上部に古生層の水成岩を戴くものが多い。又古生層の代りに安山岩を戴くものもある。安山岩にしても花崗岩にしても石材として之を採掘し、都會地に輸送するに最も便利である。何れの島も渚の邊り一面に花崗岩が露出し、波浪乃至は雨水に依つて削磨された岩石の細片が花崗岩・岩根の下に白い沙濱を形成し、岩の上の綠蔭の計りの松と相反映して瀬戸内海獨特の風光を畫き出して居る。相望む所 見え合ふ所の意。すぐ見える位でよい。實例を挙げて具體的に合點させて欲しい。海峡 陸地に挟まれた海の狭い水路。瀬戸。海門。かいかふ。各海峡の位置や地形は地圖を示して指導すべきは勿論である。其の他皆同じ。岬 海中に突出した陸地の尖端。山脈の末端又は沙嘴に依つても生ずる。灣 海水の深く入込んだ所。いりえ。入海。浦等は略同意に用ひられる。港は之に對して船をつけるに都合のよい所と考へられて居る。津は港と同義語。島 水に圍まれた小陸地。大なるを島、小なるを嶼といふ。水路 船の行くみち。航路。ふなち。きはまるが如く きはまるは行きつまる。島と島とが相重つて、水路がふさがつたやうに見えること。島廻り 船が進むと島が次から次と現れては去り、現れては去る様を言ふ。島がぐるぐる廻り、海もそれに連れて廻る様だと船から眺めた景色を形容したもの。口調

の面白さを味はせて欲しい。 **島山** 島の山。山から成つた島。萬葉にも、島山のよろしき國とこゝしき伊豫の高ねの“等とある。山海に對して島山（タウザン）と音讀しても良い。 **白壁** しろかべ。瀬戸内海一帯殊に廣島地方の特色。 **點在** あちこちに散らけてあること。ちらほらとあること。散在。 **島がくれ行く** 島にかくれて行くの意。古今集の“ほのく”と明石の浦の夕ぐれに島がくれ行く船をしぞ思ふ“の歌を思はせる。蓋し此の措辭も其處から出たものであらう。 **のどかな** 氣がのんびりする。 **漁火** 漁をする際に焚く火。いざりび。 **波間** 波のあひだ。波の中。なみま。 **夜景** 夜のけしき。夜色。 **一段のおもむきあり** 一入面白味がある。一段はひときは。一層。おもむき（趣）は物事に就ての感興。趣味。雅致。 **良港多く** 海岸の前に島があり、其の島蔭が港として發達して居る箇所が瀬戸内海沿岸には極めて多い。向島（ムカヒジマ）に對する尾道、江田島に對する吳、彦島に於ける下關、興居島に於ける高濱、仙醉島に對する鞆等が皆それである。島との間の海峡が常に潮流の通路と成る爲可なりの深度を有し、且つ附近の交通路を集中するが故に船舶の輻輳する事が多い。尾道の如きは向島との間の細長い川かと疑はれる港灣に、所狭い迄に大小の船が群集して居る。小豆島の土庄、因島の土生、大崎上島の木之江、大崎下島の御手洗、倉橋島の音戸、長島の上關の様に瀬戸内海には島自身が良港であるものが多い。其の他内海中の重要な港としては大阪・神戸・高松・今治・吉浦・宇野・宇品・御手洗・多度津・高濱・阪出・長濱等の諸港を擧げる事が出来る。 **名勝の地** 景色や古蹟等で名高い所。名所。勝地。勝區。 **巖島** 山陽線廣島から少許宮島驛に下車し、連絡船十分許にして達する。島は松を主とした森林蒼鬱として入

れば直に深山幽谷の趣を成し、三々五々鹿の群れ樂しみて人に餌を求むるあり、其の神社は天照大神の御子市杵島媛命を奉祀せるもの、丹塗の廻廊潮の洗ふに任せ、其の満潮の時は文字通り宮殿廻廊浮べるが如く、百八の銅燈・外濱の石燈總てに火を點ずれば眞に龍宮に遊ぶの感がある。屋根の傾斜緩く能く藤末美術の優美な氣分を現し、宮の前なる豊臣秀吉が築いた千疊閣に登れば、豪快の氣自ら湧起つて桃山時代の雄大な氣分を感得するを得べく、閣後の五重塔は釣合頗る妙に、塔が岡の多寶塔も亦雅趣がある。然も是等の堂塔は能く背後の深緑と相調和して一幅の畫圖を作り、若し夫れ雨將に霽れんとするの時、千疊閣に登らんか彌山（ミセン）岩船の山を徂徠する霧雲の或は山を包み、或は絶えて老樹の上に昇る景觀は到底筆舌の名狀すべき所でない。正に天下の名區として世界的に名を馳せて居るのも決して故無き事ではない。 **屋島** 香川縣木田郡に屬し、高松市を隔てる事少許、一小河を隔てる海島である。一の谷に敗れた平軍が此處に城を築いて守つて居たのを、文治二年二月十六日九郎判官義經五艘の船に乗つたる五十騎の兵と共に阿波の勝浦に上陸し、十九日屋島内裏の向浦に迫り、牟禮・高松の民家に放火した。平家方之を見て大軍到れりと爲し海に浮ぶ。源軍行在に放火したが、やがて兩軍の矢合せあり、夕方には彼の那須餘一の扇的の事があり、悪七兵衛景清と三徳屋十郎との鏖引があり、義經の弓流しが有つた。佐藤繼信の死んだのも此の時、更に廿一日軍利有らずして平家方は退いて壇の浦に遁れた。此の思出の島は東西に長く長徑五十町、恰も屋棟の如くである。山麓より登路十數町にして達すべく、山上の屋島寺には源平の遺物を多く藏して居る。古戦場は其の東麓で山角の海中に突出した地點、即ち今の長崎は安徳天皇行宮の跡である。然して島は將に半

島化せんとし、狭小なる水路其の南部に通じて繞る邊り、地文學上からも好個のものであり、山上の眺望に至つては天下一品、前には男木島・女木島・大島等の島々を浮べ、遠くは山陽の連山淡靄模糊として雲の棚引くが如く、近くは高松市の屋瓦の間から清く美しい玉藻城の白き姿を現した光景恰も畫けるが如くである。

壇浦

下關の東郊、驛から廿五町の海岸に在る。平家一門没落の哀史は今尙人の腸を斷つものがある。間近い赤間宮は官幣中社で、其の境内に隣れる淨域に安徳天皇の御陵を拜する。石壞れ苔に埋れた平家一門の墓を弔ふ。見るもの總て當時の哀を物語らぬものは無い。

感興

おもしろみ、おもしろさ。逸興。高興。

甚だ切なり

切は急なること。せまること。切迫。

甚だ切は非常に痛切だ、頗る切實だの意。

風光

けしき。風景。多島海の風景としての瀬戸内海

は夙に世界的に其の名を馳せて居るが、殊に國立公園の區域に取入れられた備讃瀬戸は百二十餘の島嶼を聚め其の代表的風景を成し、新割山・鷺羽山・本島・白石島等からの展望最も傑出する。尙嶺岩臺地の屋島・集塊岩の寒霞溪等は輒の仙醉島と共に古來の名所である。

國立公園

國家が管理する公園で、一國の風景を代表して傑出せる自然の風景地を劃し、永遠に互り國民が之を享用し得る様

施設した自然公園の一種である。即ち國立公園は第一に都市公園の如く人工に係る公園では無く、自然の創造に係る公園であり、其の風景は全體國民が之に興味を抱き、少くも日常生活では體驗し得ない靈感に觸れ得る程度のものであり、従つて國家は之を永遠に破壊されぬ様保護すると共に、國民一般の利用に適する様施設する義務と責任とを負はされて居る。現在指定されて居る我が國立公園は、阿寒・大雪山・十和田・日光・富士・中部山脈・吉野熊野・大山・瀬戸内海・阿蘇・雲仙・霧島の十二

箇所で、北海道及九州に各二箇所、本州に於ては奥羽・關東・中部・近畿・中國・四國に各一箇所乃至二箇所宛を有し、分布上妥當であると共に夫々特異の氣象的環境に在つて特色ある風景を展開して居る。加ふるに我が國立公園は山嶽・湖沼等を中心とするもの、外、瀬戸内海及吉野熊野國立公園の如く海岸を中心とするものが有つて、海國日本を代表する意味に於て興味深きものがある。むべなり。むべは肯ふ意に言ふ語。實に然るべく。さもあるべく。げに。うべ。なるほど。ほんに。

資料

原 據

瀬戸内の花崗岩 (志賀重昂著、日本風景論)

瀬戸内海、馬關より淡路島に到る、瑠璃一碧、大小の島嶼星羅點接す。蓋し今の中國・四國たる、太古相聯絡したるも、海水の浸蝕、地下の變遷に因り、分離して此所に『瀬戸内』なる多島海を化成せしもの、而して這般の島嶼たる、淡路島の北半全部を始め、十中八九は花崗岩より構造せらる。若し夫れ春といへば霞にけりなきのふまになみまに見えし淡路しまやま 俊恵法師
の候となるや、縦令平常太氣の乾燥せるも、猶ほ且つ淡靄は諸島の頂上若くは中腹を籠め、燕子新に來りて、恰も

うす曇にかく玉つきと見ゆるかなかすめる空にかへるかりがね 津守國基

を見るや、鳥裡の麥笛漸く秀で、而して鳥の地積素は些少、爲に岸崖より直に岡隴を作すを以て、麥浪は海浪と瀾漫して相接し、農舍蟹屋其間に突兀し、桃花菜花之を繞り、舟は綿繡圖畫の中を行くが如し、既にして東南風の季節となるも、風は四國中央の山系に障屏せられ、其餘力のみ微かに到り、海

面細く紋を生じて、水の如き一輪此間に躍り、花崗岩反映して更に皎潔を増す、會々汽船を走らして此の間を過ぐ、月色の大觀此の如きもの復た他處に需むべけんや。漸くにして秋氣長空に横はり、風霜花崗岩骨を硬すや、楓樹は錦を溪谷に織り、鳥際の風煙染むるに似、特に小豆島寒霞溪（原名神懸）の如き、紅葉は花崗岩火山岩の表に鋪錯し、其の勝丹青も畫く能はず、實に諸島に冠絶す。秋去り、冬來り、六花消滅として飛ぶや、雪の白は花崗岩の白と映發し、諸島皆啞々、風趣更に一層。春、夏、秋、冬、其の景象此の如く妙、而して舟を此間に行らんか、海、鳥嶼に圍繞せられ、宛として湖に似、忽ち窮まらぬが如くして、鳥轉じ海開き、復た窮りて湖を作り、復た開きて舟を通ず。變化百回、宜なり歐米人の激賞して『世界の絶勝』と呼ぶや。

指導精神

風光を以て世界に知られた我が國には、到る所に水清く山麗しき形勝の地が少く無いが、本課も亦其の誇の一つである。本卷には巻頭の吉野山を始めとし、阿寒・中部山脈（日本アルプス）十和田と四つの國立公園が頭を揃へ、互に研を競ひ獨得の景觀を誇つて風光日本の面目を躍如たらしめて居る。蓋し本卷特色の一たるを失はない。本課はづつと以前の讀本から卷中の佳品として愛誦された教材であるが、再録の都度精鍊され一段と光彩を發揮して居る。人に依ると此の種の教材を時代後れだとか、新しい文章の行方から遠ざかつて居ると言つた非難を試みる者もあるが、凡ゆる形式を知らせる上から斯うした形の文章も有つて然るべきだと思ふ。勿論無技巧の技巧と言つた見地から言つたら幾らか鼻につく嫌も無いではないが、文章の一つの體として親しませて讀く事も強ち意味の無い事では有るまい。人の趣味感興は理窟一點張で律する譯には

行かない。所謂無用の用で、時には斯様な修辭たつぷりの文章を讀ませて見る事も興味ある事であらう。

總じて文章の體様は題材の性質に依つて異なるべきで、本課の如きも碎けた現代語で書き表す事も勿論可能では有るが、然しあの瀬戸内海の濃厚な色彩美は矢張此の種の濃艶な叙法が相應しく、句を重ね文を疊んで宛然厚化粧でもしたやうな修辭たつぷりの姿態が此の情調と合致する。恰も畫筆を執る様なもので、南畫には南畫の題材があり、洋畫には洋畫向の題材がある。西洋人の眼を惹く風景と我々日本人が歡迎する風光とは自から其の質を異にして居るやうだ。従つて西洋人には油繪具でこて／＼塗固めた油繪が喜ばれるし、我々日本人は素朴・枯淡を喜ぶと言つた傾向がある。結局南畫趣味である。瀬戸内海の風景は南畫では駄目、矢張あの濃艶な風景は油繪具でこて／＼行く洋畫で無くては巧く描けない。本課の面白味も其處に在つて、何處迄も洋畫趣味である。油繪の氣持だ。本課の末尾にも『我が國に遊べる外國人は、早くより内海の風光を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり』と洋畫趣味で文を結んで居る。

本課は大體六つに分れて居るが、思想的には五つに分けて取扱ふが良い。第一分節では瀬戸内海の位置・境界を述べ、第二分節は海上の眺め、鳥かと見れば岬なり“の名文句が目につく。第三分節は内海の風光で、前半は晝間の景色、後半は夜景、第四分節では内海通航の汽船の有様等を叙し、最後は内海中の名勝を擧げ、外國人の讚辭と國立公園に指定された事を述べて力強く結んで居る。文の主要な箇所は第三分節の晝と夜との叙景、即ち内海の風景美に在る。全篇美的價值を狙ひ、純知的に成る冒頭の一段に於ても、言葉の續き工合や句の切り方等、可なり苦心が拂はれて居る。『本土の西』と言ひ、『淡路島の東端』と言ひ、『相望む所』と言ひ、『四國に近き所』と言ひ、何れも名詞止にして句法の變化を見せて居る。

斯くて冒頭先づ内海の位置と境界を明かにし、更に第二分節に入り『瀬戸内海には』とそれを受けて居る。文章法から言ふと所謂連鎖法で、讀むからに流麗の感を伴ひ自づと快感を咬られる。斯うして愈々内海の風光に移るのであるが、此の叙景が如何にも巧妙を極めて居る。句の長短を巧に按排し、短句を置いた次には長句を以て之に配し、長短斷續、其の調節が頗る面白く、一弛一張、節奏豊かに音樂的の快感を咬る。

『島かと思れば岬なり岬かと思れば島なり』……………(長々)

『一島未だ去らざるに一島更に現れ』……………(長短)

『水路きはまるが如くしてまた忽ち開く』……………(長短)

『かくして島轉じ海廻りて、其の盡くる所を知らず』……………(短々長)

斯様に句を重ね文を疊んで、如何にも濃麗に内海の風光を叙して居る。評者は餘りに誇張に過ぎると非難して居るが、之は内海の風光を知らぬ人の批評で、現實の風光に接すると、斯うした景色は到る所で眺められる。全くの實景で、誇張の非難は當らない。

次に晝と夜との景色であるが、此の叙景も頗る濃麗で、誇張に過ぎると苦情が多いが、之も偽らぬ實感である。實際内海を舟で渡ると、之に勝る濃麗な景色が眼前を去來する。あの美しい鏡の様な内海、宛然湖面を滑るやうだ。其の廣い青々とした水の上に大小幾多の島々が浮んで居る。それがみんな綺麗に耕されて、麥や菜種が栽培されて居る。所に依つては桃や蜜柑等を栽培して居る所もある。それが春になると綺麗な花で飾られ、ちやうど花御堂を見る様な美しい景色を見せる。青い麥、其の間に黄金色の菜種が織交られ、淡紅色の桃の花が點在して居る。夏蜜柑の黄色い實が葉の間からチラ／＼見える。全く花御堂を見るやうだ。

さうした實感を此處では簡単な對句で表し、代表的に春と夏との景觀を叙して、其の他は讀者の想像に任かせて居る。

『春は島山かすみに包まれて眠るが如く』……………(春—眠る)

『夏は山海皆緑にして目ざむるばかり鮮かなり』……………(夏—目覺る)

巧妙ではあるが、實感以上に出でゝは居ない。ズツと以前の讀本には

『秋の山は紅葉の錦を織り』……………(秋—錦—織り)

『冬の樹は白雪の綿を重ね』……………(冬—綿—重ね)

と四季の景色が揃へて有つたが、之は餘りに書過ぎで却つて餘情を殺ぐと言ふので削除されて居る。瀬戸内海の景色は春夏秋冬四季とり／＼で、何時見ても好い景色である。特に秋の景色は又格別で、どの島もと言ふ譯では無いが、到る所に紅葉で知られた名所がある。嚴島と言ひ、寒霞溪と言ひ、其の他紅葉の勝地は幾つもある。冬の眺めも無類で、暖國の雪景色は花よりも綺麗である。眞綿を千切つて投げる様な牡丹雪が降り出す、見る間に島々は眞白い雪に包まれる。其の銀白の島々が藍靑の様な眞青い海の上にクッキリと浮んだ景色は全く言語に絶する。あッ綺麗だと厭かず眺めて居るうちに、間もなくサラ／＼と消えて行く。ほんの瞬間である。長くて一二時間、其の消え足の速いのは散り易い櫻も朧である。春夏に附帯して補説して欲しい。

『海の靜かなることは鏡の如く、朝日・夕日を負ひて島がくれ行く白帆の影もどかなり。』は朝夕の眺め、
“ほの／＼と明石の浦の朝霧に島がくれ行く船をしぞ思ふ”の古歌も思ひやらる。『月影のさゞ波に碎け、漁

火の波間に出没する夜景もまた一段のおもむきあり。』は夜景、湖水のやうな内海、波一つ立たぬ鏡の様な水の面、天邊の月、又一入の趣がある。況して漁火が其の波間に出没する眺めは何とも言へない。瀬戸内は漁業が盛で、沿岸の住民は多く漁業に依つて生計を営んで居る。従つて夜間は四國・中國の沿岸や大小幾多の島々から漕出す漁船は數知れぬ程である。其の漁火がチラ／＼見える景色は、實に名狀し難い美觀である。問題は兎に角、詩でも朗吟させる様な氣持で反覆誦讀させて欲しい。

指導形態

指導上の認識點

- 1 瀬戸内海の位置・景観・沿岸諸港・名勝地等を各觀點から認識させ、我が國土の美觀に十分の自信と優越感を把持せしめる。
- 2 敘景と文語の好き調和に着目させ、各觀點に依る彙類叙列の表現機構を知らせ、文學趣味を養ふ事も忘れてならぬ着眼である。
- 3 内容上からは地理乃至國史學習と連繫を保つは勿論であるが、讀方としては成べく饒舌を避け、文に即した解釋と常識指導の程度に止むべきである。
- 4 指導は大體三時間を限度とし、地圖・挿畫

等を活用して手際よく指導を纏める心構が肝要である。

第一次指導

- 1 題目の指導。
▽既習の地理學習と連繫させ、地圖を示して位置や地域の大體を概観させる。
- 2 一度靜かに通讀させる。
▽第一印象其の他は整理して残らず記帳させて置く。
- 3 景観の大體を掴ませる。
▽景色の特徴を探らせて記帳させる。

4 新出文字の指導

▽字書の引方を指導し其の都度輔導して索引させる。

接 鮮 古 賞 立

5 再度反覆通讀させる。

▽不明の箇所は記帳させて置く。

6 難語句の指導

▽質問を俟つて隨所に指導する。

相望む所 内海 岬 灣 無數 散在
未だ去らざるに 水路 きはまるが如く
忽ち開く 島轉し 海廻り 盡くる所
山海皆綠 鮮か 白壁の民家 點在 島
がくれ行く さゞなみ 漁火 波間 出
没 一段の趣 通航 たなびく 沿岸
名勝の地 感興 切なり 風光 賞して
國立公園 むべなり

7 地理的固有名詞の取扱

▽地圖を指示して位置を確め、煩瑣に互らぬ程度に附説を加へる。
本土 九州 四國 下關海峡 佐田岬

8 默讀

▽文の觀點に注意させて。

9 指名讀

▽適宜に句切つて、數名に。
文と挿畫を照合させる。

▽文のどこか？ 文にどう出て居るか等。

10 低音讀

▽全體の景観を頭に描かせて。
ノートを整理して提出させる。

11 第二次指導

▽全體の景観を頭に描かせて。
ノートを整理して提出させる。

12 輪讀

▽適宜に句切つて、座席の順に。

1 範讀

▽景観の特徴に注意させて。

2 追範讀

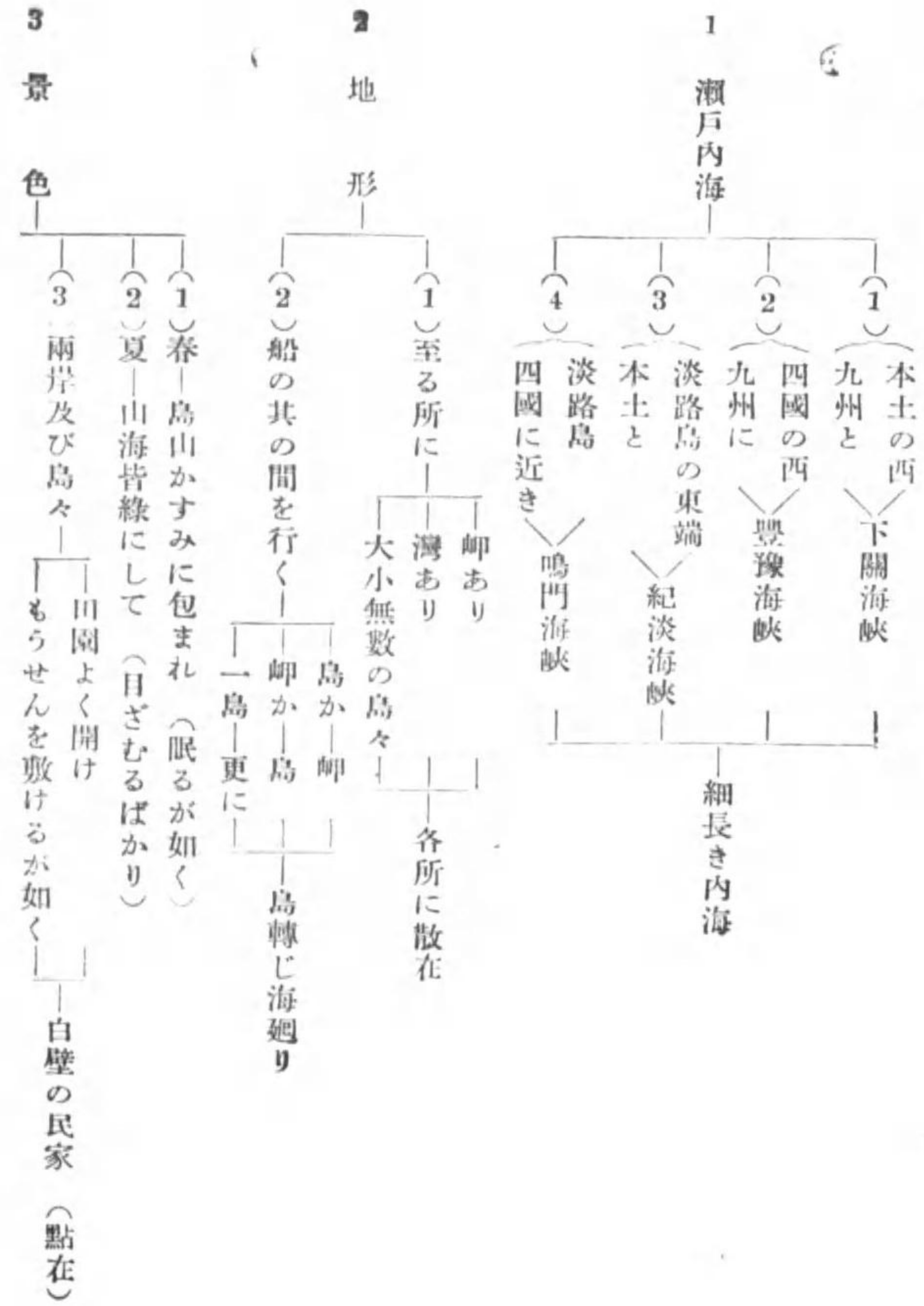
▽讀調子に注意し表現美を生かして。

3

▽讀調子に注意し表現美を生かして。

- 4 指名讀。
▽成べく全課を一氣に。
- 5 逐次研究。

▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し合自のノートと對照させる。



- 9 自由音讀。
▽文の個性や景觀の特徴を探らせて。
- 8 黙讀。
▽文意や感想を中心に。
- 7 話合。
▽文の表現面を辿つて。
- 6 文意の所在を確める。
▽文の表現面を辿つて。
- 5 話合。
▽配付した前項の文圖を中心に。



- 10 ノートを整理して提出させる。
▽文の感觸や表現美を味はせて。
- 第三次指導
- 1 指名讀。
▽中・劣生を主として。
- 2 文の觀點を言はせて見る。
▽文の中心は何處か、表現の勝れた所は？
描寫の巧な箇所？ 等。

3 機構の考察。

▽文脈を辿って、



4 既習の叙景文と比較させる。

▽地理的・歴史的内容を包含した點に着目させる。

5 形式美の考察味到。

▽文語の含蓄味と表現内容の聯關性に着目させる。

6 叙景の勝れた箇所を口語化させる。

▽先づ懇談的に箇所を選ばせて。

7 朗讀練習。

話方練習。

8 思ひ／＼にプランを工夫させて。

學習事項の整理。

9 學習事項の整理。

▽内容・形式の両面に互つて。

▽特に形式美を重視して。

10 視寫・聽寫練習。

11 暗誦・暗寫練習。

12 補充説話

▽教師の體驗を實感的に。

13 新出文字の書取。

14 語句の應用練習。

15 テスト

テスト問題

一、次の箇所を聽寫させる。

1 春は島山かすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目ざむるばかり鮮かなり。

2 海の静かなることは鏡の如く、朝日・夕日を負ひて島がくれ行く白帆の影ものどかなり。

3 屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

二、次の語句に振假名を附けなさい。

1 鳴門海峡 2 散在 3 白壁の民家

4 漁火 5 出沒 6 通航

7 風光 8 皆縁 9 佐田岬

10 淡路島

三、次の語句のわけを書きなさい。

1 大小無數 6 感興を動かす

2 島轉じ海廻りて 7 むべなり

3 名勝の地 8 一段のおもむき

4 源平の昔語 9 国立公園

5 水路きはまるが如く 10 朝日夕日を負ひて

第十 日本海海戦

日本海海戦は我が國史に燦たる足跡を残した計りで無く、世界史上に特筆大書さるべき大接戦であり、我が國威を海外に發揚した未曾有の大海戦で有つた。

日露の陸戦は旅順の陥落に引續き、奉天既に我が掌中の物と成り、世界に誇るロシアの大軍も殆ど潰滅し終つた折柄、日本海の大海戦こそ完全に敵を敗滅させる最後の大決戦で有つたのは、今更事新しく言ふ迄もない。

敵將ロジェストヴェンスキーが率ゐる第二・第三艦隊は一舉にし、我が艦隊及沿海を襲ふべく、堂々の陣を布いて來襲したので有つたが、一致協力・殉忠報公の赤心に燃盛つた我が海軍の爲、殆ど全滅に歸したのも、第一には彼我の軍人精神に大なる相違が有つたからだ。同年五月九日、敵艦隊が長驅して安南ホノコーへ港に着いた時分は、本國から頻々して革命騒動の通報があり、内亂に次ぐ内亂を知つて不安焦燥中に對馬海峡へ向つたのが彼等だ。

當時彼も第二・第三の大艦隊を擁して居たが、其の兵器は如何、彼の戰艦八隻に對し我方は四隻で有つたが、我が三笠の排水量は一五、三六二噸、敵の旗艦スウォーローフが排水量一三、五一六噸と言ふ有様で、大體に於て我方が各排水量も大きく、速力も二〇節前後、敵艦の速力は一七節平均で有つた。之に加ふるに我が軍の砲撃には強力の下瀬火薬が大いに威力を發揮した。我が戰艦四隻何れも十二吋砲四門、六吋砲一四門の

火蓋を切つて放ち、股々轟々海を壓して之を一齊に砲撃、乗員も強い上に兵器も精銳、二つ乍ら兼ね備へての海戦で有つた。

さればこそ、日本海の大戦に於ける我が海軍の威力に刺戟され、イギリスが急に起つて全巨砲主義 All big gun ship (オール・ビック・ガン・シップ) の新理想を實現し、其の第一號ドレットノート號が進水したのは西曆一九〇六年二月九日で、日露大海戦の翌春の事だ。そして列國間に超弩級建艦競争が起つたのだ。即ち日本海の大戦が強敵ロシアを屠つた計りで無く、列國の脅威と成つた事を思へば、當時の我が實力が如何に強大で有つたか窺ひ知られよう。

近代戦に於て必勝を期するには、第一に全國民の一致協力、第二には軍備であり、第三には財政である事は日露の役でも今次の事變でも立證される。本課の觀點は前半の戦況も勿論であるが、文の重心は後半の東郷司令長官の報告と、それに對する明治天皇の優渥なる御勅語に在るを忘れてはならぬ。

挿畫の印象と其の説明

第五十六頁の挿畫は海軍省軍部普及部の依頼に基き、東城鉦太郎畫伯の筆に成る日本海々戰記念の大油繪の縮寫である。東郷聯合艦隊司令長官が旗艦三笠の甲板上に双眼鏡を握つて海上遙に敵艦を睥睨した勇姿、皇國の興廢此の一戦に在りとのZ信號が左上に翻翻として翻つて居るのが見える。畫面は恰も午後二時五分有名な大轉艦の直前を描いたもので、東郷司令長官の向つて左は參謀長加藤友三郎少將、右方は戦況を記録する名參謀秋山眞之中佐、敵艦に備へる釣床に圍まれた羅針儀を前にして立つて居るは三笠艦長伊知地彦次郎大佐、其の左に双眼鏡を右手に海圖を俯瞰するのは航海長布目滿造中佐、艦長の向つて右後方は砲術長

安保清種少佐、階段に上半身を見せて居るのは參謀飯田久恒少佐、艦長の後方双眼鏡を持って敵方を睨んで居るのが乗組將校今村中尉、左端に蹲んで海圖を指して居るのは同枝原百合一少尉、中央に測距儀を持ち彼我の距離を測つて居るのは長谷川清少尉、右端傳聲管に囁り附いて居るのが玉木信助少尉候補生、其の他は傳令の下士官である。三笠の右方遙に見える艦影は第一戦隊の一部で、敷島・富士・朝日の諸艦、尙第一戦隊に屬する春日・日新・龍田及び第二艦隊の磐手・出雲・吾妻・淺間・八雲・千早等、各艦が蜒蜿として之に續行して居るのである。現在此の原圖の大油繪は海軍省内に掲げられ、當時の尊い回顧資料として珍重されて居る。尙東郷司令長官が左手に杖づく長劍は後鳥羽上皇の御番鍛冶一文字吉房の作、鞘の拵へは海軍長劍の小振り乍ら素晴らしい名刀、此の劍は明治三十七年旅順封鎖中、時の東宮に在した大正天皇が黒光侍從武官を懇々御差遣に成り、裏長山列島の根據地で同長官に賜はつたもの、今東郷記念館に秘藏されて居る。

文字語句

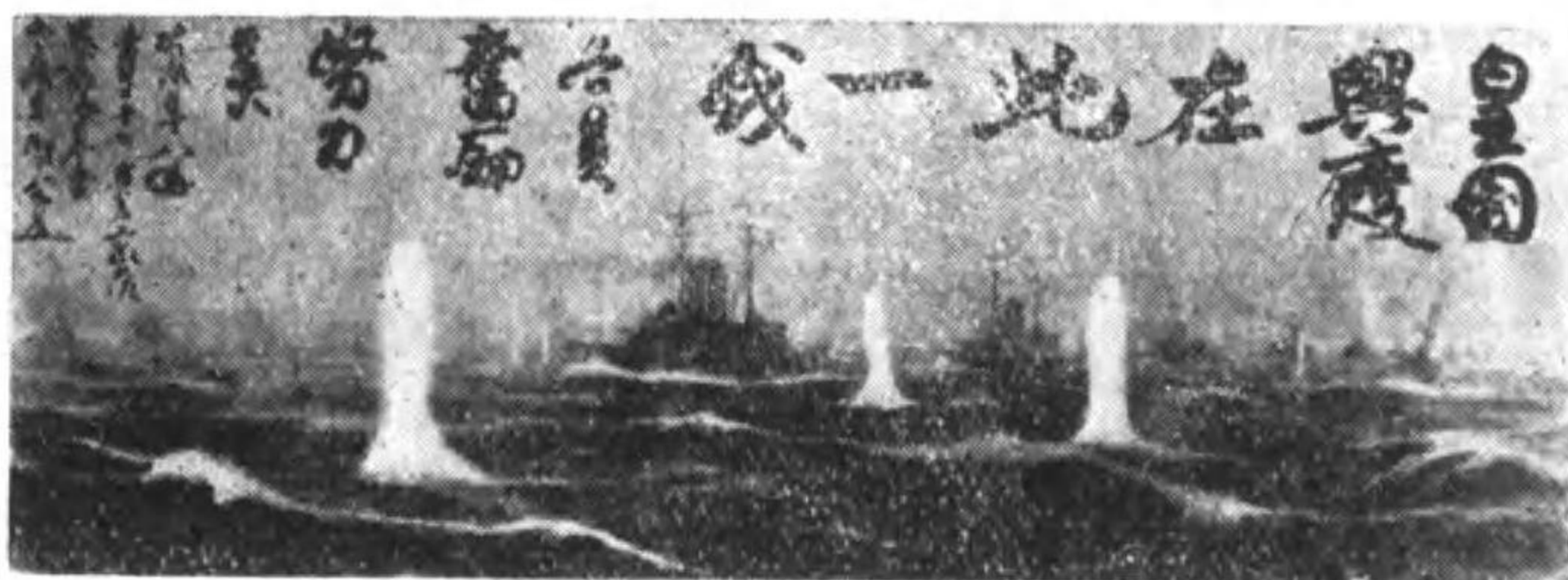
新出文字

編 鬮 距 熟 獲

讀替文字

擊 (新出は卷六、ゲキ) 豫 (新出は卷十、ヨ) 亂 (新出は本卷、ラン)
 着 (新出は卷四、キ) 逃 (新出は卷四、ニゲ) 包 (新出は卷四、ツツミ)
 捕 (新出は卷九、トラハレ) 泣 (新出は卷二、ナク)

語句と其の解説



日本海海戦 (東城鉦太郎筆・題字東郷元帥)

日本海 アジア大陸と日本列島との間に在る太平洋の屬海。面積一、〇四三、八二〇平方軒。アジア大陸と朝鮮半島とが其の西を劃し、樺太島・北海道本島・本州島に依つて太平洋と隔てられる。形態上縁海に屬する。海底は大陸側は急に深く、咸鏡南道の東方で三、二七七米。其の他の海洋に通ずる海峡、即ち朝鮮海峡・津輕海峡・宗谷海峡・間宮海峡は皆水深二〇〇米以内の淺海即ち陸棚である。日本列島はアジア大陸東方の陸棚の上に聳立し、日本海は其の間の陥没である。尙朝鮮海峡の陸棚は九州・中國の北に及び、隱岐島に及ぶ。此の北方に日本海の中央に突出する深度二、〇〇〇米以内の淺海がある。其の淺所は大和堆といひ、中心部に在つて深度四三三米、又渡島の遙か西方に一三八八米の潜峰がある。最深所は其の南に在つて深度三、六五七米、日本海全體の平均深度は一、五三〇米である。

日本海海戦 日露戦の運命を決し露國をして媾和を決意せしめるに至つた大海戦。明治三十七年二月我が國が露國に對して戦を宣するや、旅順を根據とせる露國太平洋艦隊は、漸次我が艦隊に撃沈されたので、露國は更にバルチック艦隊を太平洋第二艦隊として東航せしめ制海權を回復せんとした。軍令部長ロジエストヴエンスキー司令長官に補せられ、明治三十七年十月十六日日本國を發し、尋いで又編制増遣された第三艦隊と同三十八平五

月初旬佛領安南カムラン灣に於て相合した後、同月二十七日朝鮮海峡を通過し浦蘆斯德に入らんとした。是より先、我が聯合艦隊司令長官東郷平八郎は豫て今日あるを期し、全艦船の修理・人員の補充・軍需品の補給等を完備して後、鎮海灣に集結して日夜専ら猛訓練に従事、艦砲射撃に魚雷發射に全力を傾注した。五月二十七日午前四時四十五分對馬海峡の南方に哨戒して居た假裝巡洋艦信濃丸は北緯三十三度十分、東經百二十八度十分の地點に於て敵艦隊の北航するのを發見し、「敵艦見ゆ」の無電を發した。之が此の大海戦の序幕を成した。

連敗 引續いて負けること。戰ふ度に負けること。ま

けつけ。**全勢力** 勢力のすべて。こゝではありつ丈の艦隊。保有して居る艦隊の全部。

近海 海の陸地に接近した部分。近くの海。**全力** あらん限りの力。すべての力。全勢力。

朝鮮海峡 朝鮮半島と對馬島との間の海峡、幅約六〇軒乃至九〇軒。朝鮮と九州との間の廣い海峡の中央に對馬が横はつて朝鮮海峡と對馬海峡との二つに分つて居るので幅が狭くなり、國防・交通上に多大の影響を與へて居る。朝鮮側は屈曲に富み互濟島・鎮海灣・洛東江口・釜山灣等がある。對馬との間に航路や海底電線が通ずる。此の時我が艦隊は鎮海灣に集中して待機して居た。

哨艦信濃丸

假裝巡洋艦・哨艦は本艦隊を離れて、監視の任に當る軍艦。陸軍の哨兵に等しき任務に服する軍艦。見はりの軍艦。百武大將の當時の追憶談に、丁度廿七日の午前二時四十五分頃、信濃丸が哨戒線を北東の方に航行して居る時に西の方に當つて燈火を見た。よくよく見ると、白赤白のラレブを高く掲げて居た。それで之を確かめようとするけれども、ちようど東の方に月があつて自分が月と其の船との間にはさまつて居るものだから見難い。それで船を一旦廻して、其の怪しい船の後に廻つて速力を早め

つ、四の方から眺つて見ると（其の間に大分時間はかゝつて居るのですが）三橋二煙突で、どうも敵の假裝巡洋艦ぢやないかと思はれる。其のうち四時四十分頃に成つて段々近寄つて見ると、向うから電氣燈でもつて信號をする様子がある。どうも之は多数の船が一緒に成つて居て、さうして自分の味方の船と思ひ違へて、信濃丸を味方の船と思ひ違へて信號をするのぢや無いか、とも思はれる様な風であつたから、尙よく段々近寄つて、成川艦長（海軍大佐成川揆）は今や之を臨検して見ようと思つて居る刹那に、左舷の方に多数の煙の上つて居るのを見た。それは夜間の事であり、且は濃氣が有つた爲に今迄分らなかつたのですが、段々夜明けに近づいて來るし急に見え出した譯でありませう。

然も自分の位置は殆ど其の真中に突入して居る様な有様であつた。之は確にバルチック艦隊であると言ふ事を知つて、急に其の場を出る行動をとると同時に、あの「敵艦見ゆ」といふ無線電信を發したのである。かやうに寔に仕合せであつた。若し之が晝間か何んかで餘り明る過ぎたならば、あゝいふ假裝巡洋艦の速力は少く、目標は大きく、然も殆ど武装の無い艦ですから、一たまりも無くやられたかも知れぬ。さういふことを想像すると、運が悪ければ肝心な通信も出來ないといふやうな事にならぬとも限らなかつたが、發見の時刻が實に理想的であつた譯で非常に仕合せであつた、とある。

津島 福岡縣宗像郡の島。玄海灘の北方、壱岐の北東海中の一小島で、鐘崎の西北約七四軒。周圍三、九軒。地勢は島の北東角の斷崖から漸く高く中央に二三〇米の島峯があり、古名遠瀛島又は恩賀島或は宇佐島と言ひ、全島火山岩から成り、住民は無い。島の南面の山腹には宗像本宮が鎮座、天照大神と素盞鳴尊とが誓約の際生れ給ふた三女神鎮座の一所で瀛津島媛命（オキツシマヒメノミコト）を奉

祀。日露戦役の際、此の島の附近で常陸丸は沈没、又、露國バルチック艦隊は我が海軍に殲滅せられた。 **旗艦三笠** 一等戦艦、排水量一五、三六二噸、速力一八節、砲三〇種(十二吋)砲四門・一五種砲一四門・八種砲二〇門。東郷司令長官の旗艦として偉功を樹てたのは人の知る所。竣工當時は世界海軍の如何なる艦と比較しても最強最優の軍艦であつて、特に同年竣工した露國戦艦に比し著しく優越して居た。旗艦は艦隊の司令長官若しくは司令官の坐乗する軍艦。橋頭に上官の地位相當の艦を掲ぐるを以て言ふ。艦隊條例第十九條に「司令長官若しくは司令官の乗る所の軍艦を旗艦と稱す」とある。 **戰鬥旗** 軍艦が戰鬥開始の合圖に大橋頭に掲げる旗。 **信號旗** 信號に用ひる旗。海軍で用ひる信號は手旗信號・旗旋信號・發光信號・水中信號等がある。之に依つて晝夜共に互に離れて居る軍艦同志に自由に意志の交換が出来る。日本海々戦で東郷司令長官が發せられた有名な信號は「Z」旗一旋で「皇國の興廢此の一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ」といふ意味を表して居る。又トラファルガール海戦でネルソン提督が發した「英國々家は各員各々其の義務を盡さむことを期待する」といふ信號は三一箇の旗を綴り合せて掲げられた。 **興廢** 興ること、廢れること。のるかそるか。死活。 **奮勵努力** 奮勵はふるひはげむこと。心を奮ひ起して行を勵むこと。努力はつとめはげむこと。奮發すること。安保大將の追憶談に、聯合艦隊は途々敵に對する合戰準備を整へつゝ朝鮮海峡の東水道に向つたのであるが、午後一時四十分には敵艦隊を其の南の方に發見し、愈々戰鬥の運動に移り、且つ「皇國の興廢此の一戦に在り」の名稱はやがて旗艦三笠の橋頭高く掲げられた。此の時の東郷司令長官はと言ふと、右手に大きな双眼鏡を持ち、左手には長劍の柄をじつと握りしめ、最上艦橋の左側に立

たれ一段の落着と一層の緊張味をもつて敵方を睨みつゝ、必勝の決意は眉宇の間に躍如として、例の通り其の頬をふくらして居られた。東郷さんは何か非常な決意をされた場合には其の頬をふくらかされる癖があつて、此の時も正に其の頬をふくらせて居られた。其の風貌は今でも彷彿として眼の前に見える様である。愈々敵も目眩に迫つて、思ひ切つて敵前で我が艦隊の向きを變へる大角度の正面變換が決行された。其の刹那の三笠最上艦橋に於ける光景は、洵に何んとも形容の出来ない莊嚴と言はうか、何と言ふか、一種の史劇的シーンであつたのである、と。 **士氣** 兵士の意氣。武士的精神。

六隻の主戰艦隊 三笠・朝日・富士・八島・敷島・初瀬の六隻。以上一萬二千噸乃至一萬五千噸、速力十八節。司令長官(旗艦三笠) 中將東郷平八郎、參謀長島村速雄。 **上村艦隊** 第二艦隊。出雲・吾妻・淺間・常磐・磐手。以上九千噸級、速力二十節。司令長官(旗艦出雲) 中將上村彦之丞、

參謀長大佐加藤友三郎。 **敵の主力** バルチック艦隊第一戰隊、戰艦スウォーロフ・アレキサンドル三世、ボロヂノ・アリヨール。(以上何れも一三、五一六噸) 第二戰隊、戰艦オスラービヤ(一二、六七四噸) ウェリーキー(一〇、四〇〇噸) ナワリン(一〇、二〇六噸) 裝甲巡洋艦ナヒーモフ(八、五二四噸) 第三戰隊、戰艦ニコライ(九、六七二噸) 第一巡洋艦隊、オレーグ(六、六七五噸) アウローラ(六、七三一噸) ドンスコイ(六、七三一噸) **片岡・出羽・瓜生・東郷(正路)の諸隊** 片岡(第三艦隊)

中將片岡七郎(旗艦嚴島) 出羽(第一艦隊第三戰隊) 少將出羽重遠(旗艦千歳) 瓜生(第二艦隊第四戰隊) 少將瓜生外吉(旗艦浪速) 東郷(第三艦隊第六戰隊) 少將東郷正路。 **敵の先頭部隊は直ちに砲**

火を開始せしが 午後二時五分三笠は急に左折して東北東に變針し第一・第二艦隊の諸隊之に次ぎ、